

2020年度 九州大学人間環境学コロキウム
「分かり合えないことから始めるコミュニケーション」

講演者：菅原和孝¹

大澤真幸²

司会：橋彌和秀³

運営：人間環境学コロキウム実行委員会⁴

運営)

皆様本日は2020年度九州大学人間環境学コロキウム分かり合えないことから始めるコミュニケーションにご参加頂きありがとうございます。今回、本コロキウムの運営を務めます齊藤と申しますよろしくお願ひいたします。開催にあたりましていくつか連絡事項がございますのでご案内いたします。

始めに本講演会は録画録音を行っております。録画録音資料に関しましては公開いたしません、本資料を基に本公演の文字媒体で公開を予定しております。ご理解とご了承の程宜しくお願ひ致します。

次に本公演中はマイクをミュートにさせていただくようご協力お願ひ致します。ミュートが外れている場合につきましては運営の方でミュート状態にさせていただきますので御了承ください。またカメラを常時 ON で、なるべく上半身が映るように設定していただくようお願い致します。

また、途中で質問等がございましたらチャットの方にどんどん書き込んでいただくと、その後の質疑応答の議論が活発になりますのでぜひチャットへの書き込みもよろしくお願ひ致します。

以上が本日の講演会にあたっての連絡事項になりますが、またチャット欄はその他緊急連絡でも使えますのでそちらの方も注意していただくようお願い申し上げます。それではお待たせいたしました。これよりコロキウムを開催いたします。まず会の趣旨をご説明いたします。

本コロキウムは共感や思いやりと他者理解というような様々な形で分かり合うことを目指してコミュニケーションが推奨される現代において、分かり合えないというコミュニケーションの形が果たして忌避されるあり方なのだろうかという問いを出発点に、分かり合えないコミュニケーションについて根本から問い直すということを今回のコロキウムの大きなテーマとしております。こうした問いの元にですね、今回お二人の研究者の方に集まって頂きました。一人は人類学者の菅原和孝さん。菅原さんは、『言葉と身体』や、『身体化の人類学』、『感情の猿＝人』などの著作で、言葉のコミュニケーションが成り立つ地平を、身体のレベルから問い直そうとされてきた人類学者です。もう一人の社会学者の大澤真幸さんは『身体の比較社会学』や『社会学史』『〈世界史〉の哲学』、『自由と言う牢獄』など、社会について様々な観点から学問の分野を超えて理論的に研究されてきた社会学者です。

このお二人に今回は分かり合えないコミュニケーションということについて検討討論していただき、またフロアとのコミュニケーションもですね、しっかりとっておりますので、是非皆

¹ すがわら かずよし、1949年生まれ。日本の人類学者、京都大学名誉教授。

² おおさわまさち、1958年生まれ。社会学者、Thinking[O]主宰。

³ はしやかずひで。心理学者、現九州大学教授。

⁴ 以下、講演者が発言していないが、前後の文脈を補うために必要な文章を()内に付け加える。この作業・解釈はすべて本公演を開催・運営した人間環境学コロキウム実行委員会が行った。また、どうしても聞き取れず、前後からも内容を推測できなかった言葉には下線を引き、隣に「(聞き取り不可)」と記す。

さんも討論の方に参加していただけたらと思います。それでは早速菅原先生から発表をお願いしたいと思います菅原先生、よろしくお願いいたします。

菅原)

菅原です。聞こえますか。えーと、どれだ、これか。はいどうも待たせしました。えーっと今はもう6年近く前に京都大学を定年退職して、コロナ禍とは全くほとんど関係のない、ずっと自宅蟄居をして仕事してます菅原です。大変面白いテーマのシンポジウムにコロキウムにお招き下さりありがとうございます。私はちょっと PowerPoint 中毒みたいなどころがあるんで PowerPoint に沿って進めさせていただきます。副題がガキの頃から考えたことという、ガキということについてはすぐに説明いたしますので、まあ大澤さんと対談するに当たって若干の考えをまず述べさせてもらいます。かれこれ十数年前から親しい友人になったのですがまあ昔はしばしば酒食を共にしたんですが、思い返せば学問的な議論を真っ正面から交わすってことは比較的稀だったような気がします。で、まあ心苦しかったのは頂戴したままずっと積ん読状態になっていた大量のご著書があるんですが、これはまずいと思って最近、集中的に読みました。で、すごくおもしろかったんですが、ていうか、ていうかっけのはミッシェル・フーコー⁵の翻訳書によく出てくるいい回しですが、ていうか圧倒されました。これはやっぱり凄いわと思ったんですね。で同時に私自身の浅学非才、非才浅学を深く恥じまして、えーとまあこの最初の20分ではいくつかの話題は封印したいと思います。ただ対談の時に出てきたら話しますが、実は今日はなんだか気恥ずかしい気持ちが一方向であるんですが、まあそれとともにワクワクしてるということでもあります。

コミュニケーションもですね私はえっと2文字熟語の交通という言葉で今日はお話したいと思います。交通を巡る思考の基本的モチーフなんですが、私は比較的運ののいい人間だと思んですが、その運の良さの最たるものとして、生意気なガキをですね、対等の研究者として遇してくれた何人もの先達と出会えたということがありました。で私が出身母体は通称、伊谷スクールというところなんです、この伊谷スクールというのはですね、その知の命運ををとにかくガキどもに託してしまおうという、そういう実践共同体だったんですね。ですから今日の話では、二人も先達お導きとしたいと思います。一人は私が学部時から教を乞うてきた伊谷純一郎さんですね、もう一人が野村雅一さん。この方はもともとイタリア文学、イタリア史の出身の方です。実はいつまでもガキでいたい、これは私がもう一人世話になってきた形で杉山幸丸さんという方がいらっしゃいますが、彼は生涯、一書生というのをうたい文句にしてらっしゃるんですが、生涯一書生でいたいのは山々なんですが、年齢を重ねざるを得ないんですね。私の場合はその年齢を重ねるということはフィールドに行かない、そういう日々を反復するということでもあります。ですから我がグイ・ガナ、ブッシュマン⁶の方言集団ですが、グイ・ガナの友人達を含めてですね、死者たちとの対話が現在の生活の中心を占めてるとするのが基本的討論としてあります。

まず最初に交通の惨苦っていうことを。私が少年時代に新聞で見た写真、これが一つのトラウマ的光景としてまあ今までずっと焼きついてきました。実はうちにあるわずかな資料ではですね、本当に北京大学の教授が紅衛兵につるし上げられたという写真はないのでその代用ですが、皆さんの世代は三角帽というのをご存知なのかどうか知りませんが、一つの悪夢のような光景は、三角帽を被せ被せられ、自己批判を迫り迫られる、そういう状況ですね。で、まず最初のメッセージはですね、この紅衛兵である僕と北京大学教授であ

⁵ ミッシェル・フーコー (Michel Foucault, 1926-1984) は、フランスの哲学者である。

⁶ グイガナ=ブッシュマンは、アフリカ南部のカラハリ砂漠に住む狩猟採集民である。

る私とは、入れ替え可能な役柄であると。これは今に至るまで重要なポイントだと私は思っています。交通の惨禍のその2ですが、これは皆さんもご存知と思うのですが現代の事例ですが、A、この6人だけがどうして任命を拒否されたのかその理由を聞いてるんです。B、法律に従って適切に対処しました。この状況はですね、惨苦というよりむしろ絶望でありまして、まあ何よりも子供の教育に悪い。その社会への基本的信頼というのですね、尋ねられたら答えるという応答可能性ですね、レスポンスビリティ、責任でもあるんですが、それを保障するということだと思んですが、その基本的信頼を失わせる。Bははぐらかしという言語行為の典型例を与えたことによって、我々の語用論的なリソースを豊かにしてくれたという風にも言えます。でもう一つの、Bさん、Bの貢献というのは権力の外延的な定義のひとつを確実に与えたということですね。つまり権力を持つ者は応答可能性を拒否しても、自らは罰せられることも傷つくこともないという、そういう特徴を持っています。

で、唐突ですがいかなる可能世界においても私がBになることはないと思ってる、これが私が密かに持ってる、多分皆さんにも共有していただけたらと思う、ミニマムエシックスの一つのマキスムですね。さらに基本前提をコミュニケーションに関して確認しますと、コミュニケーションとインタラクションというのは決して同値ではないということでもあります。私は実は昔は全てのインタラクションはコミュニケーションであるという、そういうテーゼを結構信仰してたんですが、その後だんだん考えが変わってきてまして、こんな感じ⁷かなと。なんだか訳が分からないけど社会的な世界というのがあって、その中に交通と相互作用が含まれている。だけど相互作用っていうのは、やはりそれを包含するとしても同居合せていると、co-presence, 共在というのが前提になっているということですね。実は私自身がフォーカスしてきたのはimmediate co-presenceですね。直接的な共在において起こる交通というのにフォーカスしてきた、実はこれはとても素朴な図式でして、私のフィールドワークの前提となってきたと思います。

しかし私がある時期深い影響を受けたルーマンはもっとすっきりしててたぶんこんな感じ⁸だと思いますね。私たちが社会的な現象というものは全てコミュニケーションによって成り立っていて、つまりコミュニケーションシステムであって、そのコミュニケーションの中でも最も包括的なものが社会システムであって、その中に相互作用システムが含まれると。

私は狩猟採集民の研究者なので、この相互作用システムという概念にとっても魅惑されました。つまりそれは典型的には無文字社会において起きている一切合切ですね。もう10分経っちゃったか。実は原点というのは今西錦司だと私は思っています。黄色いとこだけ読み上げますと、「身体も生命もその中心に具体的な私たちを必要とするものではあるが、この中心が周囲に広がった場」、ルビでフィールドと書いてありますが、「場的なものなのである」と。戦争前夜に書かれたものですね。これを私は自分の考えていることの最初の出発点だと今でも思っています。

今日のお題、分かり合えないという話ですので、交通困難の典型例として、最初に私の長男ですね、知的障害者、カナー型自閉症と呼ばれる知的障害を持つ人の話をしたいと思います。2009年からデジタルカメラを使うようになったんでそれから毎年、お誕生日の写真を書いているんですが、これだけ続けると結構壮観なんです、分かり合えないというよりですね、自宅での愛称でゆっくんと呼んでますが、この人はわけのわからん人ですね。で昔、私たちが悩ませたのは突然、「地震雷って言うな！」ってどなるんですね、で「誰も言ってへんで」ってそういう感じなんです、その後、長く時間が過ぎて今は満42歳なんで

⁷ 図1を参照されたい。

⁸ 図2を参照されたい。

すが、ご機嫌のいい時は本当に天使みたいな人ですが、親や周囲の人々を最も悩ませていることは、突発的な癩癩、いわゆるパニック行動ってやつですね、これが恐ろしい怒鳴り声として襲いかかってくるわけですね。最近では早く過ぎるなという怒鳴り声であります。で、まあ実際問題として誰にとってもハイデガー⁹的な不安ではあるのですが、これをですねなんの予告もなく耳の側でやると本当にドキッとしてしまったという、そういうのゆっくんについての考えたことの原型みたいなのが木を植える話ですね。

林沿いの沿道を散策していて、伐採した大きな枝が落ちていて、それを引きずって長い距離を歩いたと、で、自宅近くの空き地で地面に突き立てると満足して家に帰った。私はあの、このエピソードをですね、何故か直ぐに妻には告げずにですね、翌日酒飲んでる時に、ある人類学者にこの話をしたら、すごい、タルコフスキー¹⁰の映画みたいだって言ったんですね。で私はタルコフスキーの映画を熱心に見るようになったんですが、後日、妻にこの話をしたら、なんだという感じで、この間学校でやった植樹の真似をしたんだって、つまり地獄的な反復をしたに過ぎなかったという事ですね。しかしながらこの逸話を経験しているその最中ですね、その最中には、何か自分を越えた世界から神々しい光が差し込んできたような感じが私はしたっていう、そのことが今日のテーマについて考える一番のコアなんですね。つまりコミュニケーションの原点は非対称性であるということでもあります。でそれを思いを籠めるという言葉で呼ぼうと。で実は「思い籠め」というのはわが国の非常に独創的な哲学者、大森荘蔵¹¹に由来する概念なんですが、現在の知覚、例えば山の端から月が昇り始めてるという現在の知覚ですね。そこには過去と未来が思い込められていると。単独の生の知覚なるというものはありえないって話ですね。で、ここで、私なりに「思い籠め」を定義しますと、他者の振る舞いの顕著さに対して、私が一方的にあるサンス、フランスで意味、感覚、方向を意味するメルロ＝ポンティ¹²哲学のキーワードですが、それを投げかけることである。今日はアニミズムの話はできないのですが、私は最近耽っているアニミスティックな思考によりますと、この他者の中にももちろんお月様が含まれます。

これがカラハリに、私のフィールドに滞在した時のゆっくんの写真なんですが、ここで注目して欲しいのは、この彼がやってる変な顔つきですね。でこれは彼の小学生からのお気に入りテーマ、猿人間ですね。その猿人間っていうのが前面に展開したのがこの絵であります。私はこの絵を見て非常に感動しまして。

えっと、大澤さんが、えっと何だ、稀代の奇書だと褒めてくださった、『感情の猿＝人』という、(猿人間の絵¹³は)私の最も好きな作品ですが、その表紙を飾りました。その『感情の猿＝人』の中にこんなことを書いたんですね。「それを見つめていると思わず嘆息してしまう。時に荒れ狂う怒鳴り声をあげ、殺気だった目つきになるゆっくんの中に、なんとというやすらぎに満ちた世界が広がってることだろう」。でも今考えると、これは私達が私達、つまり身体性に関心を持つ人々がずっと戦い続けてきた表象主義の見事な例なんですね。この私の物の言い方自体。私たちの大きな課題はですね、知的障害者の表現活動を、環境と一体の現象としてエコロジカルに捉えることではないかと。で、この課題をですね、実に見事に成し遂げつつあるのが、私の元お弟子さんだった中谷和人さんの一連の論文であって、文化人類学関係の方だったら、学術誌文化人類学で彼の論文を三つか四つ読むことができると思います。でこれが、この方が我が永遠の師匠の伊谷純一郎さんなんですが、私

⁹ マルティン・ハイデガー(Martin Heidegger, 1889-1976)はドイツの哲学者である。

¹⁰ アンドレイ・アルセーニエヴィチ・タルコフスキー(Andrei Arsenyevich Tarkovsky, 1932-1986)はソ連の映画監督である。

¹¹ 大森荘蔵(おおもりしょうぞう, 1921-1997)は日本の哲学者である。

¹² モーリス・メルロ＝ポンティ(Maurice Merleau-Ponty, 1908-1961)はフランスの哲学者である。

¹³ 『感情の猿＝人』の表紙はこちらからご確認ください。 <https://www.koubundou.co.jp/book/b156867.html>

のそもそもの研究の原点は、エチオピアにおけるマントヒヒとアヌビスヒヒの雑種ヒヒの研究というものであります。

なぜマントヒヒが研究の原点なのかをお話しますと、まずオスがメスを攻撃的に駆り集め、ハーレム、専門的にはone male unitといいます、それを作る。この行動傾向はとも遺傳的に決まっているようだ。つまり固体の生得的な属性が社会構造を決定する模範例だと。ワンマイルユニットというのはバンドという集団の下位文節であって、バンドこそがニホンザルの群れと相同なマントヒヒの基本社会単位、ベーシックソーシャルユニット、これは伊谷さんの概念なんです、なのである。つまりこのマントヒヒという種はですね、霊長類で非常に珍しい重層社会を作っているということでもあります。伊谷さんの晩年に交わした最後の議論、この議論をして1年ぐらいいとお亡くなりになっちゃったと思うんですが、菅原は雑種ヒヒは形態的にマントヒヒに近いオスほどたくさんのメスを駆り集めてハーレムを作る、やっぱり社会構造は遺傳子で決定されてるんじゃないでしょうかと生意気にも申し上げたんですね。すると伊谷さんは毅然として、君、それは安上がりの論理ですよ、マントヒヒだって日々努力しているんですよ、とおっしゃり、この伊谷さんの突きつけた肺腑をえぐるような言葉というのは、その後ずっと私の探究の指針になってきました。いったい伊谷さんの言われた日々の努力って何なんだろうということでもあります。で単純化しますとですね、生得的な条件 X が主体の振る舞いを決定付けてると考えるべきではないということでもあります。X が主体のあり方を動機づけている。この後の用語の注釈は省きます。メルロ＝ポンティの教えとして私が最も、何だろう、今でも指針にしてるのがこの動機づけという概念であります。例えばここに砂の上に記された大きな足跡がある。これは機能論という指標なんです、それは数時間前にライオンがここに実在したこと、それが足跡を動機付けているという風にいいますね。メルロ＝ポンティの驚くべきことは、こういう例に拡張していくことでもあります。遠い土地に住む友人の死が私を旅へと動機付ける。で私はこの同期動機を有効なものとして引き受け続ける限り、動機づけるものと動機づけられるものとも関係は相互的である。日本語に訳すと引き受けるというのはなんかおセンチな言葉のように聞こえるかもしれませんが、英語ではアンダーテイクですね、フランス語ではse chargerですね、という動詞にあたります。で動機づけるの続ですが、動機づけるものmotivantが生得的メカニズムだとしても、動機づけられるものmotivéの相互性が成り立つということでもあります。伊谷さんの言う日々の努力というのはメルロ＝ポンティの言う引き受けるという実践と同じならわらう、だから自閉症をめぐる思考というのもですね。我々が目指すのはヒト的な主体を自閉症にする遺傳的な因果を解明することではなくて、自閉症を持つ主体が続ける日々の努力を、彼らが住む環境世界と一体のこととして理解することでなければならない。

もう、あっという間に20分頃ですが、このマントヒヒの写真だけ見せて、私の基調報告を終えようと。ええっと、言語のない社会における交通とはどんなものかということをお話します。

私が、この雑種ヒヒの社会で最も魅惑されたのは、これは純粋なマントヒヒの写真ですが、別な本から取ったのですが、オスがですね、別のオスの元につかつかつかつと近づいて、クルっとターンして戻るというそれだけの行動なんですね¹⁴。

この行動を初めて報告したハンス・クマーというスイスの偉大な霊長類学者は、こういうspeculationをしました。左側のオスが決定役割を担う。右側のオスが船頭役割を担う。つまり右側のオスが左側のオスに、どっちへ行くのと問いかけ、左側のオスがおもむろに腰を上げて動き始めた方向が、バンドの誘導方向であるという、そういう洞察ですね。

¹⁴ 図3を参照されたい。

私は行動学的な分析をしたんですが、つまり行動エレメントの間の推移率を計算するということであります。で、告知行動notifying behaviorというあまりに強い理論的負荷のかかった用語を避けて、単にturning behaviorと呼びました。そうするとこのturnというのは、自分の所有するメスの傍に座ることと、高い確率でそれが後続するということを見ました。雑種ヒヒで実際に見られたのは、右側が殆ど純粋なアヌビスヒヒですね。で、クマーの弟子のアベグレン¹⁵という人の驚くべき研究があります。まずですね休眠場で頻発する告知行動というのは、自らの所有により強いチャレンジを受けていると感じるオスが発すると。これは私の観察分析と同じですね。ところが誘導を実際に追跡するとですね、本当に移動方向の誘導をターンによって頻繁に行っていることがわかりました。これは誠に感動的な記述ですね、まるで無言劇を見ているかのようであります。で、告知行動の不思議というのは、毛づくろいみたいな神話的な機能が見えないってことですね。それからBが、受け手が、何にもしないということでもあります。つまり意味が直感的には不透明な行動であると。だけどここで歴然として居ることは、発し手の意図が顕示されているマニフェストされているということ。そしてもし②に注目するのだったら、その振る舞いに指標的あるいは類像的アイコンニックな意味作用が感知されるということでもあります。

おー25分。ちょっと野村さんの家をお見せして終えますが、この後えっと、この後イタリア人の身振りの話になるんですが、これだけちょっと見させてください。これはナポリの風俗画なんですね。羨みによる邪視を遮断するジェスチャーをしていると。これをマーノコルヌータ、角の手というんですね。から、花嫁はハンカチを持っていて感涙に咽ぶ用意もして、付き添いの女は換喩的、シネクドキ的な身振りなんですね¹⁶。それで、よって自分の顎を触って顔を現し、顔によって美貌を表すというそういう身振りをされていて、ここにそのイチジクの手という猥褻なジェスチャーが見えるんですが、このコンテキストでは最大限の祝福を表す。しかもこれ新郎の母なんですが、スカートをつまみ上げ妊娠を暗示し、早く子供が、孫が授かりますようにという祈念を表してるという感じで、さっきのマントヒヒの事例で私は無言劇といいましたが、まさに無言劇のようなものが、音声言語のない形で進行してる。こういったことが私は非常に面白いという風に思い続けてきたということで、すいません、6分超過しました。私のとりあえずの問題提起は以上であります。

運営)

菅原先生ありがとうございました。参加者の皆さんはカメラに見える形で拍手をお願いいたします。(拍手)

運営)

次は大澤さんにバトンタッチしたいと思います。大澤さんよろしく申し上げます。

大澤)

どうも。今日は本当はね、皆さんといっしょに九州でお話しできると思ってたんだけど中々そういう機会もなく、でもまあ、お招きいただいてありがとうございます。菅原さんとお久しぶりにお会いできるっていうのも僕としては楽しみとかなんというか。ほんとはね丁度去年の今頃、京都で会おうなんて約束していたところだったんだけど、コロナで会えなくなりました。まあお会いできなくなってしまったなど。

¹⁵ ジャン・ジャック・アベグレン(Jean Jacques Abegglen, 1945-?)は霊長類学者である。

¹⁶ 上位概念を下位概念で言い換える、あるいはその逆の意。

で最初に何かお話ししないといけないということですけど、時々共有画面を使ったり、主に自分の生の身体でお話しますけれども、菅原さん色々きっちり楽しい話を聞かせて頂いた、そんだけきっちりした準備が出来ていないんですけど、最初に自己紹介も含めてどんなことを考えてるかっていうか、なんていうかな、問い方っていうか、どういう風なスタンスでもの考えてるかってことをちょっとだけお話ししようと思うんですよ。それでそのきっかけになったのはですね、これから僕はお話ししようとする話の一つのきっかけになっているのがね、実は先ほど菅原さんの話の中に出てきた『感情の猿=人』っていう本ですね、あの画像が出てましたね。それともう一つねその後に出た本なんですけれども、この問題を考える上ですごく衝撃的だった本があるので、それをちょっとまずタイトルだけ、タイトルが重要なんですけど、一つはこれですね感情の猿人、これは面白いです。動力源としてのエンジンと猿人をかけてるわけですけど、何ていいますか、霊長類と人の間のブリッジを目的も分からず動き回るみたいなそういうイメージなんですね。この本の内容は、菅原さんの前で僕が説明しても間抜けになっちゃうので説明しませんけど、本に書いてある問題の立て方ですよ、それに僕は衝撃を受けたんですね。それはどういうことかお話します。もうひとつね、これはジャックデリダって言う20世紀の後半のですね、フランスの超有名な哲学者ですね、最後の方で書いたもの、死後に出た本ですけど、これフランス語ですけども、*L'animal que donc je suis* これははっきり言ってね訳せないです、つまりこれもフランス語の作文として書いてたら作文としてバツでしょうね。文法的にも成り立ってないです。だからどうしようもなく訳せないんですけども、これはあのでも、分かる人には分かりますね。パスカル...じゃなくてデカルト¹⁷に引掛けてるわけですが、*Je pense, donc je suis cogito ergo sum*ですね、それに掛けて*L'animal que donc je suis*。どうやって訳しましょうかね。兎に角直訳、無理やり訳せばですね、これが関係代名詞ですね、だから、それ故に動物であるところの私とかっていうタイトルです。これは凄く独特な自分がシャワーを浴びて、浴びている自分の姿を猫に見られるっていう有名なシーンから始まるんですけども、この二つはですね、書いてある内容っていうよりもね、スタンスが似ているんですよ。この『感情の猿=人』と。これもエンジン、さらに動物にして私。そういうスタンスですね。これがね僕にとって非常にインパクトがあったんですね。それをどうしたことなのかってことをお話ししながらちょっと自己紹介していこうと思うんですけども。

思うにですね、皆さんどうですかね。今日は大学院生の方々中心にシンポジウムやってるわけですけども、いろんな背景の方が聞いてらっしゃると思いますけど、基本的にね、我々は何のために学問するとかいうか、何のために知るのかってことを考えると、学問についての究極の問いっていうか、本当に目指されてるものってのは簡単に言うと、自分は何者かっていうことだと思います。我々は一体何者なのか。一見ね、我々は何者かってことに関係ないような研究はいっぱいあります。コロナウイルスはどんな風になってるかとか、ビッグバンはどうだったかとかですね、どんな素粒子があるだろうかって、でもそういう全部の知が最終的に目指している所って、結局我々は何者なのかっていう問いだと思います。今この我々のところにいろんなものが入るわけですね。日本人とは何かとかですね、大学生と何かとか、我々をどう限定するかによって、いろんな我々があるわけですけども、でも究極的には我々は何かと。その我々ってのはどんどん修飾させていけば結局は私っていうのは何者なのっていう問いになってきます。でその私ってのも一番根源的なところまで問い詰めるとどうなるかと。私って何なのか、例えば私はまあ例えば九州大学の大学院生であるとか、私は何々県人になるとか、こういう国籍を持ってるとか、個人史的にはなん

¹⁷ ルネ・デカルト(René Descartes, 1596-1650)は、フランス生まれの哲学者、数学者である。

であるとか、どういう父や母を持っているとか、色々ありますけれども、そういう偶然的な部分を全部外して、私としての私とは何かっていうことを究極的に問い詰めて行くとね、結局何になるかっていうと、私とは何かに任意の私が入るわけですよ。私の私性っていうものを問い詰めていくと、結局そうすると、任意の私って何かって考えるとですね、まあ結論的に言えばですね、皆さん私とは何かっていうことを突き詰めて考えた時、私って言うところへ何が入るのかな、そこに入るものを全部一般的に考えれば結局人間ですよ。だから人間とは何か、人間とは何かってのは我々の問いの全ての終着点であり、究極的には目指していつているところだと思います。あるいは特に人間とは何かって聞かれたときに、人間ではないものとして何が想定されてるのかとなりますけど、昔だったら中世の例えば哲学であれば、人間の反対項として神ってのが想定されてあって、神との関係で人間とは何かって問題になるわけですけども、現在の我々にとっては人間と何かってことになれば、それは結局動物ですよ。人間も動物です。動物としての人間とは何か、そういう問いがですね、究極的には僕らの知的な営みの全てだと思います。全ての学問は勿論、間接的なものもあれば直接的なものがあります。でもそれは最終的には一体人間ってなんなのかってこと改名する大きなですね、システムそんな感じがするわけですよ。

そういうことに関して人間とは何かってことに関して、どんなことが分かってきたらろうかって、例えば思うわけです。そもそもこれは永遠の問いですからね。過去の優れた、なんて言いますか、哲学者やですね、賢人たちがですね、それに対して色々な答えや試みをしてるわけをしているわけです。それはそれなりにですね、なるほどと思わせるものもありますし、今聴いても気の利いたこと言うな一みたいなありました。例えば人間ってのは政治的動物であるとかですね。あるいは例えばよくあるのは人間ってのは言語ってものを使用するけれども、動物ってのは何ですか、シグナルだけを使うとかですね。あるいはちょっと似た気の利いたものとしては、人間はレスポンス/応答するけれども、動物はリアクション/反応するだけであるとかですね。あるいはちょっと昔だとですね、人間は道具を使用する、これは今日の研究からすれば、霊長類でも色々道具を使用するなど、道具の定義にもよりますけれども、でも人間的な意味では道具っていうのは、もちろん他の動物、例えば、大型類人猿もかなり使えますけど、これは今あんまりそういうふうに言いませんけれども、あるいはまあそうですね、なかなか哲学的に気が利いてるなあなんて思うのはですね、例えば人間っていうのは死を知っている、あるいは死ってものをある意味体験している。けど動物は単に死ぬだけであると。つまり僕ら死っていうものについて考えちゃうわけですよ。でも動物だって死ぬわけですよ。だけど人間だけが死ってものによって、死の関係で自分の実存と言うものを定義する、ハイデggerじゃないですけども、そういうことになるとかね。あるいは人間だけが約束をする。これはニーチェ¹⁸の言い方ですね。これはなかなか気の利いた命題は山の様に集められます。これはね、それなりに洞察を含んでいますけれどもね、よく考えてみるとこれね、本当に人間について分かったことになってるかって言うと、一見確かにそれぞれの哲学者は優れたある種の洞察があるわけですけど、しかしこれはね本当はねトートロジーなんです。つまり人間っていう風にその人が言った時に、もう人間っていう概念の中に暗黙の前提があるんですね。その暗黙の前提の中を引き出してるだけなんです。こういうを哲学では分析判断とかっていいです。主語の中に含まれていた概念を述語で取り出しているだけです。ですから実は人間ってものについて深い新しい知見をもたらしてるように見えて、実はただのなんていいですか、同語反復に近いものになってるん

¹⁸ フリードリヒ・ヴィルヘルム・ニーチェ (Friedrich Wilhelm Nietzsche, 1844-1900) は、ドイツ連邦・プロイセン王国出身の哲学者、古典文献学者である。

ですね。ですから実は哲学的な人間論っていうのは、今でももちろん色々教えられることはありますけれども、よく考えてみれば人間について既に知ってることについて、それを明示しただけだっていうところもあるわけです。

そうするとね、今日の人間についての問いていうのは、一番直接的にそれが問題とされる領域ってのはどこかという、菅原さんももちろんその一部かもしれませんが、人類学であるとか、あるいは進化生物学とか、動物学とか動物行動学とか。あるいは社会生物学とかね。そういうエンピリカルempirically生物、動物っていうものを扱いながら、その中から人性ってものを切り出していくっていう研究分野ですね。それが人間とは何かって問いに対する答えの終着点ですね。先程いったようにすべての知は間接的に見れば人間とは何かについて考えていることになると思うんですけども、その答えを最後にアウトプットする役割を担ってるのが、今の世界ではですね、今の我々の学問状況の中では、動物と人間のひとつの進化という図式の中でですね、捉えている学問、そういう人たちが一番そういう事によって人間とは何かということについてそれなりの事を教えてくれているはずなんですね。実際、私なんかもこれからあとちょっと話す機会があれば話しますけれども、そういうところからいろんなことを教えられるわけですけど、総じて見たときにですね、全体として見たときにそういう経験科学が動物や人間について何か教えてくれているかという、正直に言うんですけど、これはやっぱりどこか物足りないんですよ。つまり、例えばそうですね、じゃあ一番単純なことで言えばですよ、進化の分かれ目で人というものを定義する時にですね、我々も20年前くらいからホモサピエンスですけども、一番先にチンパンジーとの共通祖先から分かれて、最初に人に向かっていくその一番のメルクマールになるのは直立二足歩行ですよ。直立二足歩行ってのは、例えばどういうものであって、どういう骨格があって、どういう風にあってなされて、何故そもそもこんな奇妙な運動方法をとったんだろうか、これは中々興味深いですね。学問的課題ではあります。ありますけれどもしかし、僕らが人間とは何かそもそも私とは何かって言うという問いの中から深まった答えとしてですね、直立二足歩行するものであって、それがどういう生理的な機構によって成り立ってるかってことについて色々教えられた時にですね、我々人間とは何かという問いの中で聞こうとしてたことはそれじゃないよって気分になりませんか。つまり僕らが知りたかったことは例えば、今日ではですね、脳についての研究も沢山進んでいます。でその脳の大きさであるとか、どんな時にどんな脳が働いているとか色々わかってきます。それを教えられる人間の脳はこんな風に働いているって教えられる、特に人間については脳が特別だみたいな感じもありますから、そのことを教えてもらおう。教えてもらった時に僕らが人間とは何かって問いを発した時の答えとしてですね、聞いてたことと違うことを教えてもらったみたいな気分になるわけ、そう思いませんか。こういう風に考えてみるといいです。例えばですね。人間とは何かという問いがある。他方にそうですね、例えばダニは何とか何かって問い、ダニとは何とはってことであれば勿論生物学者として、ダニっていうのはこういうDNAを持っているとかこういう習性を持っているとか、そういうことを定義できるでしょう。それと同じようにですね、人って言う動物について定義すること、あるいは特徴を記述することはできます。しかしダニについての答えと、人間とは何かって事に対する答えがですね、なんてますか、複雑度においてだけ違っているだけではねちょっと違うのです。僕らがダニについて聞いている時と、新型コロナウイルスについて聞いている時と、人間とは何かって事で聞きたいこととの間では、何か根本的な違いがあるんですよ。ところが、今のところ主な経験科学の研究はですね、その違いを切り出すようなものにはなっていないわけですね。

そうするともう一回整理すると、一方に哲学があります。哲学はなかなか気の利いた深そうなことは言ってくれています。だから人間について理解した気分になりますけど、よく考え

てみればそれはトートロジーに過ぎないってところがあります。これに対して経験からの知見もあります。今度はですね、それは何かはっきりとした、エンピリカルなことについて教えてくださいけれども、それはそれでですね、本当に問いたかったこととは違うぞと。一方では深みはあるけれども実は答えになってない。はっきりとした何かについてポジティブに語ってはいるけれども、問いの深さに全く応じていない。この2種類があるわけです。何かあの一、本当の答えはどちらにもないって感じがするんですね。じゃあどういうふうにかえたらいいかっていうことなんですけれども、それを先ほど僕はですね、菅原さんのスタンスや、あるいはデリダのスタンスに感じたわけです。問い方、どういう風に考えればいいかっていうね、それを今日は菅原さんの本で話すんじゃないくて、ちょっと別のでちょっと話しますけれども、例えばですね、まずね、人間とは何かっていう時に、かつての哲学の様ですね、アプリアリに人間的なるもの、動物を超えた人間だけなるものアプリアリに仮定しておいて、その答えを初めから仕込んでおいた答えをトートロジカルに引き出すのでは駄目だってね。人間は徹頭徹尾動物であるってところから始めなきゃいけません。しかしそうするとダニについて問うのと、人間について問うのと、どう違うのかっていう問題があります。どう考えればいいか。人間は内容としては動物です、間違いなくね。ただと言えば、動物としての人間ってのはですね、内容としては動物ですが、動物としての在り方ですね、形式にポイントがあるんですよ。っていう抽象的な言い方でいってもピンとこないでしょうから、もう少しだけ具体性を与えますが、僕はヒントになったのはね、これなんですよ、ちょっと共有しますね。

これはねマルクスの資本論に書いてある。これは資本論の初版には入ってたんですけども、その後、カットされてしまったんですけども、非常に有名な部分ではあるんですが、これはもちろんマルクスは動物について書いているわけじゃないんですけども、動物の比喩について書いてるんですが、この比喩が秀抜なんですね。どういう風に、ちょっと読んでみますね。「それはあたかもライオン、トラ、うさぎ、その他全ての動物種と並んで、つまりそれぞれのグループにまとめられた時に、動物王国の種や、亜種や、属を形成する動物たちと並んで、それらの脇に動物なるものは、動物王国の全体の受肉された個体が存在しているかのようである」何を言ってるかっていうと、これはね商品と貨幣のことについて比喩的に語ってるわけです。市場にですね、商品と貨幣が両方流通してるわけですね。様々な商品がライオン、トラ、うさぎっていう、その他、様々な動物種ってのが商品に当たるわけです。その中に貨幣っていう商品もあるわけですよ。貨幣も商品のように流通しているわけです。そうするとでも貨幣っていうのは、実は動物王国の中に動物っていう動物がいるみたいだと。動物王国の全体を代表する動物っていう動物が、集合の要素と全体が混乱するような状態になってるけど、そんなふうに見えるって比喩で語っているわけですが。結論を言うそうですね、僕はねここでマルクスが比喩的に言ってることを、言わば文字通り取ると、本当の探究になるってイメージなんですよ。どういうことか少し説明しますね。これはですね、まずマルクスの言ったことを言うと、こういうことなんですよ。先ほどのマルクスの例で行くと、なぜ商品世界の中に個々の商品だけじゃなくて商品一般を代表するような商品、つまり貨幣、商品一般であるような商品、貨幣が流通する。まるで動物のライオンとか犬とか、いろんな動物種の中に動物っていう動物がいるかのように、っていう話でしたね。それはどういうことかって言うと。元々ですね、商品の中に二重性がある¹⁹んですね。商品は、普通の言い方すると、マルクス主義用語の普通の言い方をすると、(注3にあるように商品

¹⁹ 大澤が以下で使用する図式は次のようなものである(大澤の作図をもとに実行委員会が作成)。
商品＝〈商品(使用価値)／貨幣(交換価値)〉

には)使用価値としての側面と交換価値としての側面、まあ厳密にいうとこれ(交換価値)は価値って言わないといけないんですけど、マルクスは交換価値と価値を別の意味で使っていますからね。でも今はそんなことどっちだっていい。交換価値って言ったほうが分かりやすいですから交換価値って言いますが。商品と言うのはある意味では、一個一個の使用価値であると同時に、交換価値を持つものになると。例えばこれ²⁰が使用価値を持つものですね。同時にこれはいくらで売ることができるか、いくらで買ったものであるかと。これじつは、二重性が商品そのものの中に現れてるわけです。つまりよく見るとですね、ここ(注三の図式)で商品が二重になっている、つまりですね、商品の中に自分自身と自分を超えたもの、自分を超えたものっていう二重性が自分自身の中に現れている。これがあるため、この部分だけを取り出すと、貨幣になる。そういう構造なんです。つまりですね、商品の中に、全ての商品の中に、自分自身と自分を以上になるっていう二重性がある。そうであるが故に、この部分を代表する商品一般と言う商品、つまり貨幣が成り立つ。そういうことを言ってるわけです。

で、人間とは何か、動物との関係において人間とは何かっていう問いはですね、本当に意味を持つためにはですね、これと同じスタンスで考えたい。つまりさっきマルクスが言った、ただ比喻で彼は言ってるだけですが、言ったことを言わば文字通り考える。どうということかと言うとね、この貨幣の位置に人間を入れればいいんです。商品のところは個々の動物種ですね、つまり動物の中に、意識せざる形で他者性が現れる。商品の中に商品以上の何か、全ての商品の中に、現れている。そうであるがゆえに、貨幣っていう商品一般っていう商品が成り立つわけです。動物の中に動物性といわばカッコつきの人間性、動物を超えた二重性がある。だからこれと全く並行的にですね、人間とは何か(っていうことについて問うべきであろう* 実行委員会注)。これはだから感情の猿=人ってことでもあるわけですよ。猿(=交換価値の位置) / 人(=使用価値の位置)なんですよ。

そういう感じで問うとですね、動物についての知見と哲学的な人間論との両方の意味、経験科学的な堅実さとしかしそのもうそれは持っている哲学的な意味の両方をですね、引き付けるといえることができるような、そういう探究することができるんじゃないか。そういうのがですね、今やろうとしていることのひとつで、今、いろんな形でいろんなものを書いているわけです。

さて、今言っているのは問い方だけでコミュニケーションとどう関係があるんだとなるので少しだけ言うとはですね、これを皆さんに見せましょう。また画面共有しますが。これはね、あまりにも有名な研究なので知っている人が多いかもしれませんが、わざわざこんなところで出すのも恥ずかしいくらい有名な研究なんです。人間って何か、を考えるとね一番多くの人漠然として思っていることはどういうことかと言うと。人間って要するに頭がいいわけですよ、つまり知性ってものが一般的に他の動物よりもずば抜けて優れてるっていう漠然としたイメージです。だから脳の研究なんかもすごく(されているわけだし* 実行委員会注)、実際、脳の大きさもチンパンジーの三倍近くあるわけですね。ですから大きいことは確かなんですけども。よく見ると、よく研究してみるとですね、人間の知性一般ってものにおいて人間が優れてるわけでは全然ないんです。これはすごく有名な研究ですから、今ここで今聴いてらっしゃる方もたくさん知ってる人も多いと思うんですけど、今日、後半で司会をして下さる橋彌先生が最近お話しになった、トマセロ²¹とかヘルマン²²っていう人たちが

²⁰ 大澤が説明のために使用しているペン

²¹ マイケル・トマセロ (Michael Tomasello, 1950-) はアメリカ合衆国の認知心理学者である。

²² エッシャー・ヘルマン (Esther Herrmann, ?-) はドイツの霊長類学者である。

やった有名な実験があります。2000年代最初ぐらいにやったものでありますけど、どういう実験かと言うと、人間の子供、赤ちゃん、まあ2歳半ぐらいですね、それからチンパンジーとオランウータン、100例ぐらいの例でやってるわけですけど、いわゆる知能テストをやるわけです。そうするとですね、知能テストを大きくですね、色々な問題を出す訳ですけども、大きく三つのカテゴリーの問題が入ってるんですね。その、なんだったっけ。量の関係、こっちが大きいとかこっちがたくさん入っていると、それから、空間ですね。回転させたり、空間認知に関わる、奥に隠れているものを引き出すとか。それから次は社会的ってものが入ってくる。これは後で話しますけど、要は模倣が入っているってことなんですけど、これをやるとですね、結論を言うんですけど、見たらわかるように Physical domainって書いてある、これはさっき言ったように空間や脳に関する指数、これはですね、はっきり言うと、チンパンジー・オランウータン・人間の間にですね、ほとんど差がないんですね。チンパンジーのほうがちょっといい成績じゃないの、みたいな感じにこの例ではなってます。つまり、物理的な世界をどう操作するか、認知するかってことに関して、少なくとも2歳半の子供はですね、全然チンパンジーより優れてはいないです。すでに脳の大きさはずっと大きいですけどねチンパンジーより。

しかし突然、ある領域だけずば抜けて人間が勝つんですね。逆に言うとチンパンジーやオランウータンはずば抜けて成績がいい、人間から見れば。これは簡単に言うと真似する、例えば実験者の方がですね、目の前でこうやって取り出すんだよみたいな感じでやる。それを真似てごらん。人間の子供からすると簡単なんですね、真似すればいい、答えを教えてくださいただやるだけでいいと。これは問題じゃないじゃんってぐらい簡単です。チンパンジー・オランウータンがなかなかできないんですねこれが。結論的に言うんですけど、人間の知性っていうものを我々は一般的に優れてるって思いたくなりますけど、本当は知性一般ってものにおいて人間が優れているわけじゃなくて、実は社会的知能だけがズバ抜けてるんですね。つまり人間らしさの原点っていうのはですね、社会的な問題、要するに今日の問題ではコミュニケーションにかかわるもの。そこにほとんど全てが勝っている。それが後で一般化して、別な領域においても人間特別みたいに見えるんだけど、全てがほとんどコミュニケーションにかかっているとっていいんですね。そういう感じになります。

で、あとですね、ちょっとだけ宣伝みたいな。今日のことでちょっとおきます。ほんとはね、今日、このお話をいただいた時に、この論文の話をするれば関係があるかなと思ったんですけど、この話しをしてるとすごく長くなっちゃうのと、菅原さんとの対話っていうのが僕としては楽しみにしているので、ちょっとやりにくくなるので、あのあれな気がしたんでちょっとだけ紹介だけしておきます。これは本当はあのもう1991年でうんと昔なんですけども、本に収録したのはつい最近で、2019年に『コミュニケーション』って本を出したんですけど、その中に収めた(論文で)、私はお気に入りの論文なんです。これどういう話かって言うと、先ほど菅原さんのお話をしてくださいましたが、これはイギリスであった、ある独特の症例なんですね。しかも原因が分からない。どういうのかって言うんですけど、これは書いてるのは僕が1991年ですから、1980年代の後半にイギリスでの事件で、イギリスでは有名な事件なんですけど、ある、この人は実は黒人なんですけど、一卵性双生児のですね、この子達が当時二十歳ぐらいなんですけれども、まあいろんな犯罪を次々と犯して、放火したりとかね、犯罪が起こされたのでだんだんそのことについて日本のワイドショーなんかと同じように話題になって、調べていくうちに、この人双子について色々ともないいろんなことが分かってきて、知的な、学問的な、臨床的な興味を生み始めたわけです。どういうことかっていうと、この双子はですね、実は人と話すことが全くできないんですね。話すことができないって言うよりもね、あのコミュニケーションそのものに対する志向

性がゼロなんです。だから見た時にみんなが思うのはですね、その人が明らかに生きてるはずなのに、ゾンビに出会っているような、彫刻に出会ってるような一切の表情がない、全く喋らないんですね、これはどこか障害がある(と当初は思われてたんですが)、知られている既存の障害のどれにも当てはまらないんですよ。まずね十分に知的に発達していて色んなテストをやれば、平均よりいいんですね。言語障害なのかっていうと、普通の言語障害の訓練をして全然聞かない。実は言葉ができない訳じゃないことが分かってきます。まずね、文字表現はきわめて豊富です、日記も書いてるし実は小説まで書いてます。それから電話なら出来ることが分かってきます。不思議なんです。だんだん気がついてみるとね、この双子は双子以外の他人に対して、親にさえも兄弟にさえも話すことが出来ないんだけど、実は双子同士では話してるのがわかる。話してることわかるってのは変な言い方ですけど、初めは双子同士も喋ってないのかと思ったんですが、途中で気がつくんです、あれ、話してるじゃん。でもなぜか気付かれない。なぜかと言うとね、双子同士は異常な早口なんです。普通の人やヒアリングできないですね、リスニングできない。ですがよく聞いてみると、実は普通の英語を喋ってるんですね。双子同士では喋っている。だけど外に対しては全く喋らない。これがいったいどうしてなのかっていうことに僕はすごく興味を惹かれて、これはちゃんとしたモノグラフが出ているのでそれを基に考えたわけです。今日はどう考えればいいのかということについてお話する余裕がないんですけども、わかりあえないことから始まるコミュニケーションっていうことでは、コミュニケーションの可能性と不可能性が両方あるんですね。まずなぜ双子は他人と話せないかということが最大の疑問ですけども、しかし双子同士なら話せるのはなぜかっていう問題があります。双子同士であれば話せるのに、なぜ外に対しては話すことができないのか。

これを理論的に取り出していくと、コミュニケーションっていうものは一体どういう条件によって成り立ってるかってことがだんだんわかってくるっていうのがですね、この91年に書いた論文なんですね。興味のある方は読んでいただければと思うんですが、本当に今日はこれが一番あれかなと思ったんですが、まだもうちょっと話すことある。またトマセロの話もどっかでしないといけないと思うんですけど、それは後でしますね。

運営)

はい、大澤さんありがとうございました。それでは皆さんまた見える形で拍手をお願いいたします。

～10分間の休憩～

運営)

はい。それでは、そろそろ対談の方にうつらせていただきたいと思います。一応80分を予定はしているんですがオーバーしていただいてもかまいません。また、適時チャットの方では質疑応答は、受け付けております。では、お二人ともよろしく願いいたします。

大澤)

菅原さんの話は、すごくいい話でした。色々感じさせられるものがありました。僕の方はちょっとかなり表面的な事しか言ってないので、ちょっとそれを補いながら問題提起的に話をして行こうかなと思うんですけど、ちょっと考えてみたいんですよ。菅原さん、ひいきなお話をしていただいたり、自閉症のお子さんの話をいろいろしてくださりました。

僕の聞きたいこと、考えたいものは、コミュニケーションってことですね。人間のコミュニケーションというものと動物のコミュニケーション、どこがどう同じでどこがどう違うかみたい

なそういうことをちょっと考えたいんだけど、そのためにね、ちょっとだけ問題提起的にこんな話から入ろうかと思うんですよ。

これ、まあ、本当は間がもたなかったら、後半に話そうかなと思ったことけどどうい話から入ろうかと言うと、今の段階でお話ししておきます。

どうい話からかという、今日後半橋彌さんが、僕らのシンポジウムの仕切りをしてくださりますけども、橋彌さんが最近翻訳したり、それ以前から橋彌さん、精力的に研究していますけれども、ドイツの、マイケル・トマセロというですね、まあ何といいますか、人類学者なんですかね、霊長類のことも菅原さんと同じように人間のことも動物のことも詳しい。彼のもの翻訳して、トマセロというのは僕はね、この種の分野で、ずば抜けてね優秀っていう風に思ってんですねその哲学的なセンスもあるし、実験的なセンスに関してもすごく立派。ちょっとトマセロの議論に対して、非常に優れているんだけど、ある根本的な欠落があるような気がするの、ちょっとその事を問題提起の始まりとして、いって、その菅原さんの意見も聞こうと思います。ちょっと菅原さん自身はあれかもしれないけど、聞いてる人のた人のために、トマセロというのは、どういこと言ってるかどうか、紹介していきますけれどもちょっと画面共有しますね(図4を画面共有)。

マイケル・トマセロという人はですね、ドイツのマックス・プランク進化人類学研究所の所長だった人ですけども、学者としてだいぶもう終わりの方に向かってると思いますけど、その中でですね、1つが、『思考の自然史』これは、橋彌さんが訳されたもの。それと姉妹編になって『道徳の自然史』が去年訳されました。両方とも日本語訳で読めますけれども、この2つがですね、最終的に彼の考え方をまとめたものなんですね。それでそのどうい議論になっているか、どういストーリーになっているかをちょっとお話ししておくんですけど、後で橋彌さんがちょっと大澤そこ間違ってるところを直してもらえばいいと思うんですけども、この2つの本は基本的に、同じストーリーを、一方では人間的な複雑な思考がどうやって生まれてきたことを進化論的にちゃんと説明すると。

それからもう一つは、モラルですね。道徳ってものはどうい風に発生してきたかというのを考える。その時に、3つのステップで考えてるわけです。

まずスタートに、人間が人間以前っていうか、人間とチンパンジーの共通の祖先ということになりますが、グレートエイプGreatapeですね、大型類人猿、そこからスタートして、初期人類というのは、これは大体ですね、専門的に言えばホモハエルベルゲンシス有名なネアンデルタール人と、ホモサピエンスの系列とが、別れる直前ぐらいにあった、40万年ぐらい前の人類をイメージしてるらしいですが、それから我々現代の人類と。この三つの間に intentionality、心の在り方っていうイメージですよ、現象学の用語ですね。3つのレベルがあるんだと。それによって全てを説明するっていう考え方なんです。大型類人猿の場合は、individual intentionalityと個体のintentionalityと。この大型類人猿の社会性をまあ、菅原さんに解説するのは、意味はないんですけど僕はむしろ教わっている身ですから。まあ、でもオーディエンスのために言っておきますが、基本的に彼らの社会性は主として、自分達の群れの中での個体同士の競争のためにあるわけです。

彼らもかなり知的と言っては知的です。つまり僕ら時々ですね、人間を騙すことは、ですね、正直に言うことより難しいと思ってるわけですよ。

僕ら、正直に言うのは、馬鹿正直なんて言葉があるくらいですから。それに対して、騙すときは、ちょっと頭使って、いろいろやるから騙す方が、ちょっと頭がいいかもしれないみたいに思ったりしてね、何もかも正直に(言うよりも)。ところがですね、類人猿、チンパンジーは結構騙すのが得意です。つまり、自分の利益のためにですね、他の個体を騙すのが非常に上手ですね。

しかし人間のように、正直に何かをコミュニケーションすることはない。他の個体を自分の目的のために、操作したり、そうなった個体が自分と競争関係にある、他の個体が何を考えているかみたいなのを見抜くのが非常に優れている。でも全てが競合ベースにある。でも、それに対してですね、その実は40万年ぐらい前から、joint intentionality、橋彌さんは志向性の接続って訳されたと思いますけど、jointした intentionalityというのが、決定的な飛躍になったんだと。で、この時期にですね、狩りをするために共同する必要が出てきたってことがあるわけです。その時にjoint intentionalityってのはですね、簡単に言えば、一緒に一つの目的を目指すとか、一緒に一つのものに注目する(図5を参照)。joint attention。これは、後でちょっとお伺いしたいんですけど、一番重要な現象は、その joint attentionですね。このようなことが起きる、これが決定的な飛躍のポイントになっていて、思考のレベルでも、道徳のレベルでも、完全に人間的な思考や人間的な道徳的がでてくる段階ではないんですけども、この直前の段階までここで行くんですね。

この初期人類でのjoint intentionalityの特徴はですね、位相になっていることだということですね。

これは共有停止しながら説明しますが²³、ある個体、ある個体が一緒に何かを注目している。「あそこにレイヨウがいるぞ」となる。そうすると、これは一つと目的をみなしている。我々共同体のようなものになっていて、その中でこれから狩りをしようとする者が、それぞれ個別のルールを持っている二重のレベルになっているっていう意味なんですね。これが joint intentionality、intentionalityの結合。それから3番目のレベルとして、collective intentionalityと。collective intentionalityってのは、これはまあ、一緒にいる二人だけの話ですけども、このcollectivityの範囲、Weの範囲が、集団スケールまで大きくなった場合は、collective intentionality。生態学的環境は厳しくなって集団間の競争が激しくなって、集団レベル。今日出てきた話でいくと複合社会っていうか、複素社会、ってもので、こういうもののストーリーっていうのは、きわめてエレガント、非常に見事な説明になっていると僕は思います。トマセロは、経験科学の研究者としてはずば抜けて哲学もよくできて、ウィトゲンシュタイン²⁴が引用されたり、デイヴィッドソン²⁵が出てきたりですねグライス²⁶が出てきたり関連性理論が出てきたり、まあ、菅原さんのようですよ。珍しく哲学がちゃんとできる人っていう感じなんですけど、結論的に言うんですけど僕らはね、しかし、これはまだね、重大なミッシングリンクがある。重大なことが問われていない。あるいは、何て言うか、スキップされている。そういう風に思うわけです。どこが問題かっていうと、トマセロの話のですね、ポイントはですね、individual intentionalityってのが、まあ、人間ではない、霊長類の段階であると。で、collective intentionalityが、十全な人間的な思考や道徳を備えた状態であると。普通は、この二つなんです。その間に媒介として、joint intentionalityっていうのが入ってるところが、ミソなんです。この僕は、一番トマセロの研究の独創性のあった一番優れたところだと思うんですけど、この部分が飛躍があると。つまり逆に言うとね、joint intentionalityってのは、僕は実に神秘的な現象だと思うんですよ。それは現に起きています。しかし説明されてない。どういうことかって言うんですけど、こういうことです。その簡単に言うと、ジョイントはいかにして可能なのか。という問いですよ。

²³ 図5を作図しながら説明

²⁴ L・ウィトゲンシュタイン(Ludwig Josef Johann Wittgenstein,1889-1951)はオーストリア出身の哲学者である。

²⁵ D・デイヴィッドソン(Donald Herbert Davidson,1917-2003)はアメリカ合衆国出身の哲学者である。

²⁶ P・グライス(Herbert Paul Grice,1913-1988)はイギリス出身の哲学者である。

これを考えてみるとね、よく考えてみるとそれは言えば、論理的に考えれば、不可能なこととはずじゃないか、不可能なことが起きている。
なぜ起きてるんだ。そういう風に考えなきゃいけないと思うんです。不可能なことが起きているっていうのは、どういうことかという、まあ説明は難しくはないわけですよ。例えばですね。こんなイメージですよ(図6)。

これ(図の三角部分)目です。パースペクティブっていうのは、この目に相関して、一つの宇宙、一つの世界が現れているっていうことです。Bさんのパースペクティブにも、それぞれオブジェクトです。Aさんの世界の中のオブジェクトが、ついているから添え字として、Oa(Object of A)とする。これが(Object of A=Oaと、Object of B=Obが)、この2つが、同じものであれば、joint intentionality。同じものであるというのは、お互いに自覚されてるとことは重要です。これがjoint intentionalityですね。

でもよく考えてみるとね、これはですね、不可能なことじゃないか。単純なことです。つまりAにとって、ひとつの世界が現れているわけです。その中に、Bに対しても、AとBの二つのオブジェクトが同じであると。いうためにはですね。この同じ差ってものですね、比較する共通のフィールドが必要なんですよ。だけど、Aにとっての世界、Bにとっての世界、それぞれの世界がある。それぞれの世界において、現れているそれが、同じであるっていうAにとってはこれがすべてですからね、Bにとってはこれがすべてですかね。これは同じであるっていう風には、どこのレベルでもね、言うことが不可能なわけですよ。だから、これはね、例えば、この種のことで近いあれでいえばですね、例えばクワイン²⁷のですね根源的翻訳っていう話と同じです。これは知ってる人は知ってる話ですね。知らない人のためちよつと
言うと、例えば、人類学者がですね、どこかのネイティブの人に行くと。そのネイティブの人たちが、ウサギを見るとギャバガイと言ってるわけですよ。ギャバガイというのは、うさぎをさしてるんだなって一瞬思うわけですけど。よく考えてみるとそれは、ウサギをさしているのか、単に小さな動物のこと言ってるにすぎないのか、あるいは白っぽい物っていう意味なのか、あるいは動くものについて一般にギャバガイといっているのか、ギャバガイというものが、何が指されているのかは、確定できないってのが、根源的不確定性、根源的翻訳の不可逆的不可能性、って用語があるんです。それと同じです。Aにとって現れるBにとって現れている、その二つが同じであるって事ですね、ということがあればある意味不可能なはずなんですね。

しかし、その不可能なことが起きているわけです。それがjoint intentionalityってことなんですね。で、確かにね、それが起きています。僕らの経験的な事実からしてもそうだし。実験的にも確かめられている。これはよくjoint intentionality、あるいは共同注意。joint attention。joint attentionというのと simultaneous attention同時注意は区別される。同時注意ってのは、2つの個体が、同じものに、例えば猿の個体がいて、二つの個体がともに蛇に注目している。これはまだ共同注意ではないんですね。客観的に見れば同じものをみているけれども、

この二つの間に、お互い同士にお互い同じものを見ているねという意識がない。それに対して、共同注意というのは、同じものを見ているねっていう意識があるわけです。

これは実に謎めいたですね、不思議な現象だってことに気づくことが必要だって、僕はいいたんですね。そのつまりさっきの図でいけばですね。いわば僕らは、神の目にたって、Aがみているものはこれ、Bがみているものはこれ、僕らは、神の視点で実はこの2つは、同じだって、同じものをみているんだね、そういうふうに分かれば同時注意にはなりません。でも

²⁷ W・V・クワイン(Willard van Orman Quine, 1908-2000)はアメリカ合衆国出身の哲学者である。

共同注意になるためにはですね、いわばこの2人が、神の視点を同時に、持たなければいけないんですね。しかし、それは不可能なことであるはずなんですよ。でも不可能なことが起きている。それは人間のコミュニケーションっていうことが一番の不思議だなんて思うわけです。だからその、一番肝心の謎っていうのを、まだトマセロの議論の中で、不問にされているというまあ、そんな感じですね。

ちょっと話しすぎましたね。とにかく僕が言いたいのはですね。いったい人間のコミュニケーションってなんなのか、それは僕はそれをね人間自身がぼくらは、やっているんですけどもまったく謎めいた現象であり、その謎の深さってなものに応じる回答を僕らは、えてないっていうふうに思うわけね、それは僕はちょっと対談のとりあえず冒頭に問題提起しとこうと思うことですね。

橋彌)

大澤さん、一点だけよろしいですか、橋彌です。すみません、おそらく、今まとめていただいた中でですね、1点だけ、ほんとこれ細かいところなんですけど、用語としてはですね、おそらく今大澤さんが、simultaneous attentionと呼ばれた部分をトマセロだったり、joint attentionと読んでいて、joint attentionとおっしゃった部分をshared attentionって言い方してる。sharedっていうのは、対象だから、AとBが同じ対象をみる。AとBがその事実を共有している。ちょうどフリップで見せていただいたAとBの間に交流があるというか、同じ花を見ている、私とあなたが共有するshared attentionという言い方であったり。sharedという用語、ただ、いま指摘いただいた問題点というか、全くその通りだと思うんですけども、おそらくjoint attentionというところと、shared attentionという概念をトマセロは、使い分けているような気がします。またこれはあとで、ディスカッションのところでは、(詳しく議論できればと思います)

大澤)

日本で一番トマセロに詳しい、橋彌さんとそうおっしゃるんですからそうなんでしょうけれども、僕の解釈でちょっと読んだ解釈でちょっと違うんですけども、shared attentionという上位概念の中に、joint attentionとcollective attentionがあって、jointは、やっぱりただの同時注意がjointと言わないんじゃないかなと、思うんですけど。トマセロの行っている意味は。これはこれで、後で(議論しよう)と思うんですけども。問題提起としては、用語の使い方はともかくとして、言いたいことはそういうことなんです。

sharedっていうのか、インフィニティブ(聞き取り不可)まさにそういうことが起きているんですけども。sharedとはなにか。つまり今日のシンポジウムのテーマで言うと、我々本来的には、わかりあえなくできているんですよ。分かり合えなくできているのに、コミュニケーションというので、わかったような気分にもなるわけですよ。このギャップですよ。ここにコミュニケーションというものが、ギャップがあるなという感じがするということなんですけれどもね。

あとはまた後で。

橋彌)

すみません、お邪魔しました。

菅原)

いいですか、菅原発言していいですか。大変とっかかりやすい話をさせていただいてありがたいのですが、ただ私は、なんか、そんなに難しいことかなと言うね気持ちがまずあって、一時どうだろう、私のフィールドでの師匠田中次郎さんが、ブッシュマン研究を、順調になった頃に、霊長類研究所の大学院で、かなり話題になったのがですね、そのチンパンジーの、流動的なね、あるいは離合集散的な社会構造をあれが、チンパンジーの社会の一番の特徴だと思うんですが、でもそれが案外ね、食肉類によくみられる話がね結構流行ったんですね。例えば、狼のパック²⁸とか環境によっては、もっと小さい、ユニットに分散したり、でまた、でっかい鹿を狩る時に、わらわらと集まってきたりとかね。で私実は動物について、考えるその自宅在住者として、一番の手がかりはですね。NHKの「ダーウィンが来た！」とそれからBS3でやっている「ワイルドライフ」ってやつなんです。それをみて、いつともびっくりするんですけど、それはつまり社会性のネコ科の、一番でかいやつがライオンの狩りのシーンなんですけど、ライオンの娘がある程度大きくなるとね、お母さんたち年長のメス達が、狩りを始めるぞっていうのをきちんと察知してね。言語で相談なんかしなくても、待ち伏せ役と追い立て役って、さーと群化して、協力して狩りをしますよね。あれってある種の注意共有が成り立ってないと、不可能なことだと思うんですね。その動物的なその注意の敏感さっていうのが、どれだけその実験室で、再現できているのかってことに、一つ懐疑的な気持ちにもなってしまうんだけど。だって、野生のライオンがあれだけやすやすできることが、どうしてそんなに難しいのかって言うことですね。もろんこれには色んなファクターがあって、たぶんムードだと思うんですね。「腹減った」とかね、「ちょっと狩りしてみてー」とか、そういうムードの共有とかいうのが、物凄い強力な動機づけになっていると思うんですけど。

ただ、そのトマセロに関して、私があんまり毅然としてもものを言えないのはですね、昔トマセロアンド&コール、コールでいいんだっけ。プライメットコグニション²⁹という、素晴らしい本をずいぶん時間をかけて読んだことがあるんですけども、その中で私が一番印象に残ったのは霊長類、全てかどうか知りませんが、かなりの霊長類が、無生物と動物とを、直感的に区別すると。これatプラスで、大澤さんも崖から転がってくる岩と崖から走り降りてくる熊をね、弁別できないはずはないだろうという議論をたててらして、私はそれすごい共感したのは、実は、トマセロアンド&コールの話が念頭にあって、その生き物性というのを彼らにあって、Animacy(生氣性)とDirectiveness(方向付け)、その二つを霊長類はとっさに直感してるという、そういうお話だと思うんですね。でもまず注意共有の前段階として、この、Animacy(生氣性)とDirectiveness(方向付け)を直感するっていう、ベースがあって、そのあとにおそらく、ムードの共有によって、非常に動機づけとか、注意力が高まるという、まあそういう、形で、ある程度は、了解可能かと思うんですが、一挙にね、人間の話にするとこの話をやっぱ昔一番見事な形でやったのは、やまだようこ³⁰さんの『言葉の前の言葉』という名著だと思うんですね。あれなんか私はその、偉大な学者ってのは、本当にそこら辺、好奇心が強いなと思って感心したんですが。やまださんは、あれを発表したらね、廣松渉³¹さんがむっちゃ感動して、なんか長いファンレターをやまださんに送ってきてくれたという素晴らしい話があるんですけど、あれは、まさにその共感の波動が横に伝わるって言うモデルですよ。それをやまださんは後に、「並び合う関係」とかいう風に言ってるけど、だか

²⁸ 家族群の意味

²⁹ Tomasello, M. & Call, J. (1997). Primate Cognition. Oxford University Press. ISBN 978-0-19-510624-4

³⁰ やまだようこは心理学者である。

³¹ 廣松渉(ひろまつわたる, 1933-1994)は日本の哲学者である。

らそれはもう赤ちゃんが、欲求の対象に、手を伸ばすという行動とは全然違うと言うね、その洞察がすごいと思ったんですけど。

やまださんの長男が、指差しをした、一番最初の状況っていうのは実に印象的で、階段の踊り場に窓から夕日が差し込んで、壁に光の模様がチラチラ浮かんでたのを、あの子なんていう太郎くんか忘れましたが、その一歳未満の長男は、お母さんに抱っこされたままそれを指差しして「あっ、あっ、あっ」あって言ったと。つまり自分の関心のひかれたものに、並び合う関係の中で指差しをする。というその発端ですね、それを私絶対正しい観測だと思っただけです。なので、当然のことながら、自閉症児は、普通言葉が喋れるようになる前段階で指差しが始まるが、自閉症児は全く指差しをしない。これ我が家のゆっくんが、見事にそうだったので、そういう横並びの関係で、共感が伝わるというモデルは、すごい正しいと思っただけです。それをですね、動物認識に引き寄せた時に私は大澤さんに、こないだ、なんかたくさんメールで送っちゃったけど、犬に対して、なんだろう。ひとかたならぬ思い入れを保持してるんですね。犬は人間の最良の友というのは私は、何のレトリックでもなくて、実感をもてるんだけど、でもその犬に、犬との関わりの中で、私が本当に、深い断絶を感じたのが、当たり前ですけど、犬は嗅覚で生きる動物です。だから犬にとって、どんなに面白いことでも、私にはそれが分からない。で一方私は視覚が、かなり、視覚にかなり頼って生きてますから、犬と注意の共有ができるはずもないという当たり前のことにびっくりするのがありました。そしてですね、雨上がりの美しい朝にですね、草に水滴がついていて、朝の斜めの日差しがその草の水滴を、サファイアのようにね、輝かしていたんですね。そこで私は非常に感動したというかは、何か凄い得した気分になって、思わずその時我が愛犬に、おい綺麗だな、と言ったんですけど、犬は草むらを嗅ぎまわるのに夢中で、私がいくら綺麗だなーと指差ししてもですね、なんの関心を示さなかった。という感じで。もちろん種間のギャップというのは、ものすごいあると思うのですが、ただ、その話をやすやすと突破したのが、例の心の理論学説だったと思うんですね。むしろ今、大澤さん、橋彌さんにお聞きしたいのは、このトマセロのその後の研究の流れでは、例の心の理論モジュールという話とは、どんなふうな位置関係をつなぎとっているんだろう。というのは、トマセロ&コールの段階では、チンパンジーでも心の理論を装備している、ポジティブな証拠は確かほとんど得られなかったんじゃないかかという記憶しているんですけどそこらへんどうなんでしょうか？

大澤)

これはねあとで橋彌さんの方から何かちょっと説明があると思いますけれど、もちろん心の理論の、心の理論の理論ですね、についての色々見解は持ってると思いますけども。ただね、僕はねまず先に言うておくと、心の理論っていうね、問題設定自体がね、ちょっとミスリーディングだっという風に思ってるんですよ。それはどうしてだった言うてね、心の理論ってね、言うてみれば人間が心を持ってるっていうのはね、なんていうかすごく何か素朴な理論みたいなものだっという風に考えてるわけですよ。その一、理論モデル。例えば、ものは原子からできてると言う僕は理論を持ってるわけですよ。それと同じように、例えばそうですね、高いところから水は下に流れるっていう思い、そういう風な理論を持ってる。それと同じように人間は心を持ってる他の人も心を持ってるって理論を持ってるって言う、そういう理論を、人間はいつくらの時から持つんだ、チンパンジーは持ってるのかっという問題設定になんですよ。でもね、僕はね、心の理論、心ってねそういうふう考えてる間はね、説明できないと思ってます。つまり、たとえば僕がある時色々研究してみたら、実は、いろんなものがあるけれども、実は万物は素粒子からできてることを知ったんだっことで、

素粒子の理論を持つわけです。それと同じように、ある時僕らは、なんだ理論、心ってみんな持ってるんだ、という発見をするっていう風にね、なっていないんですね。その一、多分ね。これはね、逆に言うとね、あの一僕らにとっては何て言いますか、理論以前の事なんですよおそらく。だからまず、心の理論はあるのかってという問題を立てた瞬間にね、負けてると、思います、この議論はね。

いずれにしても色々、菅原さんいろんな話をしてくださって、凄く考えさせられるものがありますけれども、特に犬っていうのはねえ、どう考えたらいいかっていうのが良くわからないっていうのが正直あるわけです。その一、確かにね、犬っていうのはすごいんです。犬だけじゃないですけども犬は特に、この人間との交流って言うかね、本当にすごいな一ってこと時々思うことがあります。ただまあ、その家畜っていうかペットとして飼われるっていうのは、狼の類、仲間ですけど全然違った形で進化してきて、これをどういう風に考えればいいのかちょっとわからないんですが。ちょっといまは色んな事おくとして、最初の方に話して下さった、まあ猛禽類というか、ライオンの狩りみたいなね。これね、僕ね、ああいう肉食の猛禽類みたいなものがね、ちょっと特別なところがあります。つまり、例えばこれもよく霊長類の研究者や人類学の研究者たちが注目するけど、人間って教えるんですよ。教えるっていう行動がある。これはあの、極めて他の動物にはない特徴で面白いんですよ。人間、教えたがるし意図的にも教えるし、意図的じゃなくても教わるわけです。学ぶわけです。これはすごく人間的な特徴ですね。猛禽類の場合、狩りを確かに教えるんですよ。ただ猛禽類の場合、狩り以外は教えませんからね。水飲み場はここにあるよとかね、あのこういう風になると水飲み場が見つかりやすいよってことはないんです。ただ狩りについては、やっぱり、相当スキルが必要なものですからおそらくね、教えないと出来るようにならないと思うんですけど。あの一、まあ、母親が娘たちに、特に教えますね。ですからこれはちょっと特別です。

で、だからまあ猛禽類はちょっとどう考えたらいいかっていうのはちょっと今はカッコに置きたい。というのも、何故かっていうとやっぱり人間っていうものを考える場合ですね、大分系列が変わってくるからですね、そうするとね、今度、狩りについていうとですね、例えばチンパンジーが時々狩りをするじゃないですか。私はまあ映像でしか見たことないんですけども。これはなかなか見事な連携プレーのように見えるわけです。あの一、じゃあこれは shared-intentionalityがあるのかっていう。これはね、しかしね、厳密な意味での shared intentionalityじゃないと、僕は思います。つまり、これはですね、あの一、チンパンジーですからね、それぞれの個体が合理的に行動しようとしてるわけですね。ゲットしようとして。そうすると、あいつが追いかけていくとこっちがわに逃げていくわけですからこっちから回ると。そうするとあたかももうし合わせてこっちから回してこっちからという風に見えますから。そうすると外から見ると見事な共同プレーのように見えますけれども、これはそれぞれの個体がですね individual intentionalityがですね、それぞれがそれなりに合理的にうごけば全体としてみると極めて見事な、コミュニケーションで、コオペレイショナルな関係性が作られるって言うことだと思うんですね。ところが人間の狩りの場合はそれを意図的にやるわけです。その外見の行動では人間の狩りだってチンパンジーの狩りだって両方、いろんな複数の個体がですね、連携プレーしてるように見えますけれども、shared intentionalityでやっているのか、あの一、individual intentionalityの結果として見事にかみ合うのかっていうのは別なと思うんですね。

そうするとね、shared intentionalityが少なくとも人間には確実にある。で、その重要なメルクマールはどう考えればいいかっていうと、こういう風に考えればいいと思うんですよ。人間コミュニケーションってものの核でもあるわけですけども、何かコミュニケーションす

るってことはですね、主として、相手にとってレリバントなことを言うんですよね。少なくとも相手にとってレリバントでなければいけないわけです。でももちろん大抵の場合コミュニケーションは相手にとってレリバントでもあるし、自分にとってもレリバントです。つまり自分、たとえばあそこにレイヨウがいるよって言う事を指差すとすると、それは私もレイヨウを取りたいわけですから私にとっても利害が叶ってますけども、相手にとってもそうです。だから、でも大事なものは、相手にとってレリバントかどうかですね。そうすると、人間のコミュニケーションって考えてみると、なんかあの人道迷ってるな、と思ったとするじゃないですかとか。そうすると、お迷いですか？とか、美術館はあちらですよとかって教えてあげるわけですよ。で、これはねわたしにとっては何の利益もないわけですけども、相手にとってはそれが何か必要な情報があるだろうと思って教えてやるわけです。つまり、相手にさえレリバントであればコミュニケーションは成り立つわけですね。で、チンパンジーがそれをやるっかってことです。チンパンジーはですね、色々騙すためにですね、コミュニケーションをすることがあります。つまり例えば、あそこにバナナがあることをわたしだけが知っている。ちょっと心の理論的状况ですけども。でも、私がそれを取りに行くときに別のやつに見つかったらわけだから、知らんぷりしてしばらくいようとかって思うわけです。でその時に、おなか空かしてるからって、俺はバナナもういらないけどどうぞなんて絶対教えないわけです。自分にとって意味のある時には相手の行動を操作しようとしています。それはある種のインタラクションでもあるわけですけども、人間的な意味での、つまり他者にとってある、専ら、場合に良いては他者にとってだけレリバントであるようなことをいう、示す。そういうことがコミュニケーションの一番重要な部分であり、その場合、shared intentionalityが成り立っている、つまり他者のintentionalityに対して、反応しているわけです。

あるいは、もうちょっと高度な言い方をするとこんな風になると思うんですよ。ちょっと哲学的なあれでいくと、カント³²に、倫理の定言命法の一つの表現ですけども、他人を手段としてのみならず、目的として扱いなさいっていう言い方するじゃないですか。つまりに、あの、何ていうか、手段として扱うっていうのは自分のパースペクティブの中にとって有意味なものとして扱われるってことなんですよ。自分のインタレストとか自分の欲望とか自分にとっての関心の中で相手はどうであるかっていう。で、チンパンジーそれは確実であります。でも、相手にとってレリバントであるっていうのは何かっていうと、言ってみれば、相手を目的として扱ってるわけですよ。カントはね、まあね、定言命法が一番究極の倫理として、道徳法則として言ってるわけですけども、そこまで行かなくても人間の普通のコミュニケーションって、時々、まあ少し、部分的ではあるけれども、常に他者のインタレストの方を優先させるみたいな形で行動するっていうことをやるわけですよ。これが人間の、でもこれが可能であるためには、shared intentionality、まあ、あの一あるいはcollective intentionalityが必要になるわけですけども、それが可能になっているということが自体驚きじゃないか、っていうのが僕の問題提起ですけども、いずれにしても、他の動物がどれくらいそれをやっているかというほうは非常に微妙なんですけど、仮にやっていたとしてもですよ、shared intentionalityが仮にチンパンジーや他の動物にあるとしても、それがいずれにしても可能であるってこと自体が非常に不思議な事だと思うんですね。そんな感じなんですけどね、どうですか。

菅原)

³² I・カント(Immanuel Kant,1724-1804)は、プロイセン王国(ドイツ)の哲学者である。

はい。いいですか？えーっと、心の理論をめぐる大澤さんの批判かな？それは誠に腑に落ちるのですが、こんなとこで聞いていいのかな？大澤さんの本をね、パーツと読んで、あれ、あれはどうやって片づけたんですか？ひょっとするともっと昔の著作に書いてあるのかも知れないですけど、まあ、私が何でそこに引き寄せられたかっていう話を最初にしたほうがいいと思うんだけど、えー、昔のある研究会で、都立大学だったかな、違う違う、成城大学に長くいらっかったのかな？小田亮³³さんっていう文化人類学やってる方だったら必ずご存知の文化人類学者が、永井均³⁴の話をね初めて教えてくれたんですね。その時の小田さんのものの言い方がとても面白くて、私は今でも忘れない、てか今日それを一度使ってみたかったんだけど、「ああ、僕がもしスターリンだったら、どんなことをしたんだろう」っていう、そういう空想ってのは意味がありますよね。ある可能世界を夢見るといふ。だけども、「大澤さんはもしトロッキーだったらどうだったんだろう」っていうのは全然意味のない問いかけだと。つまり、自分自身だったらスターリンの内面を生きることはできるけど、大澤さんがトロッキーの内面を生きてるのがトロッキーが大澤さんの内面を生きてるのかっていう問いは私には絶対理解できないからそれは意味がないというね。その話には私はかなりグツときちゃって、それからもう永井均の『私のメタフィジックス』を読んだり、なんやかや。

大森荘蔵さんがね、弟子の野矢茂樹³⁵さんとの議論で、「だから！それが俺じゃないことが、どうなってるんだ！」って怒鳴ったっていう話も、かなりグツと来ましたけど。つまり、大澤さんはこの、他者について考える長い道のりのいつどこでどうやって独我論を乗り越えたのか、その秘密を今日、ちょこっと、ちゃっかり聞いて見たいなって言ってるんですけど。

大澤)

あー、なるほど。逆に言えばですね、ぶっちゃけ言えば、じゃあ独我論はどう乗り越えればいいのかっていう言い方に近いんですよ、僕の問題はね。本当は。まあ永井さんは日本で一番開き直った独我論者っていうか。例えば、永井さんの的に言えばもう、100%shared intentionalityなんて、そもそもその概念自体認めないっていうか、お前の心の中でAさんのパースペクティブとかBさんのパースペクティブを類推するってことはありますよ。けども他者が現れてるっていうのは私と対等なパースペクティブが向こうにあるっていうことを意味するわけですから、そのまあチンパンチだってね、他の個体が何を考えているとか、俺が欲しいと思ってるバナナをそいつも欲しがってるらしいとかってことはわかります。けども、それは自分のパースペクティブの中で、自分の宇宙の中で、一つの要素になるだけですね。けど、向こうに私の宇宙と対等な宇宙があるっていうことが必要なんですよね。それがコミュニケーションの前提であり、そして、シェアされたインテンショナリティっていうことを可能にしているらしいんだけど、これは、つまりどうして、普通に考えればある意味事実として我々はねその現象を不断に生きています。つまり、shared intentionalityを生きてるし、例えばね、実験でも、shared intentionalityをしているらしいものとそうじゃないらしいものがあるって、つまり実験的な観賞からでもある程度分かるわけですよ。

まあ、例えば、先ほど言った指差しなんてのもそうですね？その一指さしに反応する。あの一、トマセロなんかやった有名な実験ですけども、容器の中に子供だったらおもちゃ、チンパンジーだったらバナナなんかを入れておくわけですよ。で、ここに入ってるよって指で教えてやる。で、容器が透明であればね、チンパンジーはすぐにもちろんヒント

³³ 小田亮(おだまこと,1954-)は日本の文化人類学者である。

³⁴ 永井均(ながいひとし,1951-)は日本の哲学者である。

³⁵ 野矢茂樹(のやしげき,1954-)は日本の哲学者である。

になりますから喜んですぐ探す、正解にたどり着くわけですよ。ところが、容器が見えなければね、人間の赤ちゃんはですね、もう言語を話す前からですね、その見えない容器を僕らが指させば、そこに何かがある、私にとって有利な何かがあると思って探しに行きます。チンパンジーは不透明な容器を見せても見えなきゃ何とも思わないですよ、だからつまり、他人が私にとって有意味な情報をあたえてくれるなんて思っちゃいないんですよ、初めから。だから、これがねshared intentionalityがある場合とない場合の違いが、行動上の違いとして出てるわけですね。だから、僕らは普段の行動の中で、あの明らかにshared intentionality的な現象で、あるいはコミュニケーション、人間的な意味でのね、成り立っていることが現に僕だって今こうしてお話したりしているわけです。だけれどもそれがどうして起きているのかって言うかなんて言うか、哲学的な論理の問題として考えてみると、説明不可能なこと起きてる感じがするわけです。とても不思議なことが起きてるわけです。だから、僕ね、先ほど言ったように人間っていうものを定義する一番のポイントは、やっぱり社会的知能みたいなどころであることは確かなんだけどもの、社会的っていうことがどういうことなのかってことは本当は誰にもよくわかってないっていう感じが本当はするんですよ。例えば、先ほどの心の理論だと、一つ知識が増えたみたいな風にしか思っていないわけです。まあ、有力な仮説ですけど、万有引力の法則だけじゃなくて心の理論もあなた信じるようになりましたみたいにしてるけど、そういう仮説以前の世界の在り方ですよ、心の理論っていうのは。それに対して僕らは私の心のみならず他者の心っていうような他者に所属する心ってものに対して反応するっていう現象はね、すごく不思議なことだと思うんですよ。

例えば、ヴィトケンシュタインにね、『論理哲学論考』にね、「私が見出した世界っていう本を書いたとしたら」、あのつまり、「一生の間に自分が経験したことがすべてそこに記述されてる」わけです。「その中に一度も登場しないのはわたし自身である」と。もちろん私が今日何月何日に菅原さんとコロキウムをやったとってことは分かりますけれども、まさに書いているあなたはそこには入っていないわけだから、結局、私そのものは出てこないっていう話だったんだけど、それだけじゃなくてですね、考えてみれば、私だけじゃなくて、私のみならず他者っていうのはある意味で私が表象した他者は出て来ますよ、私は想像したり類推したり他者は。でも私が見いだした世界の他に外に例えばあなたの見いだした世界っていう本が実はあるわけですよ。でも、その本のことは私の本の中に私の本と対等な形では絶対に引用されませんね。そのまま書き写すことは出来ますけど、それは私が見いだした世界っていう本の中の一説に過ぎないんです。そうすると、あの他者ってものの存在に対して、僕はきわめて自明に関わっていて、それが僕らの生活の全てに近いくらいそうなんだけれども、それが一体何であるかっていうことはね、本当によくわからない現象だと思うわけです。

まあ、言ってみればね、その永井さんを説得できるか、っていう感じですよ。その、あの人は徹底して、なんていいますかね、本気でやってくるんですけども、もちろんね、絡め手で言うって方法もあるわけですよ、いざとなったら。本当。つまり永井さんの言ってることをそのまま論破することはかなり大変骨が折れるところがあるわけですけど。しかし、じゃあ永井さん、何であなた本書くの？何で説得したいの？って思うわけじゃないですか。そしたらやっぱり永井さんは、他者に訴えたいわけじゃないですか。で、しかも永井さんはこう書いてある。「自分の言ってることが分かるはずがない」みたいに書いてあるわけですよ。

菅原)

ははは

大澤)

でも、論理的にそうであるわけですよ。ある意味でね、さっきのギャバガイじゃないですけど、永井さんの言葉を良くわかるよって言ったらウソになっちゃうわけですよ。分かるはずがない、原理的に。私の宇宙は私の宇宙なんだから。っていうことを一生懸命書くわけですけど。しかし、そのパフォーマンスの中ですでにコミュニケーションが入ってますからね。そこは何ていうか彼のパフォーマンスと語ってることと、語っているっていう行為と語られてる内容の間に何かこう、ずれがあるんですけど、でも、語られている内容のレベルでそれを乗り越えるのはなかなか難しいところなんですよ。それをどう考えればいいのか、っていうのは、まあ、ちょっと考えもあるんですけど、菅原さんに一旦振ってからにします。

菅原)

一挙に、話が究極のどこまで行ってますね

大澤)

いきなり究極ですね

菅原)

ええ、私がこの話に関して二つ考えたことがあって。それを飲み屋でしゃべるような感じで言っちゃうとですね、うーんと、一つはねえ、これは昔、あ私の最良の飲み友達水谷雅彦³⁶に言って一蹴された話なんですけど。「他者が、私の全く知らないこと喋って私が驚くことあるじゃん」って。それで他者がいることを端的な驚きによって証明できるんじゃないんか言うたら水谷に、そりゃ甘い甘いつてねえあっさり片付けられたんですけど、その後ねえ水谷がちっちゃって言ったのが正しかったと思ったのが、それは夢なんです、つまり私は一時っていうか、青春時代膨大に夢日記をつけていて、今でも大きな財産だと思うんだけど、カラハリのテントでもポツポツポツポツつけとりましたけど、ただ夢日誌というのはねどうしてもフィールドワークと両立しないんですね。まず、長い夢を見るためには10時間ぐらいに寝ないといかんじ、そんであのまた複雑な夢だと筆記するのに1時間ぐらいかかったりすることもあってとっても仕事にならないので、もうほとんどやらなくなっちゃったんですけど。私がある時見た夢は、それも犬の夢なんですけど。私が昔飼ってた真っ黒な犬ですね、そいつと一緒になぜか「キョウシンカイ(漢字不明)」っちゅうものに行くんですね。で、ところがキョウシンカイの広い会場で犬とはぐれちゃって、困った困ったって言って家に帰ったら真っ白な犬はいるんですね。で、よくよく見たらうちの黒犬を白い絵の具で乗りたくっていて、私は「誰がこんないたずらしたんだ！」ってプリプリしながらその犬を洗ってるところで目が覚めると。でね、どう考えてもね夢を見てる、そのキョウシンカイで犬とはぐれちゃったってその慌てふためいている時には、その未来、えーっと、実は白く塗られていた未来は私の中にはないんですね。それが突然到来する。ということは、他者の言ったことに対する驚きってのもこういう仕組みで到達するんだったら独我論を乗り越えることはできないと思ったんですが。でもね、そういう私が前もって把持できない事柄ってというのはやっぱ無意識しか、無意識の中で私自身が二重になってる、三重になってる四重になってるというふうに考えない限り、私に到来することはないのだから、つまり私の心の中に無意識を措定するということは、他者を措定するのと同じことちゃうのというのは、私のその時のに一つの納得だったわけですね。で、もう一つだねかなりショボイんだけど、えーとあれです。私が昔、ひたす

³⁶ 水谷雅彦は京都大学に所属し倫理学を専門としている。

ら愛した山口百恵のですね、横須賀ストーリーという歌ね「急な坂道駆け上がったら今も海が見えるでしょうか」っていうわけですね。でね、これは彼女が坂道の上において、私がそこへたどり着いたら彼女がふっと30センチ横に体をどかすだけで、私は彼女と同じものを見るという。まあ、つまり時間差という導入すれば他者のパースペクティブを自分のものにできる。というのわずかに独我論を揺るがすかも知れない。でも同時に行ってなかったら意味ないんだばか！と大森さんだったら怒鳴りそうかなってというような素朴なことを考えたことはあります。

大澤)

でもまあどっちの話も考えるヒントとして面白いですね。ちなみに大森さんはねやっぱり永井さんほど攻撃的じゃないけど、まあやっぱりある種の独我論ですよ。まあ、永井さんはそこを特に強く強調するって感じですけどもまあ大森さんは控えめに、その、気付かれずに行く見たいな感じですけどね。それはともかくとして、今のね例えば無意識の話から行くとね、それはやっぱり他者ってことを考える重大なヒントだと思います。つまり無意識ってのはね、その無意識って何なんだろうかって考えるとね、無意識ってなんていうかやっぱいろんなところで誤解されていると思います。つまり説明としてね。例えば実際に自分は意識していないけれども体は色んな形で活動してるわけですよ。今だって心臓動いていたり発火作業があったり色んな事が、まあ無意識のうちに色んなことやってる、瞬きもしてるじゃないかって、言う風に言えるのは、色々と言っている無意識ってそう言うことじゃないんですよ。

その、ある意味でね別に無意識って隠れてるわけでも何でもないですよ。ある意味ではっきり表れているわけです。しかし現れているのに、だからある意味では私の思考、頭の頭の中で表現していることだと、私の思想とか思考であるはずなのに何故かそれに他者を感じてしまうっていう感じですよ。私のものなのに私のものじゃない感じがするっていう感じ。それが無意識ってものの一番不思議なところなんですよ。だから、私の思考が私の思考じゃないところで展開してるみたいに見えるっていう感じですよ。それが無意識っていう現象です。ですから、他者ってことを考えるためのすごく重大なヒントっていうか、僕らが他者ってものに接するひとつの場面だってことは確かだと思いますね。

それから、さっきの時間差の話ですけどね、これねよく考えてみると結構重要だと思うんですよ。ていうのも時間っていう問題と他者の問題とを結びつけている哲学者って結構多いわけです。それで、一番はっきりしてるのはレヴィナス³⁷なんですよ。

菅原)

あー

大澤)

その、レヴィナスにとっては、時間という現象と他者っていう現象はですねほぼ同じものだと言ってもいいですね。それはねえどんな感じかなあ・つまりねこんな感じなんだな、あの一、レヴィナスっていうのは基本は他者論ですけども、いかに他者と出会うってことは困難であるのに出会っているのか見たいな。まさに今、僕が問題にしてるようなことを考えてるわけですけども、その出会いそこなうことで出会うんだみたいなイメージですね。例えば具体的に言うと、レヴィナスの良くやる比喩でね、お医者さんが触診っていうのをやるじゃないですか。それと愛撫っていうのはほとんど同じ事やっているのに、愛撫の時には他

³⁷ E・レヴィナス(Emmanuel Lévinas, 1906-1995)は、フランスの哲学者である。

者にいわば接しているわけです。触診の時にはそれを一つの物体としてやってるわけです。でも愛撫していたら気がついたら俺も触診みたいになってみたいになるんですね

菅原)

ふふふ

大澤)

こういう、つまり愛撫みたいに、よーし他者を感じるぞって思って、よしもっと感じようってしたら、気が付いたら相手の身体をただ触診してるみたいになってしまうっていう。そうするとねどうい感じかっていうと、私が探していた他者はもう過ぎ去って行ってしまったって感じになるわけ。愛撫しようとしたら気が付いたら触診になってるから、私も探していた人はもうすでにここにいないっていう形で体験してるんだと。そうすると他者の体験の中にすでにいない、とかね、まだ来てないとかっていうね、そういう時間性が入ってくるわけ。それから、時間についての体験っていうのと、人間の場合少なくとも他者についての体験ってものが実は非常に結びついてるっていうのがレヴィナスの論点で。まあ、もともとあの人はハイデガー批判からはじまってますからね。まあハイデガーの弟子であると同時に、ハイデガーを全面的に乗り越えるみたいなことが目標ですから、この時間論ってのすごく重要なあれ(理論)になってます。で、考えてみるとやっぱりハイデガーの場合Daseinですから、まあDaseinって何人ぐらいいるんですかって言いたくなるわけですけども・・・、まあDaseinっていう時ね多分、コギトとおんなじだと思います。つまり、それは何人いるか何て考えてませんよねあんまり。とりあえずは一人です。だから、もちろんハイデガーもあとで鏡像の世界の話が入ってきたり、それだから途中でナチスに加担しちゃうってこともあるわけですけども、まあいずれにしてもスタートは非常に、一人の実存が存在に関わるってところからはじまっていくんだけど、何とかそこに最初から他者っていうものを組み込んで行きたいっていうのがレヴィナスのやってることで、僕らも、レヴィナスみたいな抽象的な哲学だけじゃなくて、今僕らは目の前で起きてる様々な、コミュニケーションのような現象ってものについて僕ら考えたり、あるいはコミュニケーションの困難さについて考えている時に、起きてることを記述しようとしたらねやっぱり、レヴィナスが問題にしたようなレベルまで事柄を深めていけないとうまく説明できないっていうか、自然と時間という問題とも結び付いていくっていうか、そんなイメージですよ僕としてはね、うん。そんな感じですかね。

僕はね、ちょっともう一つだけ言っておくと、あの一、先ほど一番最初にプレゼンっていうか自己紹介の時にね、人間とは何かって問題考えると哲学系列の話と経験科学系列の話と(したけど、)どっちもどっちっていう感じになっちゃうわけですよ。哲学の方は一見、なかなか気の利いたこと言うな深みがあるなと思うけれども、それは本当は人間って概念の中に最初から仕込んでいたものを取り出してるだけだっていう、手品みたいなみたいなものにしかなくて。で、それに対して経験科学が地道に明確な知見を束ねていくけど、それ俺が知りたかったことと違うんですけどみたいなことばかり教えてくれるみたいなことになるんです。この二つがね、交流させることが重要だとおもうんですよね。で、だからトマセロはいい線行ってるんです。哲学的センスもあってその上、経験科学者としても極めて一流で。でも、まだ少し足りない。それをもっと補いたっていうイメージなんですよね、うん。

菅原)

私は恥ずかしながら、レヴィナス全然読んでなくて、残り時間で何とかとは思っているんですけど、でもね不思議なことに、人間の話で、哲学的な話をしてた方がよく分かりますね。

やっぱ、こうやってしゃべっても全然謎なのは、動物はどうやって、joint attentionを実現しているのか。本当にそのものを実現しているのかどうかという最初の問いかけというのが、まだ全然ツルツルの壁で、手がかりひとつ見当たらないというのは、私はやっぱ、同じ人間だからっていう、土俵に立つと、これだけ話は、まあ、言うたら分かりやすくなるというの自体がね、謎だと思うんだけど。

橋彌)

菅原さん、関連してよろしいですか。

菅原)

はいはいはい

橋彌)

実験とか経験、先ほど、菅原さんは心の理論の話はされてたんですけど、大澤さんが話されていたギャバガイ、ギャバガイ問題のまさにそのタイトルの本をプレマック³⁸が書いているのがなかなか面白いなど。プレマックというのは、心の理論の創始者ですけども。おそらく、確かにその動物、人以外の動物に哲学的にアプローチするってのは、なかなか難しく、ただその今、最初の菅原さんの質問の関連でいくと、これはトマセロの仕事じゃないんですけども、京大にいる山本真也³⁹さんとか仕事で、チンパンジー実験室の状況で、チンパンジーが、二つの並んだケージに一頭ずついて、一頭の方が、例えば右側のチンパンジーは、棒があれば、それを使って餌をとることができる。でも、その棒は隣のケージにしかないんです。ただ、隣のケージには、紐もあれば、棒もあれば、なんか他の輪っかとかいろいろ道具があるんだけど、その実際に棒が欲しいチンパンジーのところには何も無いっていう状況で、そうすると何も無いチンパンジーは、隣のケージを、バンバン叩いたりして要求をする。要求すると正しい道具を渡すことができる。つまり適当に渡すのではなくて、その文脈に応じた道具をはいはいと。別にでも、面白いのは自発的には渡さない。つまりその隣のやつの状況はわかってるんですね。状況は理解できるっていうかしてるんだけど、それを自発的に渡すってのは、人の子供だったらやるわけですよ。トマセロのまさに実験のように困ってる人がいると、指差して教えたりとか、物を渡したりとかっていうことを、自発的にするんだけど、それを理解はしながらやらないっていうのが、もしかするとチンパンジーの特徴かもしれないという話をまあ山本くん達は、してて、その辺りは結構面白いというか。つまり理解するのも、まあだからそこがjoint attention, joint intentionalityとshared intentionalityの違いだと思うんですよ。

もう一つは、例えば、狩りについておっしゃってたのも大澤さんがおっしゃってた通りで、まあ食肉目⁴⁰とかチンパンジーの狩りっていうのは基本的にその個体の利益をそれぞれが最大化すると、結果的に成り立ってるんじゃないかっていうのがまあ、結構行われてる議論で。ただそこで多分、重要になってくる大きな違いは、ウィルネスの問題で、僕らが協力して何かすると、「俺らやったよな」みたいな、そういうその結果を共有する場面っていうことが生じるわけですけど、チンパンジーの狩り、まあ狼もそうですけれども、大きな獲物がとれたことをともに喜び合ったりはしないわけですよ。そうすると獲物がとれると、あとはもう、分配とか取りあいていう、そこにはルールが存在し得るわけですけども、それがおこる

³⁸ D・プレマック(David Premack,1925-2015)はアメリカ合衆国の心理学者である。

³⁹ 京都大学高等研究院准教授 京都大学野生動物研究センター兼任准教授

⁴⁰ 食肉目とは、哺乳類の分類の一種。現在は「ネコ目」とも呼ばれる。

と。ただ結果を共有するって言うことが存在しないっていうのは、大きな違いではないかっていう議論があります。

あと今チャットの方で質問者1さんから頂いてたのが、その、theory of mindという言葉（について）、心の理論というのを私が話すものすごく長くなるんですけども、コメントを頂いてるのは、私の所に頂いてるのかもしれませんが、心の理論っていうより、デネット⁴¹がでインテンショナルスタンスって言い方をよくしますけど、よく思考的態度と訳せばいいんですかね、スタンス、ていうことの方が、誤解が少ないんじゃないかということです。theory of mindというのは歴史的にもあかなり解釈が変遷してるってか、元々持ってる PremackとWoodruff の使ってた用語というのは、かなり変わってきてる。それについては、ちょっとまた別の機会に是非議論して頂きたいんですけど、そんなところです。

大澤)

橋彌さんのところが非常に重要なところがあって。例えば、最初のチンパンジーが要求されれば、要求されない感じが、やっぱり決定的なちがいはないか、人間という場合とのね。なんて言えばいいですかね、僕らね、特別に親切じゃなくても困っていきそうで、あの人なにか探していると分かっていたら、これありますよって渡しちゃうんですよ。それは別に特別に奇抜な人というわけじゃないんです。その方が、ごく自然な反応としてそうなるわけですよ。

チンパンジーの場合は、強烈に欲求されているのでね、その迫力でおされているんですよ、おそらく、いってみれば。相手が何を欲しているのかは分かっているんですよ、はっきりとね。相手が何を欲しているか、分かっているのだから相手の心を少し分かっていることですよというふうに、思いたくなるんですけども。そうだな、例えば蛇が何をしようとしているかわかるとか、この物理的な物体がどういう方向に動きそうか分かるかとか、そういうことについてかなりきちんとした因果モデルであるとかintentionalityのモデル、図式をもっているのは確かです。で、ただそれと多分ね、人間のshared intentionality、ぼくはjointとどう理解しようか、元々逆説的な部分もあるので多分トマセロの中にいくぶんかその部分で曖昧なものがあるんだと思う、僕は思うんで。

いずれにしてもね、一番重要なのはこうだと思ふの。本当はね、例えば、心の理論なんか割合とそっちの話になりがちだけれども私にはこう見えてるけどあの人そう見えてない、私はこれを欲しているけれどもあの方はこれを欲していないというような違いが理解できるかってところで、大体心の理論ってのは、測るじゃないですか。

私は見てたんだから、あれがそこに隠されていることは知ってるけれども人見てないから知らない。それぞれの人に違った perspectiveや心のあることを理解しているんだとみたいなことをポイントを置いて考えますね。しかしね、本当に難しいことはね、人間にとって、もっと自明なことだとおもうの。つまり、確かにね、僕は知っているけれども、おかあさんは僕がいない間に起きたことは知らないんだということを理解するには、多少の知的な発達が必要かもしれないですよ。

僕が知っているとお母さんは知っていると思っちゃうけど、お母さんはあのとときいなかったじゃないのって思っていたら、ほんのすこしぐらいはたつと。ぼくら、違いを理解する方のポイントを考えますけどね、しかしそれよりもね、本当のポイントはですね、同じ違うのに同じ、両方とも同じことを欲してる、同じですね、同じの理解の方に本当は飛躍があるのだとおもう、人間に向かう、だけどそれは人間にとってあまりにも自明なことなんだね。特に、例えば人間

⁴¹ D・デネットは(Daniel Clement Dennett III, 1942年 -)は、アメリカ合衆国の哲学者である

にとって、少し難しいことについてやらせたくなるわけですよ。チンパンジーは数字理解できるかどうかね。多少絵文字を理解できるかとか、人間だって少しは苦しいことだと、いかにも知的なことをやっているかのように思うからで、本当は人間にとってはある意味で、簡単すぎて、そもそも知能以前の問題だって思うようなところに、ポイントがあると思うんですよ。だから違うってことよりも、同じ、違う人が同じ。例えば模倣って現象はそれに関係することじゃないですが、そっちの方に人間に向かう飛躍があるんけれども、という感じがしますね。本当の難しさが。

橋彌)

PremackとWoodruffの最初の問題設定は、今まさに大澤さんがおっしゃった部分にあると思います。

菅原)

いいですか。質問者1さんから、興味深いコメントが来てるんだけど。joint intentionalityの話は、今私あんまりいい考えが思いつかないんですけど。さっき出てたギャバガイの話ですね、あれは確か、W・V・クワインは文化人類学的状況を思考実験してみようと言ったと思うんだけど、文化人類学的って言われても、実際の経験主義的なね、観察は全然知らないでいうとるな—というのが正直な思いで。どういうことかという、それはつまり、sort taxonomyが発見した驚くべき事実、それはどんな社会にも階層は様々だけど、動植物を相手にする限り少なくともジェネリックと言われるレベルはあるということですね。そのジェネリックというレベルは、言語的な構造から言うと、せいぜい数音節ぐらいのね、単純なものであると。これって、我がグイの例に、現実非常によく当てはまるんですけどね。哺乳類の種名というのは一番長くて、3網羅、ジェネットというジャコウネコの仲間ですね、あれはツアンバと言って3網羅ですが、あとはほとんど2音節なんですよ、ハン＝ライオン、豹＝コエ、じゃっかる＝グビ、うんぬんかんぬん…

で、間違いようがないんですよ。つまり、そのうさぎを指差してギャバガイっていつて言ったらね、それは、夕日に照らされたうさぎ性かもしれないなんて、哲学者がやっぱり頭でひねりだした話で、実際は皆、直感的にやっているんですね。だからその一旦人間の話にしちゃうと、どんどんどんどんね、話を分かりやすくする逃げ道があるんですね、その逃げ道の一つが、何らかの形成＝ディスポジションが生得的にビルトインされてるんだよってね言ってしまうと、だから世界中どこでも、例えば自分たちの身近な哺乳類の名前は間違えようのない短い音節で、名前がついているじゃんみたいだね。

ただ私がずっと得心がなかなかなかった、我が敬愛するメルロ＝ポンティおじさんのようにですね、生得性って言っただけでね、アホかお前は！という風に、生得性仮説に自体に過剰に、嫌悪感を示す人ももちろんいるんですけど。まあでもそれはその生得性って言っちゃった途端に、謎への問いを遮断してしまうということに対する、哲学者の意地があるのかなと思うんですけど。ギャバガイ問題については、それを言っとかないといかんなど。

それとね、多分質問者1さんのおっしゃってることと近いと思うんですけど、よく分析哲学にね、ばかばかしい例文って出てくるじゃん。P・グライスのインプリケーションの論文とかも、かなりバカバカしい例文だと思うんだけど。あれがやっぱり、ためにする議論に思えるのは、何で短文でね、コミュニケーションについて考えるときに、何で短文で考えるのかって思うんですよ。素朴に。だって、普通だったら、なんかわかんないことを言われたら「えっ」とかで聞きかえすじゃん。

インタラクションが、「ととと」と始まっちゃって、それで人間理解してる。その「ととと」という部分をあえて遮断して、ワンセンテンスで何が理解できるかということを考えようとするところに、私はある種の倒錯的な傾向を見るという意味では、質問者1さんがコメントすることに、一部賛成。なんだけど、と言っても、joint attentionの話、なんか突破口を開くような、妙案はちょっと、まだ今のところ、見当たらん。私はちょっと見当たらんわというそういう感じ。

あとね、これも間接的な話にしかすぎないんだけど。いわゆる平等主義者といわれる狩猟採取民、特に我がブッシュマンの話なんですけど。彼らのきわめて調和的な社会っていうのを、いわゆる共感が伝わってるっていうような話で捉えるのは、私は間違ってると思うてるんですね。

それはむしろさっきから出てきてるチンパンジーみたいな、みんな徹底的にエゴイストとして振る舞っているんだけど、そこである種の平衡、妥協が生じて観察者には、すごく調和的な社会に見えるという。それは田中二郎さん⁴²が、基本的にはエゴイストの集まりだと、初期のエスノグラフィで言ってるんで。

ただそのニュアンスをね、皆さんに、理解してもらうことがこれはけっこう難しくて。例えば、苦痛という問題ですね、大澤さんと三人でよく酒飲んだ社会学者の高橋由典さん⁴³キリスト者として、聖書の読解、すごいユニークな読解をやってらっしゃいんだけど。イエスを苦痛の転写という概念で捉えようとなさったんですね、ちょっと前に。その苦痛の転写って、私たち、例えばなんだろう、L・ワイトゲンシュタイン風に言えば道端で「痛いよ、痛いよ」と言って泣いてる子供を見たら、「おお、ぼうやどうしたの」と言ってつい手を差し伸べる、その苦痛が、半ば自動的に私に転写されるっていうイメージですね。

でも、そのグイの人たち見てるとね、そんなことしてるのかなっていうね。本当に私が例えば、ものすごい食中毒系の腹痛で、テントの中で七転八倒してる時に、私の一番頼りにしてる超助手が「ん？」て覗きに来て、「お前がそのようであると、俺はここの痛みを感じる」とか言って、すーといなくなっている。あれは単にね、心の痛みを感じるってね、言わなきゃいかんから、言ってるだけで、本当に苦痛なんか転写されてないよなって、私は思うというような感じで。だから土曜日に京都人類学研究会で鈴木和歌奈さんが実験動物の話してたけど、それとちょうど同じ時間帯に確か、春日直樹さん主催で人類学に共感が必要かっていうすごい挑戦的なタイトルのシンポジウムしてて、私は両方聞きたかったんだけど、結局鈴木さんの方を聞きちゃったんだけど。共感が必要かという、若干なんだろう、偽悪的な問いかけというのも、こういう文脈では、意味があるかなと思いました。まとまりなくて、すみません。もうちょっと考えます。

大澤)

考えてみるとね、僕ら簡単に共感とかね言えますけど、難しい(って思うんですね)。共感という現象はなんなんだろう。相手の痛みがわかるっていうときにみんないうじゃない。「おまえじゃあ痛いの？」って(聞くと、)「いや、いたくないけど、相手の痛みはわかる」っていうときに、いたくはないけれども、わたしのものではない痛みについてわかっている。わたしのものの痛みは、すでにいたみじゃないじゃん、ってなるわけですよ。だから、相手の痛みがわかるというのは、ある意味で不思議な現象なんですけど。その辺をワイトゲンシュタインなんか突いていったりするんですけど、「痛い痛いわたしのものではない」

⁴² 田中二郎(たなかじろう,1941-)は日本の人類学者である。

⁴³ 高橋由典(たかはしよしのり,1950-)は日本の社会学者である。

というのがわかっているのはもはや痛みではないですから、自分が痛んでしまったそれはもはや私の痛みなので、私のついでというのがついてない痛みっていうある意味で空虚な概念じゃない？みたいな議論ですね。ちょっと哲学者好みですね意地悪な議論に聞こえますけども。

ただね、哲学の理論ってそういう極端な設定したり、シンプルにしたり、逆に、そんなことという思うような設定をしますけれども、それが良いかどうかというのは、そこから何が得られたかではないですかね。

例えば、僕の好きなS・クリプキ⁴⁴なんかはさ、規則に従う事っていうことで、規則っていうものがあって、僕らはそれに従ってというモデルで考えていくわけだけど、それがいかに不可能なことであるか、つまりこれはありえないこととしておきているわけです。僕らはたしかに規則に従っているわけです。今だってちゃんとしたルールに従ってコロキウムやってるし、計算のルールに従って、 $5+3=8$ だというルールにしたがっている。人間の頭の中に、アルゴリズムってのが仕込まれていてそれに従って考えている、そういうのが規則じゃないかって人間は考えたくなるが、それがいかに間違っているかということを説明してくわけですよ、その時にその極端な決定をするわけですよ。プラスに対してクワスっていう、変な議論をしてくる。菅原さんの前で説明してもしょうがないですけど。(それで、彼は)すごい変な設定をします。でもそのおかげでね、僕ら規則っていう現象を、全く別に考えなきゃいけないことに、気が付くわけです。いままでの規則っていう現象は、こういうものでしょと思っていたのが実は、全然違っていたことだったということがわかることなんです。今回のjoint attentionとか、joint intentionalityとか、shared intentionalityとかの現象についても僕はそう思っている。

つまりどこかね、なにか根本的にまだ問題が設定な仕方に何か、まちがいがあるわけですよ。今までの普通のモデルで行けば、本当は不可能なことを要請していることになっているわけですから、そうするとこれはね、僕らの元々の問題の設定そのものに、何か、まだ理解できていない根本的な盲点があるわけですよ。だから、それも探るためにはね、でも逆に、僕らがやっていることの論理的なインプリケーションみたいなものをわざと極端化して、引き出して、見せるわけですよ。例えばクワインのギャバガイだって、もちろん言い訳で。でも考えてみれば他の言語を理解したりとか翻訳したりした仕事だってやってるわけから。そんな時に僕らは、普通は、すでに辞書があつてみたいなことでやりますけど、だって、菅原さんみたいに誰も知らない所に行って知らない言葉をやっぱわかってくるわけじゃないですか。

言ってみれば、根源的翻訳不可能性は、ある意味で克服されているわけですよ。それが、どうしてなのかっていう問題を立てることは、できます。クワインのように、問題は設定をしておけばね。つまり、問題は何かって言うと、答えを与えることよりも、どこに謎のあるかっていうことを、発見することが重要だと思うんですよ。謎は概して、いかにも僕らがぶつかっている困ってることの中にあるのではなくて、僕らがいとも簡単に克服してしまってる部分に実は謎があつて。特に、我々とは何か人間とは何かということ、問おうとしたらね、より一層そういう僕らにとってあまりにも当たり前のところから問わなきゃいけないっていうか、そこに謎があることを発見するってことは一番重要じゃないかなっていう風に、僕としては思いますね。

⁴⁴S・アーロン・クリプキ (Saul Aaron Kripke, 1940年12月13日 -)は、アメリカ合衆国の哲学者・論理学者である。

菅原)

一点だけね、苦痛の話なんですけど、私は神経科学とか脳科学とかなるべく近寄らないようにしてるんですが、一つは、こないだ書いた本で、「俺は科学から手を切る」っていうようななんか無茶苦茶な宣言をしちゃったんで、なるべく科学の用語は使わないようにしてるんですが。その前にね、その前にV・S・ラマチャンドラン⁴⁵という『脳の中の幽霊』っていう本を読んで、素直に感動しちゃったんですね。私が一番ビックリしたのは実は皮膚境界ってねある種の飲み屋でも出来るようなね、操作をすると容易に、乗り越えられちゃうんですね。確かラマチャンドランは、こういう裏書きで皮膚境界はかくも曖昧なので、一緒に暮らしている人どうしの中で、皮膚境界が曖昧化するというのは、理解可能だみたいな事は書いてるのでそれだけは素朴な驚きでしたね。実際飲み屋で実際やってみたら、本当にびっくりしちゃって。「なにこれ気持ち悪い僕のももがテーブルになっちゃった」とかね、叫んだ人がいたりして。それはまだラマチャンドランお読みでない人は、コロナ渦が、終わったら飲み屋芸の一つとして覚えた方がいいかもしれない。

大澤)

彼の本はね面白いんですよ。色々何億円をするような装置をつかったらこうだってわかるという話ではないんですよ。でも、すごくそれで高度なことがわかるっていうかね、そこがすごいんですよ。ちょっとした鏡を利用するだとか、ちょっとしたどこにでもあるデータを組み合わせるのに、それなのに、わかったことが些細なことではなくて、おどろくようなことなことをする、そこは、ラマチャンドランがいかにセンスがある人かっていうことをね、感じるものがありますよね。

一つだけ最後にちょっといっとくと。言えなかったからいっとくと、僕の本当の目論見を言うと。今日問題の提起をさせていただいて、本当はこう思っている。今日本当は、時間がないからしゃべれないと思うんだけど、今、僕はトマセロの問題がどこにつまづいているかの話をしたわけじゃないですか。で、それをとく鍵がね、ヘーゲルにある。ヘーゲルってね、精神現象学って一番有名な本があるじゃないですか。これは、人間の精神の、今風に言えば進化過程の哲学的寓話として語っていくみたいな話ですけども。

これは、永井さんも、結構お気に入りの本で精神現象学の冒頭のところを、丁寧に引用しているんですよ。なぜかって言うとね、精神現象学のスタートって永井さん風の設定で始まるんですよ。つまり独我論的です。あるいは、トマセロの言葉を使えば individual intentionalityなんですよ。個人のintentionality。ところが、ある段階で、他者が登場するわけですよ。1番有名な他者です。それは自己意識って言われる章で、そこで主人と奴隷の葛藤っていうすごく有名な部分が入っている。これは精神現象学の中で一番重要なとこなんですよ。一番有名な部分です。永井さんなんかは、独我論的で、スタートしたのにいきなり他者が出てきてけしからんって、もっと首尾一貫した理論にしろとつかって、そのところから文句を言うわけですけども。そうじゃない。そこで他者が登場する言ってみれば、individual intentionalityから他者がいるような、jointだったり、shared intentionalityへという展開をね、19世紀の前半の人ですからもちろん、今のいろんな科学的知見なしで考えてきているわけですけどですけども。

僕は、主人と奴隷の弁証法という話はね、すごく難解ですけども、よく考えてみるとjoint attention intentionalityないし、shared intentionalityのね、謎を解くためのロジカルなヒン

⁴⁵ V・S・ラマチャンドラン (Vilayanur Subramanian Ramachandran, 1951年-)はインド出身のアメリカの神経科医、心理学・神経科学者である。

あの僕はねこういう問題を考えるとき、例えば人間は言語があるじゃないかとか、そこが違うとあって色々、人間と動物の違いとかいうわけですけど、概して、違うのは当たり前だけど、あまりにもレベルの高いものを人間の特徴としてあげてそれはチンパンジーは確かに言語が出来ないんだけど、言語のところで初めて飛躍が起きているわけではなくて。たしかトマセロはね、橋彌さんの訳した本の中だったかな、ちょっと忘れちゃったけどこんな比喻を書いてるんですよ。ときどき、人間だけが言葉をしゃべって想像力があって空想したりする。そんなことはチンパンジーには出来ませんっていう(人がいる)。そりゃそうだろうと。だけど、それはね、人間だけが摩天楼を作ることが出来る、って言ってるように聞こえるってことですよ。そりゃそうだろうと。それよりも人間が一つの場所に定住して素朴であれ住居を作るってこと自体の方が、すでにその段階で特徴があるわけですから。人間だけが摩天楼を作るって言ったって、それは当たり前だけでも人間の特徴をとらえたことにはならないっていうね。概してね、人間と動物の違いを言う時にね、そういう言ってみれば人間だけが摩天楼を作ることが出来る式の問題を提起しちゃう傾向があるような気がするんですよ。だからもっと微妙な連続性でもあるけれど微妙な飛躍はどこにあるのかな(っていう問いを立てるべきです)。まあそれでトマセロは individual intentionalityからshared intentionality的なものへの飛躍っていうその部分で、まあ40万年ぐらい前のホモ・ハイデルベルゲンシスHomo heidelbergensis、ホモ・ハイデルベルゲンシスっていう種が本当にいたかちょっと良くわかりませんが、まあとにかく、ネアンデルタール人よりちょっと手前ぐらいの所でそれが起きた。これはまああんまり根拠ないですけど、推定に過ぎませんが。とにかく最初の一步、人間的な思考にはまだ至ってない人間的な道徳するには至ってないけれども、すでにshared intentionalityがあって二人、二人称の共同関係ってものが成り立つみたいなのところにまず手がかりを置いて、そこから今度集合的なintentionalityの段階とそうすると、まあ文化があったりそう話になってこれるわけです。というステップを..やってて、それはまあ、個々が優れている面白い、つまり基本的な筋として正しいと思うんですよ。ただ、まだその説明されなければいけないMissing linkがある、という感じですよ。その、概して。そうだね、ときどき思うのは、これもわからないですけど、先ほどちょっと菅原さん言いましたけど何か新しい発見があるとね、その度にそれに対応した生得的なモジュールみたいなものがある、みたいな話にしちゃうんですよ。そうするとね、なんていうか人間だけが持っている、あるいはある動物だけが持っているモジュールがものすごく沢山あることになって。なんかね、しかもその説明としてね、なんていうんですか、トートロジカルになっていく。そういう説明がすごく多くなっていく気がして、ちょっとそこに、どうかなって。研究の動向としては思ったりするっていう感じですかね。どうですかね、そんな傾向ありませんかね。橋彌さんの的にはどうですか。

橋彌)

えっと、その先ほど菅原さんも仰ったプレアダプテーションっていう所も含めてなんですけれども、えーっと、そうですね、一個一個モジュールで説明しようとするのは心理学者が取りがちなパターンで。えーっと、ただ、これを今やってる人ってどうなんでしょうね。まあ例えば、その、バロンコーエンみたいにセオリーオブマインドのモジュールがどういう風に成り立ってるのか、みたいな議論はありましたけれども、あまり今そのようなタイプで説明をしようと思ってる人はいない、というかあまりそれはメインストリームではなくなりつつあるのかなと思います。

一方で、あの、ちょうど質問者1さんがチャットの所に入れてくださいます、これもおそらく、middle cingulate cortex⁴⁸のあたりだとやっぱり、ミラーとかミラーシステムみたいなのが変わってくるあの辺りだとは思うんですけども。そういう、モジュールってやっぱり脳の研究から来てるアナロジーで、それを実際に実態がある脳の特定の領野およびネットワークとして、検討するっていうのは意味があると思うんですけども。これを行動屋さんだったり、進化屋さんはたぶんやらないと思いますけれども、やってしまうと、僕ら時々「ボクソロジー」って言い方をするんですけども、モデルって言うけど箱と矢印でできているのはモデルなのか、っていうのをボクソロジーと揶揄したりするんですけども。そこに陥ってしまうっていう、まあ自戒もあって、あまり箱と矢印で説明するのはやめようっていう、のが少なくとも自分の周辺ではある気がします。で、あの、今、議論にあったそのpreadaptationの話をする話をする時に、やっぱり確かに、その例えばそのトマセロにもかけてるのは、トマセロだけじゃなくてみんな分からないんですけども、おそらく、その、人が individualな intentionality ではなく、集団性というか、ウィルネス⁴⁹というようなものであったり、物を獲得するにあたって何らかの生態学的なニッチな変化があったんだろう、っていうことを考える。まさにあの河合雅雄さんが森林がサルを生んだと言うように、じゃあ何が人を産んだのかっていう生態学的な要因っていうことについては、まだオープンクエスチョンな訳ですよ。で、そもそも諏訪さん⁵⁰やホワイト⁵¹のアルデピピテクスラミダスの話からしても、そのサバンナが歩行を生んだってのこれはないもうなさそうだと。既に森林にいる時点から直立二足歩行の特徴は初期人類に見られるし、しかも直立二足歩行可能な骨格でありながら、足で枝を掴むこともできるっていう、人類の祖先種のようなものが出てきて。じゃあ、サバンナに出たからっていうシナリオもやっぱりちょっと使えないだろう。で、そうするとなんだったんだろうっていうところが、ここはまあ、どうしてもというか、ぼかしたとまあというか、になっているというのが今、現状かなというところだと思います。

菅原)

わかりました。で、なんか大澤さんが今後の思考の方向について、ほんのちょっとだけでおっしゃってくださったんで、じゃあ私も明日のジョーじゃないけど、明日につなげることなんか言っといたほうがいいと思うんで。今日ね、(自己紹介の)後半、時間がなくて端折っちゃった残りのパワーポイントで、私は次元ね、ディメンションっていう話を実はしたかったですね。で、それはどういうイメージかという、さっきレヴィナスの時間の話が出てきましたけど、私がさっきね、漫画で説明しようって思ったのは、中学の頃かな、手塚治虫の驚くべき短編、漫画物語をよんで一生それは忘れられないと思うんですけど、結局のところその漫画の登場人物たちは皆、第三者の審級じゃないけど、なにかにね見つめられているっていう被害妄想をある町の人たちがみんな覚えて。で、最後に飲み屋で物知りの青年がね、その自分もノイローゼになっちゃった神父とか精神科医とかを前にしてですね、得々と講釈をするんですよ。その講釈の内容たるや、彼は簡単に、あった直線を取り上げて、「まあ僕らの生きてる世界は2次元ですけど、実際の次元を一つ落としたりしたらこういう直線になっちゃうんだけど」って言う。そして飲み家を出たらですね、そこに渦巻き模様の脂ぎった肉塊が浮かんでるんですね。で、「ギャー」とか言って。それは指だったと。そしてページをめくったというお話なんですよ。あの、実際にですね。空白の部分に「絶対にここに指を

⁴⁸ 前帯状皮質のこと

⁴⁹ weness(そのような言葉はないが恐らく「私たち性」という意味だろう)とも聞き取れる

⁵⁰ 諏訪元(すわ げん、1954年-)は、日本の人類学者である。

⁵¹ T・ホワイト(Tim D. White, 1950-) はアメリカの古人類学である。

当ててページをめくってください」って指令が書いてあって。わたしはアホな中学生として、一生懸命ね、そこに指を当ててページめくったら全然違う記事があったんで、なんだこれは、と思ったんですけど。で、私がなんで最近そういうことを考えてるかと言うと、みんな時間時間って仰るけど、私たちはね、日々生成変化、生成変化って言葉は嫌いだけど、日々変化してるわけだから私の意識作用それ自体が変化ですよ。ということはなんだっけ。だが、それをあのシナプス結合の構築という還元的な実在論に置き換えなくても、意識というのが変化そのものである、という言うことは間違いがないので。ということは私たちは、どんな次元か知らないけど、こういう生命体である限り、時間そのものなんて絶対に知覚できないという、そのことで時間をそのものを絶対に知覚できない限界を帯びた生命体として、例えばブッシュマンの過去語りについて考えるというのは。そこでね、大澤さんと無限にその話をしていなかったんだけど。単調な歴史意識、少なくとも文字社会について、歴史学をやろうなどと思ったら絶対にならない、というのが今私の今後をやらなければいけないこと。ですから、本の副題として、本題は「原野の人生」なんですけど副題として考えてるのは、語りで織るブッシュマンの…、それ(…の部分)を何にするか。一番、直球勝負は「ブッシュマンの現存在」とするのが一番直球勝負なんだけど、でも一般読者は現存在という言葉を知らないかもしれないので、思い切って「語りで織るブッシュマンの現在」という風にしようかなと思ってます。で、そこでいわゆる年代記というのは、完全に遮断して、語りというのを、永遠に存在し続けている現在というものを配置していく、というそういうスタイルで書くかと思ってます。

あ、でもさ、どうしても大澤さんとせっかくあったので、日頃思ってる疑問をちょっと一つ、一つか二つ聞きたいんですけど、いいですか？それはね、どの本で書いてあったのかな。社会学で一番大事なことはね、新しい概念をあみだして、その概念と概念との間の位置関係をクリアにすることだって言うことを書いてらっしゃったと思うんだけど、これ、私はドゥルーズ⁵²とそっくりだな、と、実は。わからん、わからんと言いながら『差異と反復』も読んだんですけど、やっぱりわかんなくて。で、だんだんイライラしてきたんだけど、私がなんのまぐれか京大理学部に入って、解析概論とかの積分論とか一生懸命読んだんですけど、途中でやっぱ分かんないんだよね。数学の分からなさっちゃうのは諦めがつくとしても、普通の日本語のね、しかも素晴らしい日本語の翻訳で書かれてることがわからない、っちゃうのはイラつくけど、で大澤さんなんかそういうの数学できるし、そういう私みたいな悩みはあんまり持ってないと思うんだけど。だから唯一聞きたいのはね。その編み出された概念、例えばドゥルーズが編み出した概念というのは、でもそれは時としてもものすごく恣意的なものに思えることもありますよね。あるいは概念それ自体はふーんと唸っても、そのなんか変なね、曖昧な舞台で概念と概念が丁々発止と戦ったりするじゃない？で、一方の概念が他方の概念を打ち破って新たな高みに上昇したりするよね。でもそんな運動って、どこで展開してるのっちゃうのか。私には分からないというか、まさかドゥルーズの頭の中で展開してるなんていい加減な事は言わないだろうな、と思いつながらね。まずその概念が恣意的なものか、長い時間を付き添うに値するものなのかというその判別の嗅覚が一つ。そしてそれを嗅ぎあてたとして、その概念同士のせめぎ合いというのが展開する舞台はどこか、ということ。この二点を教えて。あんちょこ、あんちょこの俗みたいで…

大澤)

⁵² G・ドゥルーズ(Gilles Deleuze, 1925- 1995)は、フランスの哲学者である。

そんなん答えるのに適切かどうかわかりませんが、僕だってわからないなってイライラすることよくありますし、ハトになってね、あの頃全然分かってなかったなみたいに思うってことがあります。でもまあ、やっぱり今僕らの仕事にとって、やっぱり適切な概念を見つけ出すってことは、見つけ出すっていうか、つまり、なんていうかな、ちょっとベタな言い方をすればね、どうも今までのそういう言い方だけじゃピンとこないなってみたいなことあったりするわけですよ。それに対してある概念をうまく見つけ出した時に、すごく視野が広がりますよね。だから今日だって、joint intentionalityだとかcollective intentionalityだとかっていう言い方を、作り出してる訳ですよ。そうするとバラバラだったり、今までちょっと特別だなんて思ってたものがはっきりと、クリアな像として見えてくるみたいなことがあります。だから、やっぱり、そのためにはね、概念そのものを作れば発見できるわけじゃなくって、なんていうか、普段の経験あるいは学問的な観察や実験でもそうかもしれませんが、そこで既に何を直観できてるかだと思っんですよね。

で、その時にまあ、今までの言い方で記述したときに、もう一つだなんて思ったときに、こういう概念で捉えたらどうだみたいなことですよ。それに成功する、あるいはそういうものを僕らは学んだ時に「えっー」と思うわけです。思うにね、哲学ってさ、そういうものいっぱいあるわけですけど、理解するためにはね、いったい何に対してチャレンジしようとしてるのか、ということを理解することが重要なんですよね。そこだけをなんでこんなことをわざわざ言うんだらうって思ったりするわけですけど。

ドゥルーズなんてのはさ、基本はプラトニズムをどういう風に克服するかみたいなことにポイントがあるわけで、だからプラトンの前提ってどんなことなのかみたいなことを考えていた時に、わざわざこういう風に言う理由がピンとくるとかっていう感じですよ。あの人はまあ、あの人はっていうのはあれですけど。その、そういう概念を作り出すのは、天才的なところがありますよね。一見どうってことない、つまり、普通の言葉だったりするわけ、例えば、彼は、翻訳者がカタカナでシーニュとかっていうけど、まあ、サインですよ。記号ですよ。普通の言葉です。でも、その記号って言葉とルプルザンタシオン、representationっていうのを区別して使って。で、そのシーニュ＝記号って言葉に特別な意味合いを与えてるんですね。

例えば『プルーストとシーニュ』っていって、「失われた時を求めて」をシーニュって概念で読み解くと、すごく、なんでこんな話が書いてあったのかみたいなことがすごく見えてくるっていうか。まあそういう、その概念が何を退けようとしているのかとか、何と戦っているのかみたいなこと見つけ出すことが出来るとわりにはいいかなと思っんですよね。

まあ、そろそろ休み時間入れた方がいいんじゃない？

運営)

わかりました。それでは、今から一旦休憩したいと思います。この間に質問とかを少し皆さんで整理されて、これだという質問を考えておいていただけると、幸いです。まずは一旦休憩にしたいと思います。今から20分、休憩にしたいと思います。なので16時半から後半の部を再開したいと思います。それではお二人ともありがとうございました。

以下、質疑応答

運営)

皆さんお待ちせいたしました。これからは質疑応答の時間に移らせていただきたいと思います。一応です、終了時間は明確にはしていないのですが、目安としては18時頃までに

しようかなと現段階では考えております。精神的にも体力的にもそこが限界のような気がしますので。それでは司会を橋彌先生に完全に移してまいりたいと思います。

橋彌)

よろしく申し上げます。九州大学の橋彌です。と言っても司会としてまず何をできるだろうと言いますと、まずチャットに質問をあげていただいている方がすでにいらっしゃる、私ももちろんいろいろ伺いたいところなんですけど、先に今、特にですね、他者、最初は大澤さんからご提示いただきました他者のわからなさというところに直結する話なんですけれども、最初に頂いている質問者1さんから。これは私がチャットをご紹介するというよりも、これを見せていただいた上で、直接ご質問というかコメントを頂いてご議論いただければと思います。

質問者1)

チャットはどうやったら見せることができるんですか？

橋彌)

チャットは共有できます。皆さん見れると思います。

質問者1)

そうですね。私は今日初めてお話聞く大澤さんと、別の研究会でいろいろお話は聞いているんですけども、まとまった話を聞かせていただける菅原さんの話を聞いてるだけにしようと思ったんですけども、やっぱりむくむくと疑問が湧き上がってきてしまってきたものですから、まず大澤さんのコミュニケーションの中の論文にしろ、コミュニケーションの不可能性という前提から出発されて、それが実際可能なのはどうしてなのかという問題の立て方をされてますし、今日も根源的翻訳にしてもjoint-intentionalityにしても、理論的には不可能であるというところから出発されてるんですけど、理論的に不可能だって言っても、実際に実現してるんだったら、その理論の方がおかしいんじゃないかというふうに私なんかは考えてしまうわけですね。これは哲学の方の傾向だと思うんですけど、こういう認識の問題をやる時に、それぞれの答えが独立した認識者として、一人で自前で何でもやろうとする。で、隣に人がいて、その隣にいる人の世界と自分は、自分には理解できないし、隣の人が自分の世界理解できるわけがないというふうに、それぞれが一人で自前で答えを出してしまう。けれども実際にはですね、そういうことはないわけで。二つの答えが全く独立にはそういう不可能性の状態に陥ることはあるかもしれないですけど、実際には相互行為でチンパンジーですらですね、先ほどの話で何回もありましたように、せがみ行為をしますし、ある事柄に対して自分が欲しいものを実験者にとってもらう時に、それに注意を向けるっていうこともあるっていうような形で、ジョイントというかshared intentionalityというか、関心の共有ということ打ち立てることは簡単にできてしまうわけですよ。人間同士の間でもほらほらほらほらっていうふうにやっぱり、ちよつとちよつとちよつとっていうふうに引っ張ったりすることによって、実際に関心を特定の対象に向けることができたりするわけです。こういうわけで、こういう問題を考える時に、行為論的なのか実践論的な観点が抜け落ちてしまうとよくおかしなことになってしまうわけで。僕はウィリアム・ジェームズの『プラグマティズム』がすごく好きなんですけど、ジェームズはこんなこと言ってるんですけど、独我論に対する一瞬の解決なんですけど、「俺の世界のろうそくの火を消したら、お前の世界のろうそくの火が消えるだろう」これでおしまいなんです。独我論的な世界っていうんだったら、

じゃあこれから俺の世界の中でお前を殺しに行くから、そうした場合お前の世界で何が起こるか見てごらんっていうふうなことになるって、実際には実践とか行為とかを通じて世界っていうのは繋がりがあってしまうわけで。そうすると、議論的には不可能だが、実際には起こってるっていうのはものすごく疑似問題のような気がしてしまうということです。

それで、動物と人間との差異っていうのを過剰にするっていうのは私もおかしいと思っていて、連続的なあれで見ていかないといけないっていうことで、菅原先生と今一緒に別の研究会では「文化人類学の自然化」というとんでもないプロジェクトの研究会をやってるんですけど。これは動物と人間との境界線をもっと微分的に見ていくっていうことで、たとえばチンパンジーは模倣させようと思っても、なかなか模倣することはするかもしれないけど、めっちゃめっちゃ時間かかるし困難だ。ところが人間は乳幼児でも模倣を簡単にしちゃう。つまり誰から教えられたわけでもないしね。そういう場合はモジュールとは言わないですけども、なんか他人の振る舞いを見て、それをリバースエンジニアリングして、自分はどういうふうに筋肉を動かせばいいのかっていうことまで解析してしまう仕組みが脳の中に何らかの形であると考えられないわけで、そうするとそれは進化の産物だというふうにみないといけないわけですね。で、指差しにしても人間の子供は指差しの行動の意味をすぐに理解できるけれど、うちは猫によくやってるんですけど、指差してほらほらほら見てごらんってやると指を舐めに来る。おそらく猫にはそういうような形での指差しとか関心を何かによって向けられるというそういうふうなことを処理する仕組みが脳の中にならないうちの猫は、だからそういうふうな意味では、ある程度、生得的っていうのは人文系の研究者っていうのはすごく嫌いなんだけど、そういうふうな生得的なものと考えられないもの、いっぱいあるわけですね。ただそれをどれもこれも生得的ってやっちゃうとやっぱり問題があると思うんですけど。

それから、人類学も結構最近はいろいろと他の領域の本を読まないといけなくて大変になってきたんですけども。例えば他人の痛みは自分には絶対感じられない、わからないっていう議論はずっとあったわけなんですけども、これも最近の脳科学の研究で、誰かの手に針を刺してるような映像を見せると、それを見てる人が頭の中で、自分の手に針が刺さった時に感じる部分と同じところが活性化するとかっていうのがあって、これは我々の日常的な経験でも、部屋に入ってくる時に背の高い人が鴨居で頭をカチンとぶつけると、それを見てた僕が「痛っ」とか言ってしまうわけですね。これは痛みを感じたわけではないんですけども、「痛っ」という声を発するに足るようなそういうふうなものが脳の中で炸裂するということになってるわけですね。そういうふうなことを考えると、独我論というのは、それをそもそも成立させないような仕組みが脳の中に部分的にある、それだから人間は共同作業とかをできるわけで。言語もコミュニケーションっていうとまるで誰かが心の中にある何かを、他の人には知れない、それを他の人にどうやって伝えることができるのか、それで不可能性というがおそらく出てくると思うんですけど、もともと言語っていうのが進化してくる過程ではおそらく共同作業、ちょっとそれ取ってよみたいな話とか、同じ目的や物を見てあそこあそことか、そういうふうな形ですね、共同作業をうまくいくためにまず共同のjoint intentionalityみたいなものを成立させるのと、相即して進化してきたメカニズムだと思うんで、独我論的なものを乗り越える仕組みっていうのが自身が人間の脳の中には備わっちゃってる、それを封印する方がむしろ難しいだけで。例えばジェノサイドとかそういうふうな場面では、どうしてもそういうものが発動してしまうんで、共感回路みたいなものが、それを封印するためのあれやこれやを工夫することによって、暴力の犠牲者に対する共感が起こらないように、

バロン＝コーエン⁵³の言い方だと共感回路っていうのをシャットダウンさせるみたいなの。そうするとこの哲学的な問いの立て方っていうのはもしかしたらシュドークエストション(聞き取り不可)というか、擬似問題を立てて勝手に悩んじゃってるだけじゃないのかなっていう気がしてしまうんですけども、その辺をちょっと大澤先生にお聞きしたいなと思っておりました。

大澤)

質問ありがとうございました。非常に重要なポイントだったと思います。ただですね、実際に独我論になって誰も伝わらないじゃないかって言ってるわけじゃもちろんないわけですよ。明らかに実際そうになってないわけですよ。それも事実としてわかってるわけです。なんて言えればいいですかね、哲学っていうのは一つはあれだと思っただけですよ、いかに極めて当たり前のように思っていることに驚かかっていう、それが驚きであるかっていうことを発見することなんですよ。それでこの場合だとですね、もちろんおっしゃる通りね、ある理論で考えれば不可能なことが起きてるわけですから、理論自体が組み替わらなきゃいけないわけですよ、どっかでね。どこで組み替えなきゃいけないかっていうことを考えなきゃいけないわけですよ。この場合だと、我々が使っている論理の前提、あるいは概念の持っている前提、そういうものを追求していった場合に…。例えばトマセロの議論の中で一番重要なのはパースペクティブっていう概念なんですよ。パースペクティブっていうのは、ある観点から見て一つの宇宙が広がっているっていう意味です。パースペクティブっていうのが接続して、ジョイントしてっていうふうについてどんどん話を展開していつちゃうんですよ、でもそうすると今日僕が言ったような謎が残ってしまうわけです。だからこれはね、何と言いますか、ある概念の中で暗黙のうちに前提になっていることを掘り起こしてって考えてみると、例えばこの場合だと、論理的には本来不可能なことが起きていることになってしまうじゃないかと、そう考えた場合に、今まで我々が前提にしている概念を含めて理論的に組み替えなきゃいけなくなるわけです。だからどの部分に理論的な落とし穴があるかっていうことを見るためには、概して我々が、つまり人間について考えているわけだから、逆に我々が簡単にできることについてはかえって謎にならないんですよ。

例えば別の例を出すと、よく人工知能の問題との関係で出てくるフレーム問題⁵⁴ですよ。フレーム問題だって我々がもちろん引っかかったりいろいろするけれども、わりかし臨機応変にやっています。相当、少なくとも人工知能にこのレベルのことをやらせるのは難しいですよ。そうすると僕らからすれば、フレーム問題を解決というかそこそこ乗り越えながらやってるわけです。でも人工知能にそれをやらせることはなかなかできない。っていうことは僕らが持ってる認知のメカニズムっていうものを言わばアルゴリズムのような形で外化して機械装置に実現した場合には、フレーム問題はことごとく解決できないロボットになるわけです。つまり僕らの知能っていうものについての自己理解と実際に僕らがやってることの間に何かギャップがあるんですよ。これなんかもね、フレーム問題のは人工知能っていうのが現実化してきたからだと思います。ある程度ね。それまではあまりにも簡単なことなので気付いてはいなかったです。でもフレーム問題をかなり臨機応変に解決できることは、僕らにとって生きてる上ではね、特に困るわけじゃないんですけど、助かるわけで

⁵³ サイモン・バロン＝コーエン(Simon Baron-Cohen, 1958年7月23日 -)は、イギリスの発達心理学者である。

⁵⁴ ダニエル・デネットが指摘した、人工知能をプログラムするにあたって理論上生じる問題のこと

すけど、しかしここに人間の認知活動の非常に不思議があります。それが解ければ我々が何であるかってこともわかってくるわけです。

で、独我論についてもそうですね、僕のスタンスもね、どっちかといえばそれを否定したいわけです。否定したいためにわざわざギリギリまで追い詰めてるわけですね。だから実際に独我論になってるじゃないかって言ってるわけじゃないんです。そうではないんです、明らかに。しかしある理論的な装置あるいはそこにある論理的な前提を突き詰めていったら、独我論的な主張に対してどうやってそれを論破するのか、それを論破するっていうことができた時に、独我論を本当に乗り越えたことになるわけです。だから、あの、なんていうかな、例えばこれはかなりクリエイティブな意味もあると思いますね。独我論はちょっと置くとしても、例えば今日議論の中で少し話題にしましたけれども、クリプキって人が、規則に従うことってどういうことかみたいな、どうしても脳の中にそのアルゴリズムを実現する装置があって足し算ができるようになったり、日本語を喋れるようになったり、いろんな規則に従うことができる、そういうモデルで考えた場合、規則っていう現象は説明できないっていうのがクリプキの思考実験ですね。すごく極端な例を出してくるわけです。でもこれは非常に説得力があります。そうすると僕らは規則っていう現象を考える時に、今までなんて言うんだろう、見当はずれなところを探していたっていう感じになりますね。全く違った理論で考えなきゃいけないっていうことに気が付く。

だから哲学的な疑問っていうのは、なんて言うんですかね、僕ちょっとこんなふうにかんがえることがあるんですよ。認識って二つの方向に深まっていかなくちゃいけないくて、我々の中にコモンセンスってあるんですよ。コモンセンスってものの上にどんどんどんどんさらに建物を摩天楼のように高くしていくっていう方向性の知識、それも必要です。それと同時にね、この常識っていう土台を掘り崩すとか掘り返すとか、実はその土台が堅牢なものでなかったことを発見していく、常識の下に潜っていくっていうね、そういう作業の両面が必要だと思うんです。僕らが完全に安全な土台だと思っていた常識が、僕らが普通に話をして安全に何となく分かり合えてしまう、特にそんなことで悩んでたら生きてられません。だけれども、それがいかに驚くべき現象なのかっていうことをあえて思考実験的にはっきりさせる。そうすると僕らの、なんて言いますかね。だから理論が間違っているに違いないっていうのは僕も賛成なんです。ただどこで間違っているのか、それを発見するためにあえてそういうことをやるっていう感じですね。

あとね、脳の研究の場合なんですけど、脳の研究は重要だと思うんです。僕らもいろいろそういう研究、発見ですごく啓発されるというかなるほど思ったりすることもあります。特に脳の研究で重要だなど思ったりするのが、例えば一見同じことのように見えていても、全然違う脳の部位を使ったりする、そうすると実はかなり違った由来であったり、進化的な起源もあったり、同じものではなかったことに気が付くっていうことがありますよね。例えば、道徳的判断についての二つのメカニズム、直感的にいく場合といろいろあれこれ考えてどっちがいいかみたいに考える時は全然違う、どちらに対しても道徳的に善なものに反応してるみたいに思うけれど、かなり違った神経的な議論が(されていて、)そういうことがわかる。だから非常に勉強になるわけですけど、同時に脳に対応させるだけで先ほど橋彌さんがおっしゃったけど、ボクシズムっていうんですかね、謎を脳の間因果関係に置き換えてるだけなんだけれども、置き換えた途端にわかった気分になるわけです。でも本当はわかってないんですよ。それは別にこちらの因果関係で置き換えてるだけですから、対応関係をはっきりさせるだけだから。だからなぜ悲しいんだろう、いや脳が悲しんでるっていうって言ったら少しわかった気分だけれど、考えても同じ謎は一つも解けてない。よくマルクスの言い方で謎を言い換えてるだけだっていうのがありますが、そういうふうになり得る可

能性もあるので、脳の研究は非常に重要なんだけど、そこが答えではないですね。そこからさらに問われるべき、あるいは問うべきことの焦点をはっきりさせてくれることが脳の研究のいいところだと思います。

橋彌)

質問者1さんいかがでしょうか？

質問者1)

非常によくわかるお答えで納得したんですけども、ただ問題では独我論にしてもフレーム問題にしても、非常に0/1でやってるわけですね。フレーム問題は原理的には解決できないはずなのに僕らが解決してるっていうんですけど、おそらく人間も解決してない。適当に博打を打って、それがたまたまよく当たってるっていうだけで、人間は長い何万年、何百万年の中でいっぱい博打を打って、下手打った博打では、博打ばかりやってる人は淘汰されていってるわけで、そこそこ非常に鋭いギャンブラーになってるから、だからそれなりに当たる賭けをやってそこそこ上手くいってるっていうことだろうと思います。例えば確率だって主観的確率で情報が一つ付け加えるたび、その確率を少しずつ変えていくっていう〇〇(聞き取り不可)確率みたいなやつでやって、そんな何の根拠もないじゃないかって言われると、確かに何の根拠もないんだけど、それでやっててそこそこうまくいってる。ところが哲学的な問題を立てる時には、100%正解じゃなかったら駄目だってね、何の根拠があってそれが真実だと言えるのかっていうふうにやっちゃうと、そうなるフレーム問題絶対解決できないし、また考慮してない要因があるじゃないかってなってしまうですね。100%確実だということがわかってからそれをやるんですけどいうことだと、おそらく人間には何もできなくなってしまうだろうと思います。大体なんとなくうまくいくんじゃないかみたいところで、根拠もないのにやっちゃって、それなりにうまくいってる。

大澤)

哲学者はもちろんフレーム問題を人間だって解決してないと思ってるわけです。だからそれを明らかにするためにわざと完璧な答えじゃない、えーっと何ていうんですかね、つまりそれも一つの思考実験ですよ。だからフレーム問題がもちろん人間だって、つまりこれはある意味原理的にその厳しい解決を求めれば、原理的に解決できない問題です、これこそ。だから原理的に解決できない問題ですから、人間だって言わば解決してるわけじゃない、そこそこ回避してると言いますか、実際結構フレーム問題(に遭遇して、)失敗したなあって思うことって人生の中で何度かありますよね。ただ解決してない、そこそこやってるっていう現象自体すらよくわからないわけです。それが何であるかっていうことが。そこそこ上手くやればいいじゃん、そこそこってどうなのっていう。たくさんシナリオを持ってることなのか、でもシナリオ多すぎるとフレーム問題もう一回ぶつかりますからね。だから何と言いますか、よくわからないって感じですかね。

質問者1)

そこらへん人類学の助かるところは、ずっと実際のフィールドでね、土地の人たちがそこそこの感じでやって失敗したりですね、見当はずれなことをやってしまったり、ところがそれが思いがけない上手くいってしまったりとかっていうそういう出来事の流れっていうのは全然混沌としてるんですけど、それをまあふわふわふわふわというか、喧々諤々と議論しながらみんな乗り越えていってるというね。だから人間の世界っていうのはそういうふうの前

もって何かする前に答えが出ていて、その答えに従って何かをやっているというよりも、実際に失敗したりやったりしながら微調整を繰り返しながら、現実に対してある仮説で働きかけて、それでうまくいかなかったらもうしれっと仮説の方をちょこちょこ修正したり、そういう現場をずっと見てそれを記述してるわけですよ。「お前昨日言ったことと違うやないか」みたいなことをね、つつこみを入れながらですね。そこらへんの実践的な場面の実践的な場面で人間が実際にどういうふうに振る舞っているのかっていうのを考慮に入れると、多くの問題は哲学者が思っているほど難問、わざわざそんな問題を立てる必要すらなかったんじゃないのかっていう感じがしてきたりもしますね。

橋彌)

よろしいですか？今のそのおっしゃったそこそ腕のいいギャンブラーがコミュニケーションをしてるってまさにその通りだと思うんですけど、おそらく心理学者が例えば独我論の話を見るとすると、例えばindividual intentionalityを備えたロボットなり個体をたとえるわけですよ。それがどうも主観的な経験を介してみると、どうも他者の状況っていうのを直感的に理解しながら進んでいるらしいと。しかしそこにはラインで接続されてもないし、Wi-Fiも飛んでないのに、何でこのPCとこのPCは連動して動いているのかというのが多分大きな問題で、にもかかわらず観察しているとこのロボットとこのロボットはちゃんとうまいことコラボレーションしたりコーディネーションしながらなんかやってる。それが一体どういうことなんだろうっていう今大澤さんがおっしゃった独我論と実際に起こってることのギャップっていうのがまさにコミュニケーションの大きな問題で、コミュニケーションの中でこの本(『コミュニケーション』大澤真幸著)の帯にもありますけど、まさにそんなことがなんで可能なんだろうっていう問題設定自体はなんか僕はどちらかと言うと、答えをそうやって見ているとやっぱり謎としてはかなり大きいなあという気がします。そこは対談の中で菅原さんがとととととおっしゃった、何か言って誤解があってもそこに対する問い直しがあつてととととととそのままなんかインタラクションが進んで答えに至ってしまうっていう、でもまさにそのプロセスというのも含めて独我論を見なきゃいけないなあというのは確かに今議論の中で伺っていたとおりでと思いました。私ギャンブルとしてのコミュニケーションというか、コミュニケーションがギャンブル的な要素を持っていると思うんですけど、先ほど菅原さんがそのとととととおっしゃったあのオノマトペがすごいカッコいいなあと思ったんですけども、その辺りは菅原さんいかがでしょうか。コミュニケーションの不可能性については、また再びという感じになりますけども。

菅原)

振っていただいてありがとうございます。重要なことをいくつか言ってないと思うんです。それはなんだろうな、私の変なこだわりっていうかなあ。私が結構大澤さんと通じる感じがよくするのは、とにかく原理的に考えないとあかんぜよっていうね。それって私大学院の時に自分の悪友たちから、あえて固有名は出ませんが大澤さんも知っている人ですけど、原理的に考えるっていう鉄則をずっと教わってきて、私がフッサール⁵⁵をある種尊敬しているのは、厳密な学としての哲学をしなきゃいかんのやっていうね、そういうストイックな姿勢ですよ。それをなんとか見習おうとすると、結構不便になるんですね。それはまさに自分を自縄自縛に追いやるということなんですけど。

⁵⁵ エドムント・グスタフ・アルブレヒト・フッサール(Edmund Gustav Albrecht Husserl, 1859年4月8日 - 1938年4月27日)は、オーストリアの哲学者、数学者である。

その不便さをいくつか挙げていくとですね、まず私は、多分私の書いたものを読んでお気づきになる人はなると思うんだけど、心って言葉は使わないんですね。私の辞書には心という言葉はないって感じで。それはやっぱりメルロ＝ポンティの強い影響で、それはあれ誰だっけ、野家啓一⁵⁶さんのおっしゃっていることなんだけど、メルロ＝ポンティが動物とかあるいは人間的な他者について語る語り口はですね、彼自身がどっかで言明してるように、行動の背後に心があるいは意識があるなどと確信できるような現象は一つもないという話なんですね。そこでメルロ＝ポンティは行動が私たちに描いてくれてるものは、種の特異的な環境だけであると。なんや今西錦司と同じやんかというのは私の大発見だったんですね。それは野家啓一の言い方を借りると、ギリギリまでの行動主義、ギルバード・ライル⁵⁷もそうですね。でもこのギリギリまでの行動主義っていうのは全然学習心理学とかオペラント条件付けとかスキナーボックスとかとは何ら関係のない行動主義ですね。まあ機械の中の幽霊を放逐せよという悪魔祓いの意味なんですけど。なのでまず心という言葉は使わないと。

だけど他者ということを私は本気で疑ったことは一度としてなくて、それはメルロ流に言うとか、他者もねホモ・サピエンスという種に所与として与えられた種特異的な環境だと。私たちが他者を心ある者のように遇して日々交通してるのは、そういう独特な環境世界でしかホモ・サピエンスは生きられないのだというそういう話の持って行き方ですね。だからそういう延長線上でどんどんやっていくと、どんどん寂しい話になっていく、寂しい話というのは私の好きな敬愛している大森荘蔵の言葉で言うと、『無脳論のすすめ』とかね私正直すごく腑に落ちるんですね。つまり脳とか神経系ということを私の思考に編入しなくても、私の専門は社会人類学なので、社会人類学的な問題を解いていくことは十分に可能であるという話になります。

さっきちらっと出てきた心の理論、モジュール説に関して、大澤さんと関わりの深いatプラスに書きちゃったんで大澤さんはご存知だと思うんですけど、私は正直冷淡な立場なんですね。それはね心の理論があるかないかっていうことをね、自閉症児に心の理論があるののないのっていうことをいくら詮索しても私が彼と関わってる環境世界は何ら豊かにならないんですね。むしろ心の理論あるないっていう詮索する前に彼と散歩でもしてた方がよっぽどマシであると。何よりも重大なことは、さっきも言いましたけど、自閉症者、自閉症児という実存は平和に暮らしてれば天使なんですよ。本当に天使の祝福と暮らしてるんだって思うくらい素晴らしい時間が80%くらい続くのかな。でも、一方で無人島で暮らしたらどんなに楽かっていうふうに思うのは、彼らの凄まじい問題行動っていうのがあるからですね。典型的には自傷行為と癩癪ですね。うちのゆっくんの場合は非常に幸いなことに、物には当たり散らすけれど、人には絶対危害を加えないですね。それが救いです。だけど人に危害を加える自閉症者だっているわけですよ。そうすると私たちにとっての最大の謎は一体何が原因で癩癪を起こすんだらう、何が原因でパニックになるんだらう、まさにプラグマティックな問いなわけだけど、それがわかる時もあればわからない時もある。最近ではわからないことが圧倒的に多いので、結構親は消耗してるんですけど。わかることのわかり方っていうのは私の妻がずっと実践してたことなんですけど、この子は聴覚過敏なんで、嫌な音が聞こえたから癩癪を起こすんじゃないかっていうそういう手がかりですね。耳をすましてみるとどこかでパンパンパンって布団を叩いてる音がしたとかね。そういう小さな発見を積み重ねるということはある種のパニックを防ぐためには実に有効なことなんですよ。これはね、ウイ

⁵⁶ 野家 啓一(のえ けいいち、1949年2月21日 -)は、日本の哲学者である。

⁵⁷ ギルバート・ライル(Gilbert Ryle, 1900年8月19日 - 1976年10月6日)は、イギリスの哲学者である。

ングという自分の息子さんがやはり自閉症でありイギリスの非常に高明な自閉症専門の発達心理学者なのかな、その人の名言なんです、目の見えない人と暮らしてね、その人が目が見えないってことを知らずにね、その人と暮らすってということがどれだけ危険なことかっていう。だから自閉症は一方でMind-blindnessとも言います、バロン＝コーエンの言葉ですかね。つまり彼はこういう形で独特の知覚世界、認知世界を生きているんだということをわからずにその人と暮らしていくことはとても危険だと。それこそ大怪我を負わせてしまうようなことになりかねないと。だからそういう意味で私の自閉症に関する関心が徹頭徹尾プラグマティックだというのは、心の理論があるかないかという問いはですね、この人を幸せにできるかどうかということにいう問いに対してはおよそレバンスを持たないというそういう見切りの付け方があるというのが今まではっきり言わなかったことです。

他者に関しては、もう一人私が大好きなこれも大森莊蔵の言葉なんです、フッサールはなんとかその間接的な手がかりから他者を構成しようと努力したんですね。ただ私これも自然化プログラムの研究会の同僚である高田明⁵⁸さんにですね教えられて、フッサールはその後『間主観性の現象学』って文庫本で三巻分の訳語が出てるんですよって言われて、冷や汗をかいて買って実はまだ読んでないんですが、間主観性の現象学を全部読まないですね、フッサールに対して正当な評価はできないと思うんですけど、少なくともそれより前の段階で大森莊蔵が投げつけた言葉は、他者っていうのはね構成するものじゃなくて、あっちからぶつかってくるもんだと。そういう言い方ですね。私はこの他者はぶつかってくるというのはまさに実感として正しいなと思います。もういっぺんいですか。今まで言わなかったことなんですけど、この認知科学的な思考性を持った霊長類学というのを私は随分昔の世界的に脚光を浴びたのはCheney and Seyfarth⁵⁹というあれ夫婦だったと思いますけど、二人の共著である“*How monkeys see the world*”、猿はいかに世界を見るかというね、これが一時代を画した金字塔だと思うんですが、それがね完全な表象主義なんですね。つまり感情とか情動とかから独立に切り離されて表象を表象として操作する能力、これが霊長類においてある時期に進化したと。これが自然選択にとって重大な利益をもたらしたというそういう例であります、このベルベットモンキーがヒョウ、猛禽類、ニシキヘビ、この三種の全然異なった行動を取る捕食者に対して、別々の音声を発する、このことばかりがクローズアップされるんですね。大体引用を見てもその話だけなんですよ。だけど、おそらくみんなねその厚い本を最後まで読んでないんじゃないかと疑うんですが、本人たちがね実にしづしづという感じで最後の方にいうのはね、そのベルベットモンキーの幼児がね何をするかっていうとね、樹上から大きな葉っぱがひらひらと落ちてきたら、ワシ用警声を発するんですね。研究者が放置したゴムホースが草むらにあたりすると、そのゴムホースを見た途端に蛇用警声を発するし、大きなリクガメがのそのそ歩いてくるのを見ると、ヒョウ用警声を発すると。実はその表象、音声にエンコードされた対象、捕食者に対する警声を聞き分ける能力は、彼らの周到な研究によれば明らかに聞き分け能力は成長とともに学習によってどんどん精密化、正確になっていくんだけど、実はその対象に対して何を発するかというこの傾向はどうも生得的にプログラムされているようだ。だからここで私たち文化人類学者がいつも避けたく思っている生得性という話がこういう局面で顔を表すと。私がこのCheney and Seyfarthの本がはらんでいる非常に大きな私たち全体に突きつける問題というのはやっぱり自然科学のモノグラフであっても理論負荷性から逃れられないということですね。つまり表象が情動から切り離されて進化するんだという、しかも社会

⁵⁸ 高田明(たかだあきら、1971年-)は、日本の人類学者である。

⁵⁹ ドロシー・チーニー(Dorothy Cheney)とロバート・セイファース(Robert Seyfarth)は霊長類学者である。

生物学、行動生態学と結びつけてその自然選択上の有利さを論じるというこのパラダイムにとって都合な事実は、モノグラフの一番最後の方にこっそりと押しやられるというね。それでも書かないよりはずっとフェアですけどね。そういったことを今の議論を聞いてて思いました。以上です。

橋彌)

Cheney and Seyfarthに関してはそうですね。その後の研究でどうも興奮のレベルというか、潜在的な捕食者の危険性と興奮レベルと結びついてるんじゃないかという議論も結構ありましたよね。つまりまさに表象と情動というのが分かれてるんじゃないかと、情動の程度なんじゃないのっていう話も、まあおっしゃった通りで表象っていう形でそれを説明しようとしたのがCheney and Seyfarthの非常に面白いところで、一方で先ほど質問者1さんがおっしゃった8割方合っていればそのまさに落ちてきた葉っぱを鷹と間違った方が、実際に鷹が来た時に葉っぱと間違ふよりよっぽど適応的なわけですよね。8割方合っているというのはまさにその進化の中で選択される特性で、100%シニフィアンとシニフィエが対応しているっていうことを自然選択は求めていないっていうところも、まあ擬人的な言い方ですけども、そういうところもポイントかなあという気もしました。

橋彌)

では、他に幾つか質問が来ていますのでそちらの方に行きたいと思います。
ご自分で(ご発言を)お願いできますでしょうか。よろしくお願いします。

質問者2)

とても素朴な疑問だったんですが、人が教えたり学んだりすることは様々な生きていくための方法を学ぶように、学ばないといけない、えーっと、はじめからその持っているものもあるけど、学んでいかないといけないっていう部分もあって生きる方法を獲得するっていう必要があるんじゃないかなと思うんですけども、生きていく方法を獲得していくことについて動物と人とはどういう風に違いがあるのかなということ。で、その生きていく手段を得ることを通してコミュニケーションが生まれるのではないかという風に考えるところがあるんですけども、皆さんのお立場から言うといかがでしょうか。

菅原)

私の方から最初に言いますか？

橋彌)

はい、お願いします。

菅原)

それは全くその通りです、としか言いようがないと思うんですが、とにかく生きることが最優先課題ですから、ありとあらゆる認知的なメカニズムも行動様式もこのことなしにはなり立たないと思うんですが、もう少し狩猟採集民研究とかのを補足してきめ細かにいみると、技術というのは一挙に獲得できるものじゃないですよね。この間あの、浜本さんと一緒にいる自然科学研究会でも出た話題なんですけど、まあ狩猟採集民は、結構、観て覚えるってことをよく言うんです。あの研究会終わってから、あ、そういえばと思ったのはですね、私があこの静岡県水窪町でやってきた西浦田楽っていう民俗芸能ですね。それはまさ

に、基本は観て覚えることだっていう風に言いますね。あの「観ておぼわる」といいます。だけど、その舞の技芸を覚えるプロセスっていうのは、いくつもの異なった方法論が折り重なっているんですね。だから観て覚えるって一生懸命言うんですけど、でも練習の現場を見ていると手とり足とり指導ってあるんですね。で、私がこれを手とり足とりという風に記述して、それが本になったのを送ったりしたら、それが流行り言葉になってですね。「手とり足とりやってるな」とかね、実際の舞手が言うんですが。狩猟採集民でも似たようなもので、観て覚えるっていう基本と、どっかあるところでは手とり足とりということが折り重なって、というのが具体的なイメージだと思う。

ただ、困ったことに私はブッシュマンの中ですね。手とり足とりというのを観たことがないですね。観たことがないので、自分でこう言いながらほんまかいなと思うんですが。ただ、彼らが少年から徐々に青年になっていくときに、非常に精密な技術というのは、跳ね罾なんですね。その跳ね罾というのを、非常に簡単な獲物から複雑な、複雑とかでっかい獲物までライフステージに沿った発達というのがはっきりわかります。子どもはね、まず小さいキイロマンガースというね、マンガースの仲間。これはいつも穴掘って暮らしてますから、その巣穴に小さい罾を仕掛けると。これが、彼らのライフヒストリーの語りを聞いても「おれは幼い頃、これを罾で捕らえていた」という、その話が必ず出てくるぐらい、とにかく、少年は罾の最初にキイロマンガースをとる、という形で徐々に罾の技量を上げていくというかな。そういう当たり前のことですが、はっきりしている。プロセスが見える。

それに比べるとあの、猛禽類はね、さっき大澤さんは出してくださった例の猛禽類は、これはワイルドライフとかね、ダーウィンが来たとかでもしょっちゅう見ますけど、本当に母鳥が教えてるとしか思えませんよね。でも霊長類では意外と「ほらこれ食べられるんだよ」とかいう、これみよがしに食べさせる、食べ物を教えてるっていう感じは観察可能な事実としてはあんまりないんじゃないですかね。まあ、一つの重要な例外が、例のギニアのボツソウの森のチンパンジーが、硬いやシの実を、アブラヤシだっけ、アブラヤシの実を石でたたき割る。あれはじーっと子どもが、しげしげと観察してる。で多分あれで徐々に覚えていくんだらうということと言われています。

あと何かいうべきあったんだけど。そうそう、でね、私は大澤さんのずっとこの十日間読んできて、やっぱりその、今のね、日本の、まあそりゃ西欧でもそうかもしれないけど、ガキどもの苦しみというのがこう、やるせなく迫ってくるんですけど、それはどういうことかという、私たちが覚えなければいけないことの非常に大きな部分が記号操作なっちゃったんですよ。この記号操作能力っていうのの肥大、突出、といったことは私は何か全人類的な不幸だと思うんですけど。つまり、本当に知の摩天楼を作ることは不可欠なんだけど、でも狩猟採集民たちにとって、仲間を幸福にする一番の手立てはですね、女だったら美味しいスイカを採ってくる。男だったらでっかいものを獲って肉を分配する。この喜びの深さというものを、私たちはそこからどンドンどンドン遠ざかって記号操作能力の学習というのに突出していくという、人類史の悲劇というのはあるのかなと思います。以上です。

大澤)

ありがとうございます。

菅原)

大澤さん、何か。

大澤)

うん、あの、なんやろ、菅原さんが大事なことだいたい全部、大事なこと全部以上話してくれてそれほど沢山ないんですけど。あの、人間にとって確かに教える・学ぶっていうことがまあ、生きることの中に組み込まれているっていうかね、それがあるから、まあ、これたぶん、かなり適応にも有利だったってことはよくわかります。ただ、とにかく今日話したように教えるって現象は動物界では非常に稀なんですよね。

で、どうもね、今日のテーマで「コミュニケーション」っていうのはね、教えるってことをモデルに考えると一番いいです。っていうのは、教えるってね、なんで少ないかっていうと、考えてみると教える側にとってはあんまり利得がないんですよね。教えてやるということが。だいたいどっちかっていえば、同じ集団にいる他の個体というのは、どっちかっていえばライバルですから、教えると損する場合の方が損する場合の方が多いわけです。だから、チンパンジーなんか子どもにすら教えないですよね。例えば、先ほどの、あのくるみ割るんだって「こんな風にやるのよ」って教えるわけないです。見てて学ぶだけです。シロアリ釣りなんかだあって、見てるからだんだんそういうんだってわかるわけですけども。息子に叱咤激励していつになったら上手になるんだよみたいなものってやるわけじゃ全然ないですね。だから、人間の世界だと、これは新しい技術として獲得されれば、みんなに教えてやれば一日か二日のうちにみんなできるようになればいいと思うんだけど、そういうことは起きないわけです。で、全く自分にはそれほど利得がないのに相手に教えてやる。これはコミュニケーションっていう現象の一番の、あれだと思えますよ。先ほどの、一番最初の方でも言いましたが、自分にとってよりも他人にとってレリバントであることの方が重要なんですよね。で、自分にとっても有利であつてもいいんですけども、自分にとって全く不利、うーん、無意味でも他人にとって有利、意味があればコミュニケーションって成り立ちます。教えるっていうのはかなりそれに近いんですよね。人間って何か教えたがるじゃないか。子どもなんか「なにになにちゃん違うよ。こうやるんだよ」って、すごく教えたがる。それから同時に模倣したがる。模倣っていうのも凄いんですよね。それから、やっぱりなんかは僕ら、なんとなく他人の真似ばっかしてたら大したことないみたいなことで、真似しない方がえらい感じですけど、人間の能力としてみると、種としての能力としてみると、この模倣の能力が絶大ですね。これがあつたおかげで、ここまできた。

その、これもトマセロなんかいろんな人が言ってますけど、文化進化論みたいなこという人はよく言うんですけど、人間の特徴はね文化の累積するってことなんですよね。その、例えば集団のごとにやり方や行動様式や生活様式があるってのは別に人間以外の動物でもそういうことは時々あります。地域によってちよつと違うとか、この地域のチンパンジーはこうやってシロアリをとるとか、あつちではそういうことやってないよねみたいなこともあります。ですけども、蓄積性ってのはね、前の世代が獲得したものを次の世代が継承し、場合によっては獲得し、さらに改良してってな感じでだんだん階段を上っていくようにどんどん増えてく。こういうことが起きるのは人間だけです。だから、これまでのそういうことが起きるのは人間が学ぶ、模倣するというね、特徴ですね。それがあつたからだと思いますね。

ただ、確かに今も日本、日本だけじゃなく世界中の子どもたち、なんていうのかな。あれですよ、累積が激しすぎてね、上の世代が下の世代にもう教えても、教わつてもしょうがない状況なつちやってるんです。僕ら、例えば下の世代にスマホの使い方を教えてやるっていうわけじゃないんですよ。向こうの方が知ってるわけだからこっちが教わるわけですよ。だからなんていうのかな、人間の生理的な成長と教えることの循環みたいなものはね、あまりにも累積性が激しすぎると人間のライフヒストリーとの間に噛み合わせが悪くなるっていう感じがちよつとしますよね。

橋彌)

今のお話の中で、例えばその、人以外の動物でその教えるっていうのが体系的に研究されてるのは多分ミーアキャットですね。ミーアキャットは大きなグループを作るんですけど、その中で子どもにとってサソリの取り方を教えるっていう時に、最初は殺しちゃって与えるんですけども、その後、毒針のところを噛みとって与えるとかですね、段階的にハンティングを教えるっていう風な、これは割ときっちりした仕事がありますね。もう、菅原さん、大澤さんがもう仰った通りなんですけど、ただ、教えるっていう時にそれはおそらくそのKin selection、血縁淘汰。つまり自分の子どもであったり、まあ血縁の近い固体に教える。まあ、姉妹であったり兄弟であったり、っていう風なところに教えている。人のその教えるっていうのが教える教わるっていうのが、血縁淘汰を超えたものかっての、これまたちょっとその血縁淘汰理論自体をどこまで拡張するかってのは、今大きな議論なので考えなきゃいけないところなんですけれども、先ほどもおっしゃった通りで、例えば僕らの研究でも1歳半の子どもでも目の前にいる人が何を知らなくて何を知らないかってことをどうもあるレベルではわかかって、知らないものを教えるっていう風なことを別に頼まれもしないのにするっていうことがあるんですね。その時にでも、多分教えると教わるっていうのがなんか二つのプロセスにするのか、それともどうもその認識論的なギャップが自分と他者の間にあるっていうのを、それをこうならそうとするメカニズムっていう風に考えると、その教えると教わる、教えると学ぶっていうのは、まあ、同じ地平で、というか考えられるのかなとちょっと思ったりもしますが、それはまあ、えっと、ちょっと今のお話を伺いながらちょっと考えたことです。ここに関しては、教えると教わる、確かにそのコミュニケーションを考える時に、この問題ってかなり大きくなっていく。特に人っていうのを考えると大きくなっていくと思うんですけども、何か気になるところとか皆さん。

菅原)

あ、ちょっと教育者的な論なんですけど、一時期この問題は文化人類学をすごい賑わせた理論で、大澤さんがよくご存知の方に、あの人「こうじん」って読むんですか？「ゆきと」って読むんですか？

大澤)

「こうじん」ですね。

菅原)⁶⁰

柄谷行人さんの『探求 I・II』っていう有名なシリーズがあって、そん中にね、結構、文化人類学者にとっては衝撃的な、その「共同体の中でのコミュニケーションっていう話は退屈だ」っていうね、恐ろしい罵倒があってですね。で、何が退屈じゃないっていうと、それは商人がよそに出て行って、全然そのコードの通じない相手とにかく物を売りつける、というね。そういう命がけの飛躍ということを考え抜く方が、ずっと面白いっちゃうね。その、商人が売りつけるっていうことの全く同型なインタラクションとして教える教わるということを論じていた。昔読んだ本なので、記憶は曖昧ですが、すごく重要な視点だなあと、その時思いました。

大澤)

⁶⁰ 柄谷 行人(からたに こうじん、1941年8月6日 -)は、日本の哲学者である。

柄谷さんはね、まさにそうなんですよ。今日も今、コミュニケーションって言って僕らメッセージの伝達だとか情報の伝達みたいなのが一番だと思うんだけど、そうじゃなくて、教える-学ぶの関係で考えなきゃいけないんであって、という風にしたところがポイントなんですよね。

しかも、重要なのはね、教える-学ぶっていう風に言うと、教える方が教師で学ぶ方が生徒だったりすると、先生が強くて、上から目線で教えている感じになりますけど、柄谷さんが言ったポイントはむしろね、教える側がいかに弱いかっていう話なんですよね。これはまあ、でも僕らね、教員がって思うわけじゃない。講義で一生懸命教えて、わからせようと思っても全然わかってもらえないとか思うわけですよ。相手が全くわからなかったら、結局お前を教えたことにならないわけですよ。つまり、相手が学んでたとき教えたってことが成り立つわけですよ。それはそれこそ賭けなわけですよ。教えてみるわけですよ。「全然わかりません」ってされてしまったら結局、崖から落っこちたに等しいことになるわけですよ。だから、これは今日のね、なんていうか、模倣して学ぶ、僕はどっちかっていうと、学ぶ方がいかに得をしたかって話をしたわけですよ。実は柄谷さんは教えることがリスク、いかにリスクのある現象で、まあ、コミュニケーションはそこで考えないっていう。

だから、教えるって考えてみると、初めからわかってる人に教えるわけじゃないじゃないですか。わかってたらもう「そうだね」ってたら、しょうがないですから。例えば今日僕がトマセロについて異論を言うと、橋彌先生はちょっと違った考えを持ってるかもしれないと思うから、わざわざ言うわけですよ。どういう風に自分と違う、自分と同じじゃないからあえてコミュニケーションする。そしたらそれで、同じ共同体の中で既に合意がなされている間のコミュニケーションなんてものじゃないんだと。知らないやつらにこれがいかに価値があるかを納得させて売りつけるっていうのは、例えば、まあ本当のコミュニケーションというか教える-学ぶ関係だみたいに考えていくっていうのが柄谷行人さんの考え方っていうかね。視点をパッと変えてくれるような技がありますよね。つまらないとかって言われると本当につまらないコミュニケーション(聞き取り不可)な気分になってしまいますけど。

橋彌)

以前まさにこの人間環境学コロキウムで、「教えるということということ」っていうシンポジウムをやったことがあるんですけど、その時にあの高田さんとかに来てもらって色々話したんですけど、その中で今日いらっしやらないと思うんですけど野々村さん、九大の歴史学の先生が「教師ってのはかつて奴隷だった」っていう話をされて、僕が全く不勉強で知らなかったんで衝撃を受けたんですけど、確かにヤマザキマリさんの古代ローマの漫画とか読んでると奴隷として出てくるんですよ。で、教える立場の弱さって、教えるものが持つ権力性ってのは、なんかものすごく、今は何となく当たり前のように僕ら持っているけど、全然違ったんだってのは確かに、今、大澤さんのお話を伺って思い出しました。

菅原)

つまらなかったら殺されちゃうんだったら、まじめに本(書かなきゃね)。

橋彌)

でも、その奴隷が子どもを殴ったりするんですよ。

大澤)

だから奴隷起点のね、イメージもちょっとね、僕ら。

橋彌)

そうですね。

大澤)

まあ、奴隷だったことを驚かなきゃいけないけど、同時に僕らどうしても、南北戦争のときに解放された奴隷のことを考えちゃうけど、あれと奴隷とね、やっぱりイメージ違うんですけど、ある意味奴隷も偉いですよね。

橋彌)

そうですね。ああ、確かに確かに。あ、ありがとうございます。次に、頂いてる質問に移りたいと思いますけれども・・・

橋彌)

はい、では、質問者3さんお願いします。

質問者3)

こんにちは。本日はお話ありがとうございました。頂いた話とはかなり変わって、そうですね...俗っぽい話に、質問になるのですが。人類が世界平和を実現するためのコミュニケーションのあり方やマインドセットっていうものについて、何か思われるところがあればお聞きしたいと考えています。さまざまな戦争だったり、身近な人との争いだったりというのは、往々にしてコミュニケーションの齟齬で起きてくる、生じるということがあると思います。そういうところを解決するというか、そういう問題が起きないようにするための考え方などが、俗っぽい話になりますが、お二方の考えとしてあれば何かお聞かせいただきたいと考えています。

橋彌)

ありがとうございます。大澤さんからよろしいですか。

大澤)

なかなか難しいですけど...政治的な現象ですからね、いろんな要因でそうになっていますから、なかなか難しい。強いて言うと、いくつか言えることとしては...まずね、“ヒトという種がどのくらいに戦争が好きか”っていうことを考えた時にですね、どうですかね。全く平和主義ってことではないですね。かといって...例えばね、攻撃性...人間の持っている暴力性や攻撃性ってのを考えた時に、少なくともこう、“リアクティブ・アグレッション”って言い方があるんですが、“リアクティブ”つまり“カッときて”怒る、みたいなそういうタイプの攻撃性ですね。こういう攻撃性に関して言うと、ヒトっていう種は非常に小さいですね。あまり激しい攻撃性はないし暴力性もね。でも戦争ないし他人の民族を虐殺したりってことはしますから。“能動的に計画して何かをやっつける”みたいなことは結構やりますね。そうですね、どうなんですかね...これはちょっと、菅原さんたちに聞きたいんだけど。例えば狩猟採集民がどのくらい戦争をしているのかということを見ると、一説では、例えば10万人当たりの戦死者の数とかを考えるとね、だいたい...第2次世界大戦中の戦死者の数よりは少し少ないですね。だけれども、平時の我々の現在よりもかなり多いので、結構狩猟採集民同士で

戦わないといけない場面はあることがあるんです。だからあの、ヒトっていう種が集団的に競争しあったり戦争しあったりってことはそこそこあるんですね。で、多分ある進化の段階において集団がある程度徒党を組んで、ある程度の規模で競争するのが一番適応的だったっていう段階があって。それが多分今日の話で言えばcollective intentionalityが成立する時期になると思うんですけど。そう考えると、戦争して相手を殺すかどうかは別として、人間の1万年？九万年ぐらい付き合って...29万年ぐらいやっていた生活様式中ではそこそこ戦いはあったんですね。だから...どうなんですかね、狩猟採集民が命懸けでそんなに戦争をするかどうか...相手を不意打ちでやっつけて戦争をすることはあると思いますけれど。勇敢さを競うためにわざわざ戦ったりするのは、ちょっと僕は分かりませんがね。とにかく、生物としてみた場合に、人間にそこそこそういう習性があることは確かなんですけれど、でもそれがね、現代の社会においていきなり、「人間にとって戦争や何か宿命であって避けがたい」という話には全然ならないと思うんですね。そんなにダイレクトに人間の持っている遺伝的ディスポジションに影響されて行動が決まっているわけではありませんから。

ただ、今回のテーマのコミュニケーションとの関係でいうとね、僕はこう思うんですけど。あんまり話題にはならなかったですけど、ノンバーバル・コミュニケーションが可能になるためには、分かりやすく言えばコモン・グラウンドって思うんですけど、要はお互いが当然のようにしている知識の累積のようなものですよね。相当なコモン・グラウンドがあるからこそ、今我々はこうして小さな小さな、部分的な問題について話し合うことができるわけです。で、僕は、大きな地球レベルでの問題が起きるときに思うのがね、コモン・グラウンドレベルでお互いを理解していないなって思うことがよくあります。例えば現代だと米中。全然違う行動様式がある感じがする。で、しかも、その、なんていうかな、それぞれの国において、よきこととされていることがすごく違うんですね、おそらく。で、しかもその違いはね、昨日今日始まったことじゃないです。「習近平が書記長になったからそうなった！」とかですね、「トランプが大統領になったからそうなった！」とかではなくって、“文明的蓄積”に近いような形でそうなった、問題が起きています。アカデミックな問題として僕らがやることとすれば、僕らの...日々の外交上のコミュニケーションや、あるいは経済的な取引の中では、お互いのコモン・グラウンドー根本的違いみたいなものを、忘れてるんですね。同じコモン・グラウンドを持っているように想定している。だけれども、現代を見るとね、かなり違うんですね。中国の行動様式なんてね、例えば“中国っていう文明の全体の成り立ち”ってものを考えるとね、何となく理解できるものもあります。でもそれは、アメリカとは全く違いますからね。そういうコモン・グラウンドのレベルにあるかなり深い違いみたいなものを、どういう風に説得してくか、そしてそういうことが分かったうえで、いろんなことが決まっていきます。その一、「次の行動をどうやったら平和的に共存できるか」とか、場合によっては、お互い厳しい経済交渉の駆け引きをしてもそれをやめさせないといけないことがあるのかとか、そういうことが分かってくるから。そう思うんですね。例えば僕らは中国の問題とかだと、日常的なものだと「尖閣諸島がどうしたこうした...」という話になりますけれど、それはすごく部分的な問題に過ぎないですよ。“中国という文明がどういう論理で動いているのか”，そのとき“尖閣諸島がなぜ彼らにとって重要な意味を持つのか，持たないのか”そういうことをまずはなんていうんですかね...学問的なコミュニケーションのベースになるものそのものが、どういう成り立ちになっているかをはっきりと提示するということが重要だと思うんですけどね。

はい、じゃあ...私の立場からえっと、すごいぶっ飛んでるぐらいの質問なんですけれど、まずはブッシュマン研究からの知見ですが。“ハームレス・ピープル”とか一時期言われたんですけれど、まあブッシュマン研究で一番...なんだろう...大きなモノグラフを残した人は、当時ハーバード大学にいたリチャード・リー⁶¹という人でね。で、そのカナダのトロント大学で勤めていらっやっしたんですが、リーさんはある章です、かなり厚いエスノグラフィですが、それもかなり後の方の章で、“ビクテモロジー”っていう方法です。これ犯罪学なんですけれど。“犯罪の被害に遭う人にどういう特性があるか”という、そういう分析手法を彼の知りうる限りの...多分非常に長いタイムスパンの...過去半世紀ぐらいだと思んですが、ブッシュマンの記憶に残っている限りの殺人の事例を洗いざらい調べたんですね。で、ブッシュマンの地域ポピュレーションの数...その時々で変動しますけど、まあそれを推測で“このぐらいだろう”として割ってみるとですね、何と驚いたことに、アメリカの都市に置ける犠牲者率よりもかなり高かったという結果が出ました。だから“ハームレス・ピープル”なんてのは神話に過ぎないのですが、リーさんもブッシュマンの見方なので、あれこれと弁明をしているんですね。でもその中で失笑してしまったのは、「ベトナム戦争の戦死者数はこの統計には入っていない」という、鼻頂の引き倒しみたいなことを言っています。あのだね、私は、その資料をつぶさに見て、思ったのは、これだけ高い死傷率が出てくるといことは、“フィウド”なんですね。日本語でいう“血の復讐”です。えっと、誰かが殺されると、その親族がリベンジで、相手の集団の人たちを何人か殺すと。そしてまたそれに対するリベンジが起こる、と。それでドドドッとクラスターの殺人の件数が増えるというのは、都市生活の殺人とはかなり違うということですね。

それから、人類学で有名なのは、まさにこれは文化相対主義の試金石なのですが、私のかつての同僚だった、福井勝義⁶²さんのショッキングな話は、自分の愛している去勢牛が死ぬとですね、そのあまりの悲嘆を晴らすために、近隣の農耕民の村に進撃して、殺していくっていう、救いようのない話があります。それから、私が結構詳しく論評したM.ロサールドという人の、フィリピンの首狩り族の話です。これも、非常にロジックが似ている...ロジックといえるのかどうかは分かりませんが...ものすごい、共同体の中にですね、怒りがたまるんですね、なんら首には象徴性がなくてですね、その首をえいやっと地面に叩きつける行為自体が非常に素晴らしいものとみなされる。と、そういう感じで、そういう意味の...一口に言って“儀礼的な暴力”ですね、そういうものが、人類の文化にとって、とても...なんていうかな...必然的な文化だったともし考えるんなら、世界平和を実現するためのコミュニケーションの在り方やマインドセットというものは皆無であろうと、ニヒリスティックに言い捨てたい...気もするのですが、私が現代社会で最も素朴に考えていることをお話しするとですね、実はドゥルーズと同じで私もですね、SFをよく思考の羅針盤として使うんですね。大澤さんもよくSFを引用されてますけれど。どっちが引用が多いか今度会ったら比べようと思っているんですが。えーっと、そのSFの中で、これも私が子どものころ読んでものすごく衝撃を受けたのは、P.アンダーソン⁶³の『脳波』という小説で、それほど今では評判になってはいないものなんですけれど。これはね、えーっと、地球が公転軌道の中で偶発的にある磁場みたいなものの中を通過してしまうんだよね。そしたら、それによって地球上のあらゆる...少なくとも脊椎動物だと思わなければならない...うさぎから猿から人間まで、知能が飛躍的に向上しちゃうんですね。知能が飛躍的に向上した結果としてですよ、「こんな馬鹿

⁶¹ リチャード・リー (Richard Borshay Lee, 1937-) はカナダの人類学者である。

⁶² 福井 勝義 (ふくい かつよし, 1943- 2008) は、日本の文化人類学者である。

⁶³ ポール・ウィリアム・アンダーソン (Poul William Anderson, 1926- 2001) は、アメリカ合衆国の小説家、SF作家。

馬鹿しいことやっつけられるか！」って皆が社会に対して反旗を翻して文明はあっさりと崩壊すると。つまり私がその子供の頃に愕然としたのは「そうか頭が悪いからこんな馬鹿馬鹿しい社会に暮らしているのかな」っていう、そういう恐ろしい認識ですね。それを今でも私はミャンマーを見るたびに、あるいは中華人民共和国の香港支配を見たり、さまざまな場面でテレビを見ながらなるんですね。それは簡単なことで、この人たちが身に知性に目覚めたら、まず兵隊は民衆に発砲はしたりしないだろう。というか、軍人という職業を止めるだろう。それはあのクラスター爆弾を作る人とか。対人殺傷地雷ですね、足だけ吹き飛ばすような悪意に満ちた兵器をどっかで誰かが作ってるんだけど。その人が「俺もうこんなことしないわ」って言えばね、一夜にして戦争はなくなるはずなんだけど、絶対そうはならないのはどうしてなんだろうなって。これは本当に素朴な子どもの疑問です。

あ、そんでね、この機会に大澤さんに振りたいんだけど、大澤さんの『革命への希求』は私はものすごく説得力があるって言う言葉じゃ足りないくらいね、胸を打つと思うんですね。感動的だと思うんです。特にあの、ベンヤミン⁶⁴を導入して、私たちが今やってることが過去の意味を変えるって言うね、その発想は素晴らしいと思うんですね。そっからそこで質問と、いくつも読んで不思議だった事。これも素朴な子どもの質問なんだけど。今のね日本の民衆がどう社会に従属してるのはミャンマーの兵隊がこういうことあることをやってることと結局同じで。みんなわが身がかわいい。わが身がかわいい、つまり明日のおまんまが欲しいと。あるいは明日のおまんまが保証されてる人は、より快樂に満ちた生活が欲しい、という形で、全てが...それはマスコミも言ってること、政府も言っていることなのに、言ってることで...つまり経済という名前の、なんですか...リヴァイアサンなのか具志なのかしらないけれど、経済っていう妖怪にみんなひれ伏して、で、しかも経済という妖怪のことさえ言えば、何もかも、正義も何もかも判断放棄して許されるっていう。これですよ、この経済という妖怪それ自体については大澤さんはあんまり名実に語ってないような気がするんですけど、そこら辺どうなんでしょう。

大澤)

まあね...なんというかな、この20世紀の終わりぐらいからのあのポイントってね、結局あの...経済の政治に対する優越っていうか。あるいは“政策”っていうのが“経済政策”に尽きるようになってしまったっていうか、そういう感じですよ。逆に言うとね、この経済という現象をね、僕らはまだ良くつかめてないような気がします。本当は、経済は今は何なんですよけれど、2つ経済関係のものでは用意していて。1つはね、これはあの...経済の起源について。これはね、それこそ菅原さんの領域にも近いような、そういう贈与経済の方から考えていって。これはまあ、貨幣の誕生ぐらいまでのプロセスの論理をね、歴史的な研究はいっぱいありますから、どういう論理になっているかは見ておきたいということ、ただそれだけだとまだね、クリエイティブな市場経済の成立ぐらいまでしか出てこなくて、我々の問題にしている資本主義経済のようなものはね、まったく、さらに複雑なものですから。複雑というか...資本主義について思っていることと云ったら、これ前にもいろんなところで言っているし、さっき名前も出したベンヤミンもそう言ってるわけですけど、資本主義ってね、本当は宗教なんですよ。ただその宗教が、最も宗教らしさをかなぐり捨ててって言うか、そこが不思議なところですよ。つまり宗教で...イスラムのようにね、宗教的な解決に基づいてとか、ある種の儀式・礼拝に基づいてとかだったらね、分かりやすいです。だけど資本主

⁶⁴ ヴァルター・ベンディクス・シェーンフリース・ベンヤミン (Walter Bendix Schoenflies Benjamin, 1892- 1940) は、ドイツの哲学者である。

義ってのは、まったく世俗の欲望に従ってるように見えるだけです。だからあの宗教と最も遠いように見えるんだけど、だけど本当は宗教のある種の展開ですね、まあもちろん一番最初にきっちりやろうとしたのは間違いなくM.ウェーバーになるわけですがけれども、その何て言うか、宗教が宗教的外観を捨てていって...資本主義の中で生きてきた自分が例えば何かの宗教に従って行動しているとはもちろん思っていないのですよ。自分はよき無神論者ですごく世俗的な合理性に従って動いてるって思うわけですがけれども、でも世俗的合理性に...だから何ていえばいいですかね、

例えばM.ウェーバー⁶⁵の『資本主義の精神』で一番驚いているのは、そのそこにある...何て言うか...ある種の過剰さですよ。もっと分かりやすく言えば、例えば資本主義って普通は、貪欲さとの関係でいるわけですけど、だからそれ以外も非宗教的に見れるわけですけどね、その欲望自体の持っているある種の過剰さですよ。人間って別にね、無限の欲望を持っているわけじゃないですから。”動物として”考えてみればね。だけれども。”生物として”の人間の限界はるかに超えて我々は生産し、消費し、投資するわけです。これがだから、あのなんですかね...その行動の内容は非宗教的だけど、行動の形式は宗教的なんですよ。だからそのレベルで経済ってものを捉えないと、経済ってものが持っている呪縛から逃れられないと思うわけ。その一見ではあ、経済は最も世俗的な欲求であり人間のメンタル時間の側面とは全く関係ないし、だから精神的厚みもないし、説得力もないし、正義もないし。だから一番制御しやすいのに僕らそれに一番下支配されているわけですよ。それはね経済を甘く見ているからですよ。じゃあどこを甘く見てはいけなかつたかという、経済を...我々の経済をですよ、資本主義経済というものが持っているある種のこう...先ほどの言葉の繰り返しですけど、”宗教としての概観をかなぐり捨てた宗教性”ですね。だから「宗教批判なんだよね、経済学者って。本当は。」という風に考えるべきなんですよ。という風に考えていかなければいけないからっていうのはありますね。そう、なんていうか...資本主義という宗教にみんな入信してるんですよ。ある意味では。

橋彌)

コストとベネフィットっていう競技を持った宗教っていう...

大澤)

ある意味ではコストとベネフィット...足し算と引き算なんですよ。基本の原理は非常に単純です。しかし、それが無限に循環してしまうということです。例えばあるゴールを目指しているとすれば、永遠にゴールがないわけじゃないですか。どんなに...まあ言ってみれば、無限の向こうに行こうとしているわけです。まあ考えてみれば...普通に考えたって宗教的じゃん。早い話がさ、資本主義って、ほとんどの動いている貨幣って負債じゃないですか。で、本当はね、リアルに考えれば、この負債が返されることはないですよ。永遠に。だけれど、返される前提で動くわけです。存在しない神様を...って言っちゃうと不適切かもしれないですけど、存在していない神様を存在すると仮定しているのとおんなじなんですよ。

橋彌)

メタファーがものすごく...その、強かったんだなって思うのは、例えばそのダーウィンが自分の自然淘汰の理論のことを”自然の経済学”っていうふうに、まあ勿論彼はマルクスを読んでいたわけなんですけれども...読んでますよね。あ、すみません、逆でした。

⁶⁵ マックス・ウェーバー(Max Weber, 1864-1920)は、ドイツの政治学者・社会学者・経済学者である。

菅原)

今のに関連してもう1つ質問なんですけど、えっと例えばね、経済という巨大なものをゴジラみたいなものに喩えたらね、ゴジラの行動様式を経済学者が一生懸命研究するや予測可能性が立つわけですよ。その予測可能性というのを手がかりにしてゴジラを飼いならすことができますよね。でも...私は何か大学の経済学部ってのはそういうことをしてくれるものかと思っていたら、一向にその、コントロールの可能性？予測可能性が実現しない。だから極端に言ったら「そんなだったら経済学部・経済学者に存在価値はないだろう」ってね、暴言まで吐きたくなるんですが、そこら辺...なんで予測不可能でコントロール不可能なのか。それは宗教だからなのかな。

大澤)

経済って現象をみんなよくわかってないんですよ。だって経済がそんなに予測可能だったらね、苦労しないんですよ。その通りにやっていたらいつまでたっても...例えばGDPを年間3%ぐらいどうにかしたいねとか思ってそうやったら全くそうはなりませんよね。理論上は、例えば日銀がこれだけ金融緩和すればね、消費が増えるとかありますけれど、全然理論上の通りに動かないですよ。だから、まあ経済学って...経済学だけじゃないですね、専門家って、何かわかっているわけじゃないんですよ。“本当はよくわからない”ってことが分かっている人だと思うんですよ。だから経済の専門家ってのは、“誰も経済をはっきりと予測することはできない”ってことをはっきりとわかっている人たちってことになる、そんな感じだよ。だから、その...ある時期では、すごく洗練された理論モデルがありますけれども、モデルとしてはあるんだけど現実的な適応力はないわけで、それで、21世紀ぐらいになったころのはやりとしては、行動経済学でしょう。心理学とセットになった。これは、あまりにも人間の経済行動ってものが、経済学の数理モデルで示されるエコノミクスとは違いすぎるものですから、もうちょっと人間の実際の行動に近いモデルを作りたいということだと思うんですけどね。ただ行動経済学は、今度は逆に、いろいろな発見がいっぱいあるんですけども、いかにもアドホックなんですよ。その...耐久性に非常に欠けます。だから、既存の経済学にとってかわるにはちょっと弱いんですよ。まあ経済っていう現象は、本当に不思議ですね。誰の予想通りにもならないから、極端なことが起きるんですよ。バブルがはじけたり。まだ誰も本当は分かってないってことは分かっているけれどもそれを言ったらおしまいなので、専門家は本当は分かってないことは言わない。けれども他の領域だってそうじゃないですか。本当の専門家ってのは、いかにこれが分かってないかってことをよくわかってない人たちってことです。僕らも今日こうしてコミュニケーションについて話しているわけですけども、コミュニケーションという日々僕らがやっている現象の中に、いかに分かっていないことがたくさんあるってということが分かってくれば、コミュニケーションについての専門家になれるって感じですよ。

橋彌)

確かにその...、わからないっていうその“コミュニケーションのわからなさ”っていうのが今回のコロキウムのテーマだったのですが、逆に「“わかりやすいコミュニケーション”なんてあるのか？」なんていうと、ないわけですよ。実は分かった気になっているコミュニケーショ

ンの方がよっぽど大変で...かつて、ルチン・コチロフ⁶⁶のM.ミンスキー⁶⁷とかがですね、「計算するコンピューターよりも自転車に乗るロボットの方がよっぽど大変だ」という話をしてましたけれど。確かに日常のコミュニケーションこそがまさにわかんない、ということを変えて思いました。

えっとあの6時は過ぎていますが、うかがった通りでこれはデスマッチ形式で進むということで窺っていますが、もうあのどなたからでも。だんだんグループサイズもあのパッと手を上げて話してもらっても丁度いいぐらいに、だんだんなってくると思いますので何かありましたら自由に、どうぞ自分でマイクをつけて発言してください。

それでは質問者4さん、お願いします。

質問者4)

そうですね...えっと、個人的な興味があるところとしては、少し戻るんですけど、議論が。“教える・学ぶ”の所に戻るんですけど。“教えるー学ぶ”という関係性が、ある種、仮に“教師と子ども”というとする、その間の“知識の差異”こそが、“教えるー学ぶ”の関係性を可能にしている。だからこそ、“教えるー学ぶ”というのは、その絶対的差異の(...何だろう)...絶対的差異を根底にして成り立っているコミュニケーションだという話は、すごく理解できるんですけど。一方で、本当に、全くの違う他者に、何かを教えるということがいつも起こるわけではないよなというのが印象としてあって。何だろう...例えば、その、自分の子どもに何かを教えようとするとき。そのときは確かに、自分と子どもとの間には、“知識が在るー無い”に違いがあって、それを埋めようとするアクションとして“教える”ということが起こってくると思うんですけど。一方で、普通の、うーん、何だろう...パソコンとかに、何かを教えようと思って働きかけたりはしないじゃないですか。やっぱり“パソコンと人間”という何か、“モノと人間”という、まったく違う存在であるにもかかわらず、そこに“教えるー学ぶ”という絶対的な差異に基づいて、“教える”という行為は発生しないわけで。そうなるともむしろ、何だろう、その、確かに“教えるー学ぶ”という関係は絶対的な差異に基づいて成り立っているかもしれないですけど、でもやっぱり、絶対的な差異の中にも、違いがあるような気がする。要するに、僕らが“教えたい”という衝動があったとしても、それを向ける方向性っていうのは、かなり限られてくるような気がするんですけど、その点についてもう少しお二人の考えを聴きたいなと思ったのですが、いかがでしょうか。

大澤

そうですね、“教える”というのは、何というか...ある種の“承認”を求めているようなものなんですよ、本当のところを言うと。だから、その『パソコンに教える』という時はね、それが無いんですよ。極論を言うとね、例えば僕が、僕の方が知識がたくさんあって、ある人に例えば『社会学について教えてあげよう』とかいうふうになったとする。そのように考えてもらえたらいいんですけど。で、考えてみるとね、僕が有意義な知識を持っているかどうかというのは、相手がそれを受容するかどうかにかかっているんですよ、ものすごく。相手にとってどっちでもいいようなものであったらね、その知識自体が“無”なんです。だから、僕が本当に意味のあることを知っていたり、あるいは気づいていたりするとなるかどうかは、広い意味での“教える”という行動にかかっています。だから、そのときに相手がそれに説得されたり、納得したりしたときに、“ああ、自分は意味のあることをいったんだな”という感じになりますよね。教える側は、広い意味での承認をめぐる闘争をしているんですよ。相手が頑固でそういうことにまったく説得されない、納得しないとなったら、言ってみれば“相手の勝ち”といいますかね。そういう感じだと思いますね。“教えることの意志に、自分にかかっている”という感じですね。

⁶⁶ 詳細不明

⁶⁷ マービン・ミンスキー(Marvin Minsky, 1927-2016)は、アメリカ合衆国のコンピュータ科学者、認知科学者である。

橋彌

用語としては、英語だと”teaching”とか、トマセロとかはよく”informing”とかを遣いますけれど、今大澤さんがおっしゃった”教える”というのは”informing”ではなくて”teach”ということですよ。情報の伝達にはとどまらない”という感じ。

菅原

じゃあ、私もなんか言わないといけないんだろうな。えーつとね...そりゃあ、”教える事柄の難しさ”を言わなかったら不公平になると思うんですけどね。例えば、私はよく語用論的違和感を感じることもあるんだけど。例えば、山登りの番組を見ていてね。ガイドさんが、「ベニテングダケ」になります””って最近よく聞きますか？”～になります”とか、「はいこれが八ヶ岳になります」とか。そこまでいうかな。これって明らかに”ファミレス用語”の転用なんですね。ファミリーレストランに就職したときに、マニュアル通りのしゃべり方を徹底的に教わると思うんですよ。で、それをうのみにすると、そういうしゃべり方が汎化されちゃう。“汎化”でいいんだっけ...”generalization”されちゃう。こういうのを私は、それほど苦労せずに”教える—教わる(学ぶ)”ことだとわかるんですけど。あの—...例えば私がですね、...なんだろう...なんでもいいや、さっき大澤さんに言い忘れていたことでもあるんだけど。なんで私が意地になってドゥルーズを読んでいるかというね、『差異と反復』からずーっと攻め上っていくとニーチェの永遠(永劫)回帰が分かるんじゃないか、という期待があってやっているんですよ、実は。私は今、ブッシュマン(アフリカ狩猟採集民)の語りを年代記風にまとめたくないというのは、『永遠回帰』として書きたいね。でも『永遠回帰』として書きたいといったって、『永遠回帰』の概念自体が非常に謎めいているから、天才の力を借りんとわからん！と思って、今意地になって読んでいるんだけど。例えば私がですね、えっと...今質問してくださったのは...

質問者4

はい。

菅原「ああ、はいはい。だから、質問者4さんに私が、”永遠回帰は”...あ、実際は「永劫回帰」って訳されているんですけど、「永遠回帰は素晴らしい概念だ！教えてやろう！」とかね、いって教えられるものじゃないよね。私がある日完璧に理解したとしてもね。ある日完璧に理解したとしても、多分絶望的で...Zarathustraのようにあなたの前で舞ってみせるとかね。そういうことをしない限り、教えられないと思う。っていうぐらい。一口にね、”教える—教わる”って言うてもね、無限に近いレイヤーがある。ということと、でも実感に即して言えることとすればですね、犬の訓練をモデルにしたらね、”教える—教わる”ということがずいぶんと分かりやすくなると思う。それはつまりね、”犬の本性がどうか”ということと、”犬に訓練したらどこまで犬が私とうまく暮らせるようになるか”ということとの見極め、だよ。だって私は、さっき猫が登場して、あの猫にね、”帰れ！”とか”待て！”とかいう訓練をするわけじゃないよね。それはもともと私が”猫の本性”ちゅうもんはこんなもんだろうな～”って思っているから、そんなバカみたいなことをしてもお互いに不幸になるだけなんだけれど。犬ちゅうのは、ある程度、いわゆる”躰”というものをしないと、この社会に適用できないよね。だから、かなりの労力を使って訓練をするわけなんだけれど。でもね、私はそこに職業的訓練士と、飼い主自身とでは大きな違いがあって。職業的訓練士だと、さっきの大澤さんの言葉をパクらせてもらおうと、犬という他者を道具として扱っているわけね。だけど、飼い主の場合は、これから十数年一緒に暮らすかけがえのない仲間だから。そこで私が、昔使ってた概念でいうと、もし”教える—教わる”というインタラクションが抑圧的なものでないとしたら、そこにはある種の、両者の間の仲間性の投射というのがね、何らかの意味での好メンバーシップをお互いが投げかけ合うというね、そのベースが、私は一番大事だと。例えば、斎藤さんがさ、ミステリーマニアだとしたらさ、この間のホ

ロヴィッツ⁶⁸のあれはどうだった！？って。で、まだ読んでなかったら、「あーれは愚作だったぜ」とかね、やるでしょう。でも、斎藤さんがミステリーに何の興味のなかったら、そんなことをする気にもならない。という意味で、“メンバーシップ”というのは、私は本質的だと思います。ついでにさ、大澤さん。ホーガン⁶⁹の『未来の二つの顔』っていう有名なSF読んだ？

大澤

読んでないです、僕そんなにSFのファンではないです。

菅原

そしたら”教えてやろう”なんて。あれね、まさにフレーム問題を人工知能にどうやって植え付けるかって話でね。発端は傑作で、月かどっかで、人口知能を搭載したレーザー光線付きブルドーザーかなんかで作業をして、『そこにあるなんか邪魔っ気ななんかをそのレーザー砲でふっとばしてくれ』って。そしたら、人工知能には常識がないから、そこらじゅうありとあらゆるものを吹っ飛ばして大変なことになるんだね。で、これはいかんってなって、その巨大人工知能に、常識を植え付けるために、巨大宇宙ステーションを設置してね、そこで支配させて人間がなにをやっているのか、人間はどういう存在なのかということを観察学習させて、訓練させようとするわけ。常識を身につけさせるために。そしたら『はあ～人間はこうやって機能を停止するんだ』とかを理解しちゃって、人間を殺しまくるという悲劇なんですよ。最後はなんかね、ハッピーエンドに終わると思うけれど。フレーム問題のバイブルみたいなSFなので。

大澤

読んでみます

橋彌

質問者4さんは、いかがですか。今の二人のコメントに対して。」

斎藤

そうですね、大澤先生にお尋ねしたいと思っていたのが、教えるという行為には、ある種の教えられる相手からの承認を受けたいというのがあったと思うんですけど、そもそも相手が完全な他者だったら、承認してくれるかどうか分からないじゃないですか。他者が承認してくれるというのが、どういう点でわかるのかなというのが疑問に残りました

大澤

ある種の賭けなんですよ。ギャンブルですよ。あの一...だから、他者を非他者化する試みなんですよ。でも、他者じゃなければ教えることに意味はないじゃないですか、究極的に言えば。だから、何というんですかね...教えるというか、コミュニケーションってそういうリスクがものすごくあるんですよ。んーなんて言いますか、実際のことをいうとね、けっこう、挫折しているじゃないですか。つまりね、自分が、こう教えるとか説得しているかどうか知らないけれど、なかなかあれだな、と思うことがあって。まあ、悪い意味ではなく結構あるじゃないですか。それに、まあ、リスクはあるけれどそれがあるからまた、なんかこう、やることの意味があるとかね。楽しさもそこにあるというんですかね。そういう感じですよ。リスクがあって危ないこと、傷つくことが、楽しいこと、喜びの一部でもありますから。両方...どっちかだけ取ることはできないんですね。はじめっからわかっている人にだけしゃべっていても、向こうだって気にもしないことですからね。受け入れるかもしれない、受け入れないかもしれない人に話してみる。なかなか話すこと自体が難しいで

⁶⁸ アンソニー・ホロヴィッツ(Anthony Horowitz、1955-)は、イギリスの小説家、推理・サスペンスドラマの脚本家である。

⁶⁹ ジェイムズ・パトリック・ホーガン(James Patrick Hogan、1941- 2010)は、イギリスのSF作家である。

すからね、本当のことを言うと。何となく思っただけでもうまく言えないものですから。」

橋彌

”教える”というのは、『相手を内集団化しよう』という暴力性みたいなものもありますよね。内集団...それは内集団にしようとしているけれど、なるかどうかは分からなくて。というところはやっぱりギャンブルなんでしょうね。そもそも集団自体もどンドンどンドン変わっちゃうし。

大澤

まあ、相手に関わろうとしているから教えようとしているわけですからね。どっちでもなければ教えようとする必要もないですから。

橋彌

そうですね

大澤

子どもだって、『～するんだよ！』って教えたがるじゃないですか。『～はこうやるんだよ』とかね。ちょっと違うようだ『違うよ』ってね。

橋彌

割と、実験でも扱われるところですよ。『この積木は石鹸』って言っているのを食べようとすると『だめ！』って止めるっていう。そういう実験セットアップは、それこそTomasello組とかがよくやっている。

橋彌

他にいかがでしょうか...

質問者5

よろしいでしょうか？

橋彌

はい、お願いします。

質問者5

大澤先生の『コミュニケーション』という本を読ませていただきまして、大変興味深く、”論理的に整理しえないこと自体が、コミュニケーションとして成立することは非常に不思議なことだ”というご指摘で、それを多分、私の理解だと、『心の理論』だと。そうではないのかもしれないんですけど。次の論文では、フレーム問題の流れの中でこの議論をおっしゃっておられたので、ああそういうことかと。あとその、橋彌先生のギャバガイっていうのも、読ませていただいて。特にあとがきで先生がお書きになっていたところも、『心の理論』についてのお話だったので、受験生レベル以上の知識はないんですけど、やっぱりその、菅原先生もおっしゃっていたようなASDとか、そういう文脈で空気が読めないとか、あるいはその社会的なコミュニケーションに敏感であるとか、そういう社会的視野の中でですね、『心の理論』という話になってくるのかなと。菅原先生の『感情の猿＝人』ですか？これもぜひ読ませていただきたいと。ありがとうございます。それで、私が先生方にお聞きしたいことは、特に大澤先生につきましては、先ほど質問者1さんがご指摘されたことでもあるかもしれないと思うんですけど、要はその...先生の言葉でいうと“摩天楼”のように、“そのやられて(研究されて)いることについて直感とか仮説とか、それをどのように判別するのか”，ということについてお話しされていたと私は思うんですけど。研究の作法として、やっぱり“学際的”といいますか、例えば情報システムであるとか、医

学とか、そういった知との学際とか連携とか、そういうことをもし、もしも考えるのであれば、やはりPremackがそうであったように、あるいは菅原先生がそうであるように、自然科学的な作法、あおれは実験であるとか、あるいは統計であるとか、そういったところに仮説？“摩天楼”のような仮説をどうやって実証していくんだろうという作法のところに興味があったというのが一点です。それからもう一個、各先生から聞きたいことが。やはりその、禁欲的に作法としては自然科学的なもので、仮説というものを実証していかなければいけない方法論みたいな、それは社会学的なものであったり、人類学であったり、心理学であったり...私は心理学を専攻しているので、心理学って結構ぎちぎちにやっているところだと思っているので、ぎちぎちに科学性を追求していくところだと思っていますので。そのあたりの...“論証のプロセス”みたいなものについてお話をお伺いしたいということ。それと多分、大澤先生はもうAIとか、ディーラーニングとか、かなりネガティブに考えておられるのではないかと思うのですけれど、フレーム問題とかもある中でですね、脳のイメージ...その...Boxismとかおっしゃっておられましたが、そういったやはり自然科学的な会話っていうか、成果...先ほどおっしゃられました健康とか医学であるとか、そういったものとの連携を考えていく中で、情報システムとか医学とかを考えていくにあたって、やはりこの知の学際、知のブレイクスルーとか、ちょっとこれは、なんというか、スコープ外のこともかもしれないですけど、それはもうプラクティスの話で、実践の話なのでですね、求めている地平が違うんだ、ということになるかもしれませんが、そういったことへの関わり方みたいなことをお聞きしたいというのが二点目です。よろしく願いいたします

橋彌

大澤さんからお願いしてよろしいでしょうか。

大澤

ええっです、僕はどっちかっていうと自然科学的なものにはポジティブなつもりです。そういうものを取り入れながら考えているつもりです。ただね、あの...なんて言えばいいんですかね...あの...二つ言いますとね。まずね、社会学とか、人類学とかもそうですけれど、心理学の場合はある程度がそうですけれど。自然科学的な意味での検証可能性とかね、そういうものにもあまりこだわるとね、本末転倒になることがあるんですよ。つまり、”自然科学で立証できるもの”だけを研究することになるんですよ。探求したい目標と...探求する目標が、自然科学的な検証のベースに乗りやすいものに、本末転倒になることがあるんですね。。だから、まあ...なんていうかな、僕自身は、”科学方法論的にどうであるか”みたいなことに、あんまりね、極端にこだわらないで、ただ最低限の、例えば検証可能性はないにしても反証可能性があるぐらいの命題に落としこむように主張するとか、将来的に、反論したい人が何に反証すればいいか分かるようにできるだけしたりとか、そういうことはありますけれども。自然科学性のような厳密性みたいなものを自分の社会学にそれほど強くは求めていないですね、ただ、いずれにしても、普通の自然科学、自分の研究...例えば今日でも、動物行動学、進化生物学、あるいは脳科学、そういう経験科学・自然科学の成果に対しては、僕は割合興味があって、いろいろやっているつもりです。

ただ、その意味で、そういうものを...なんていうんですかね、”鵜呑みにしない”とちょっと言い過ぎかもしれませんが。あの...例えばね、僕よりは、僕が言ったように割合自然科学は好きですけども、自然科学ってものに対して最も批判的だった哲学者、しかも偉大な人ってのがね、ハイデガーです。ハイデガーはね、科学というものはものを考えていないっていうんですよ。ふつう僕らの感覚ではね、”科学者は学者なんだから一番頭使ってるじゃん”って思うんですけど、ハイデガーの考えからすると、”科学は何もものを考えていない、一番ものをかんがえていない連中だ”って。ハイデガー的な意味での“存在と存在者の区別”とか“存在論”とか、そんなことについては考えていないんだろうけれども。でも確かにね、科学というものが、ある部分に対して思考...思考というよりは探求が停止してしまっているということはある気がするわけ。

だから僕は、科学の成果というものには非常に興味はありますけれども、同時に、今日の話もそうじゃないですか。トマセロ、偉大な人類学者、優れた哲学の素養もある...その議論の前提となっている部分に、問いたい疑問はまだ残っているぞ、という感じです。だから、まあ自然科学というのですね、非常に、僕的には取り入れているつもりですね。どうしてもね、学際的になると、他人の分野のものってただ導入するしかないって感じになっちゃうんですけど、僕だって“ちゃんと実験しているわけでもないのに文句言ってもなんだろう”と思いますけれど...。しかし、自分の立場から見たときに納得できない仮説とか、理論的な前提ですよ、に対しては、結構付け加えたいものがある、みたいな。概していうとね、僕は結構自分の論文の中でも、そういう自然科学系のもは引用したり、紹介したりしながらしている方ではあると思うんですけど、そういうのは基本的に面白いからしています。つまり...逆に言うと、つまらない成果は無視しています。で...例えば今日トマセロについていろいろ言っていて、『大澤さんはトマセロに反対なのか?』といわれると、むしろトマセロが一番面白いからです。明らかに、ずば抜けてね。だから、そのうえでね、ただ”トマセロがいったことで全部結論が出ちゃってる”ってなったら、僕は、わざわざいません。だけど、”素晴らしい!だけれども...”っていう形で、いべきこととか、”少し見方を変えられるんじゃないか”っていうことがあるので、引用する。だから、面白いかつ、それに対して自分は文句はないんだけども付け加えるものがあるぞってものについて、積極的に引用して、参照しながらやっているって感じです

橋彌

ありがとうございます。“研究の作法”というところでは、菅原さん、いかがでしょうか

菅原

うちのゆっくんがお風呂に入るように言いに来たんですけど、この話はしっかりと答えておかないと思ひまして。一番ずるい逃げ方はですね、この問題は私は徹底的に書いたので、『動物の境界』という、あれ何ページあったか忘れたけれど、厚さの割にはものすごく安い4,500円という。なんで4,500円になったのかというと、私が印税を辞退したからなんですけれど。あの一、その本に書いてあるので、それ以上言うこともないといって済ませるのもちょっと良くないので。“教える—教えられる”場にあるのにそれもあんまりないので。さっきのことを言いますとですね、これはどうしようもない歴史的条件下で、私が京都大学理学部に入学したとき、大学闘争の真っただ中だったんです。そのときに、壇上で、全京都大学生たちがつるし上げた人たちは、みんな湯川秀樹を最高に尊敬するような、“科学者”たちだったんです。その科学者たちの言い草が、実にナンセンスであると。失望してですね、科学に対して、とても白けた気持ちになったというのが、私の世代の大きな特徴ですね。で、でも、友人たちの中には「僕は数学をやりたい!」って人たちは何人かいたんですが、私の友人にいるような、映画が大好きだったり推理小説が大好きだったりするような奴らはですね、二十何歳かで世界的な業績を上げるような数学的なひらめきを持つような奴はいなくてですね、まあ挫折して、学校の先生とか、純粋数学の分野にはいかなかった。私たちのような、最初っからぐれていた人間が、人類学という、ゴミだめみたいなところに行ったんです。で、そのことが私は自分の人生の中で一番僥倖だったと思っていることなんです。人類学が、どんどんどんどん文化人類学のほうに近づいていくとですね、イントロダクションの所で実験心理学に対する猛烈な批判というものをやるんです。で、その一つの論調はどういうことかという、「“仮説検証型” “!?”でもその“仮説”って、あんたの生活世界の中で考えついた仮説だろ?」って。こういう論調ですね。だから、「自分の生活世界の中で考えつけるような仮説なんて、それをいちいち検証するなんて全然面白くないよ」って。こういう論調ってけっこう多かったんですよ。で、次私が、その...二度目のぐれ方をしたきっかけは、知っている人は知っているアフォーダンス心理学に多少親しんだときですね、そのときに残念ながら結構早死にして

しまったエドワード・リード⁷⁰という人の...なんだったっけ...タイトル忘れた...生態心理学のなんたらだっけ?その本の冒頭にですね、あのですね、いわゆるですね、いままでの実験室で行われた心理学に対する激烈な批判が書かれていて、私はすっかり感動しちゃったんですね。その激烈な批判というのは、「結局、生きて動いている動物のことなんか、心理学者はなんの興味もなくて、単に、なんだ、実験座椅子みたいなものに固定したですね、頭もギチギチに固定したような動物の知覚を調べてなんになるんだ!？」って。で、私がそれを読んでちょっと震えたのが、その彼が、エドワード・リードが激烈に批判した従来の心理学っていう、「心理学」っていう単語をですね、「文化人類学」に一括変換しても、そっくりそのまま通用するって私は思ったんですね。私がもうかなり...研究歴を積んでからですね。で、もう一つ、私が...橋彌さんに悪いけどさ、心理学に対して結構隠れ”ファン”じゃなくて隠れ”敵対者”なのはさ...

橋彌

よく知っています。

菅原

大学心理の授業までやったからさ、グレゴリー・ベイトソンなんですよ。グレゴリー・ベイトソンのあれ...『精神と自然』だったかな。条件反射学説を証明するために、似もつかない研究がたくさんなされた。その中に、犬だか猿だか忘れたけれど、彼らは...何だったっけ...丸と?四角を弁別すると。で、その丸と四角の弁別基準がどこまで彼らがオペラント条件付けで習得できるのかを調べるために、その図をですね、どんどんどんどん丸を四角の方に近づけたり、四角を丸の方に近づけたりするというね。そういう実験が延々と行われたと。ベイトソンは吐き捨てるように「こういう愚劣な研究プログラムを発掘するやつは救いがたい」って書いてるんですね。だから私は、ある種の実験心理学というものに、あの...やっぱり不信感を植え付けられているっちゃうのかな、だから「”仮説検証”なんて別にどうでもええわ!」って感じ。極めつけはあれです。えーっと、もう大学闘争が終焉を迎えたときに、出版された、柴谷篤弘⁷¹の、これは高名な、オーストラリアでずっと仕事をされてた生化学者です。その人が、『反科学論』という本を書いて。で、それを私はさっき...ええ...さっき引用した私の『動物の境界』で大段的に引用しているんですけど。つまり、科学者というものは、もともとはその社会の”反逆者”であったということですね。それが、いつのまにか反逆者ではなくて体制内でお金を儲けたり、いい地位を得たりする”商売”になってしまったということに対しての告発ですね。で、この告発が、私達の世代にグッと来るのは、柴谷篤弘は、東大安田棟梁での攻防戦を、オーストラリアのテレビで観て、泣いたんですね。その泣いた理由というのは、「今、東大の教授たちが学生たちに対して行っていることというのは、私達の先輩たちが私達を学徒動員に追いやったこととおんなじじゃないか!」って涙を流した。それが、私にとってはある種決定的な記憶なんですね。私が自然科学というものに対して極めて冷淡な態度を取るようになったのは、はっきり言って、科学が、国家に...大澤さん風に言うと、資本主義に完全に従属して、しかも、従属しながらも、社会契約と外れたとことで権力を...猛烈な権力を振るっているという。そのことが、私を科学から遠ざけたという。なんだろう、「橋も棒にもかからない」というか、「煮ても焼いても」というか、ひどい話になってしまいましたが。それでね、私は大澤さんの一連の本の中で、ものすごく共感したのが、「憎しみ」ですね。憎しみというか...大澤さんは原爆のことだけ書いているけれど、私は、アメリカが...

橋彌

すみません、少し回線が...あ、私かわるいただけですかね。すみません。

⁷⁰ エドワード・S・リード (Edward S. Reed, 1954 - 1997) は、アメリカ合衆国の科学哲学者、生態心理学者である。

⁷¹ 柴谷 篤弘(しばたにあつひろ、1920-2011)は日本の生物学者、評論家である。

菅原

いえいえ。なんだったかな...そうそう、原爆の話ですよ。湯川秀樹の、大澤さんの本にもでてきましたけれど、私は原爆及び、都市無差別爆撃、かな。そうしたアメリカが戦争犯罪で裁かれないっていうのは、本当に歴史的な悲劇だと思っているんですね。このことが、あの、このことに対する憎悪というのが、日本人が全く持たないで、戦後というものを発せさせてしまったというのが、その”科学の支配”ということがセットになって、私は一番許しがたいことだと思っていますね。なので私は、昔高名な、京大の物理学の教授がですね、「先生はなんで物理学の先生をやられているんですか？」って言われたら、「それは人類の尊厳のためだよ」っておっしゃったっていうんですね。でも私は、そういう形で科学者というものは、その尊厳...まさに”摩天楼”のトップとして、祭り上げること自体が、資本主義の大きなトリックだというふうに、実は考えております。やはりアインシュタインがマンハッタン計画を進言したということは、絶対免罪されることではないのではないかって思っています。ええ、以上です。

大澤

そろそろ次の会議がZoomで始まってしまうようで

橋彌

この会も7時ですので、もうそろそろ...はい。すみません、これも1点だけ、心理学に対する反論については...これも、菅原さんにお会いしたときに

菅原

”批判反論”ね。

橋彌

しかしこれはあらゆる分野がそうで。スタージョンの法則っていう、SF作家がいみじくも作っていますけれども。スタージョンの法則、「あらゆるものの90%はクズである」っていう。その90%のものに対して批判をどうしてもしてしまう。でも、菅原さんがおっしゃっていらっしゃる研究は僕もくだらないと思っています。僕は心理学を代表しているわけでもなんでもないんですけど

菅原

今日ねえ、すごい心残りは、大澤さんと量子力学の話ができなかったというのがね、心残りだった。それはまた...

大澤

それはまた、依頼があったときに

橋彌

次回はまた、博多でお会いできたら

菅原

いや本当に。これで講演料とかもらえるらしいから、これを嫁さんとかに取られないようにじっと抱えて...

橋彌

ぜひ、現地にいらしてください。ありがとうございました。そろそろ、時間もいっぱいらしいですので、まだお話ししたいことはたくさんあるんですけども。はい、終わらせていただきたいと思います。あとは、実行委員の方にお返しして、締めたいと思います。ありがとうございました。

運営

はい、今回はおふたりとも、非常に貴重な公演をしていただいて、本当にありがとうございます。もう一回、拍手を贈りたいと思います。本当にありがとうございました。

菅原

大澤さん、体調には気をつけてね。

大澤

ええ、またお会いしましょう。

運営

会場みなさんも、長時間お疲れさまでした。非常に有意義なコロキウムになったと思います。

菅原

じゃあそろそろお開きにしますか。

齋藤

はい、本日は本当にありがとうございました、皆さん。またこのような機会がありましたら、お話を伺ったり、質問をさせていただいたりしたいと思います。ありがとうございました。
菅原・大澤・橋彌「ありがとうございました。」

図1(菅原の図をもとに実行委員会が修正・作成)

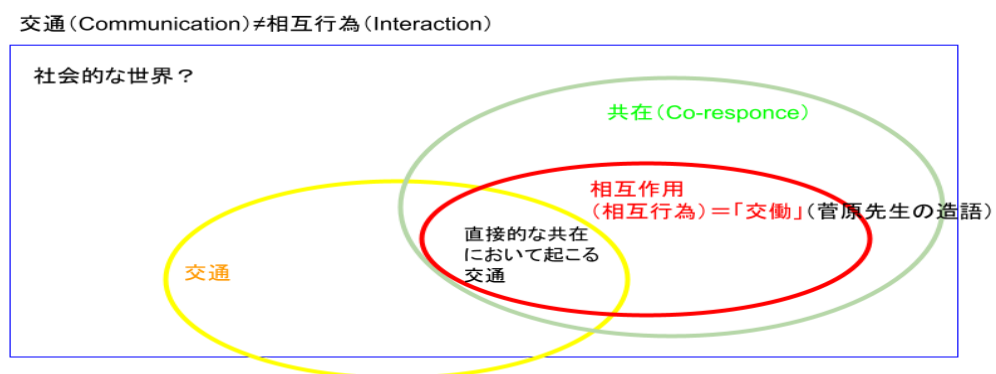


図2(菅原の図をもとに実行委員会が修正・作成)

cf. ルーマン

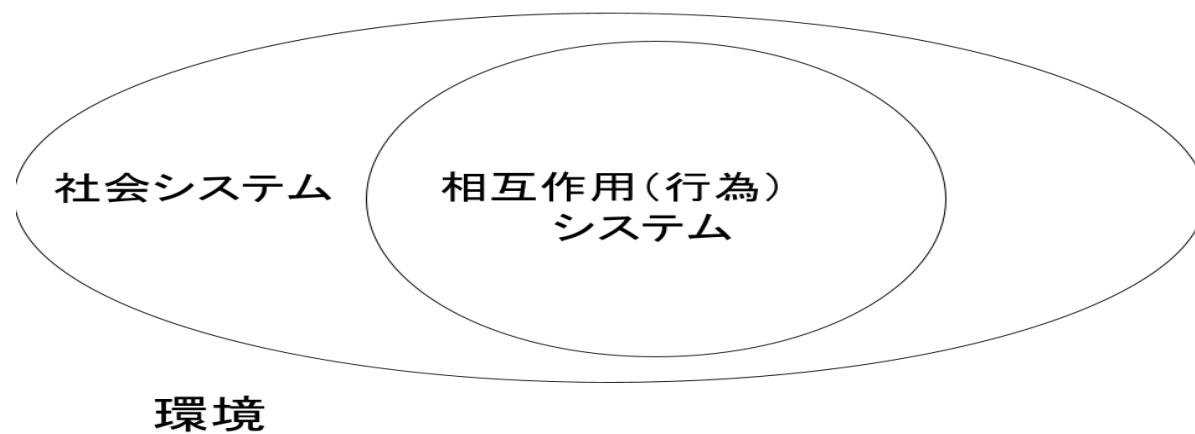


図3

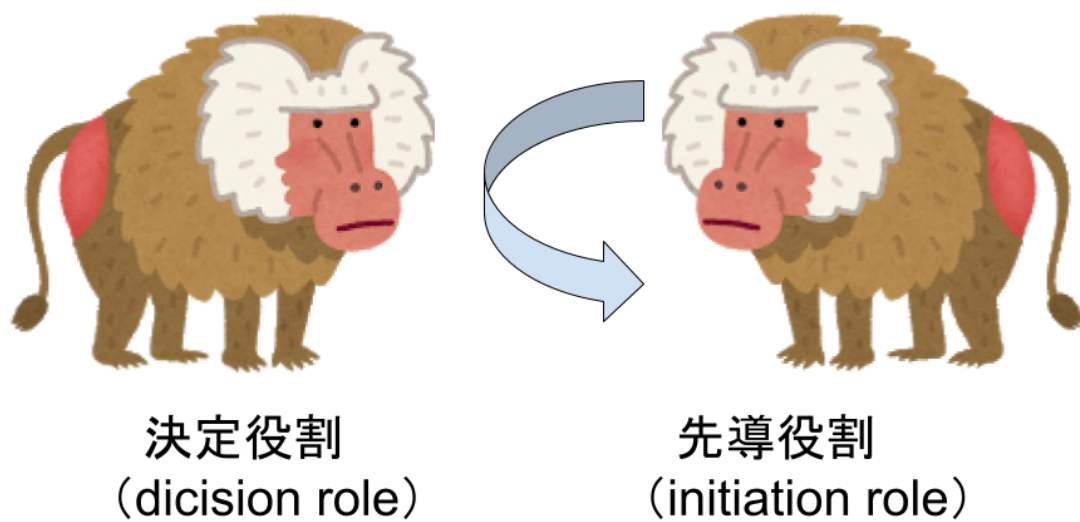


図4(大澤の作製したスライドを使用)

M. Tomasello 思考／道徳の自然誌

1. 大型類人猿 Individual Intentionality
競争をベースにした社会性
2. 初期人類 Joint Intentionality
協働の必要。個体同士の相互依存。
志向性の二層構造
メタレベルの視点 (Joint Attention, Joint Goal)
オブジェクトレベルの個体の視点
3. 現生人類 Collective Intentionality
「客観的」な世界 View from Nowhere (=Anyone)

図5(大澤の作図をもとに運営が作製)

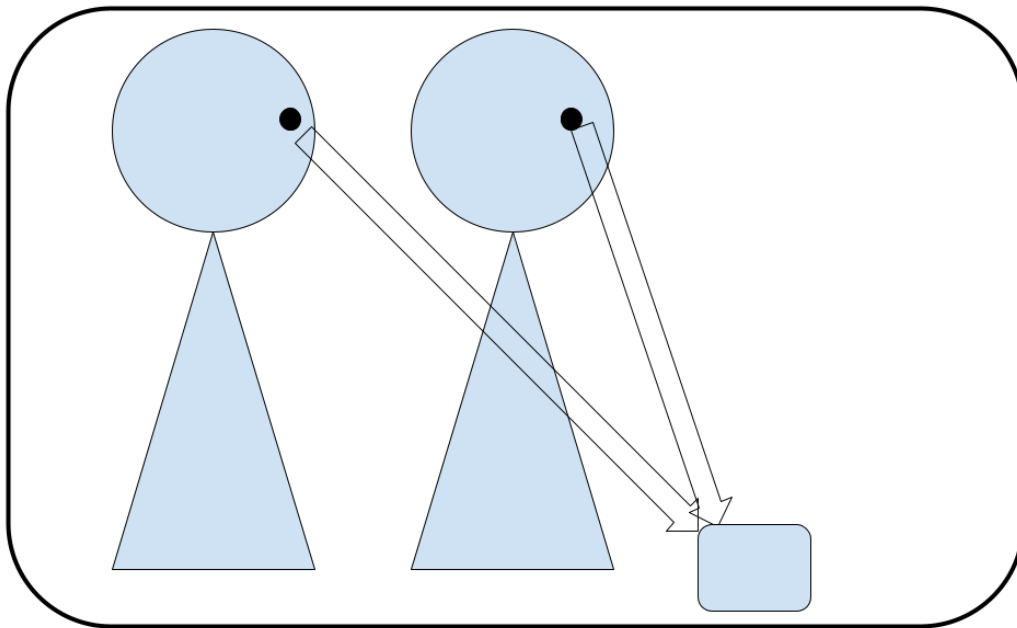


図6

